
IS（インフィニット・ストラトス） 最凶最悪の男

馬陀瓦斯刈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 最凶最悪の男

【Nコード】

N8720T

【作者名】

馬陀瓦斯刈

【あらすじ】

「世界初、男性IS操縦者。しかも二人！」の報せは瞬く間に世界中に広がる。一人はご存知織斑一夏。そしてもう一人は……見た目は女、中身は男の美少年、桐生利秋。きりゆうとしあきしかし彼は傍若無人、唯我独尊、自堕落と、とんでもない男であった。主人公が最悪かもしれない。

第一話 光るIS（前書き）

遅い時期の執筆開始なので、先人の方たちとモロ被りだったりして
るかもしれません。ご指摘などよろしくお願いします。

第一話 光るIS

「なあっ……………トシッ」

「なんだ？」

幼馴染である織斑一夏から、トシと呼ばれた少年は見向きもせず返事をする。別に意地悪のつもりでそんな態度を取っているわけではない。状況が状況なのだ。

「本当につ、こっちの道で間違っていないのかっ？」

「だーいじょぶだって、間違はずがねえよ。この街は俺の庭なんだ」

時は冬も終わりに差ししかかろうとしている二月。だというのに寒さは厳しさを増していくばかり。しかし、何故かこの二人はそんなことはお構いなしと言わんばかりに汗だくになって走っている。

今日この日が、彼らが受験する私立藍越あいえつ学園の受験日なのである。しかし、このトシの寝坊癖が今日という日にも出てしまったのだ。

トシ、というのは勿論渾名であり、本名を桐生利秋きりゆうとしあきという。彼の亡き父が、薩摩の剣士桐野利秋きりのとしあきに肖って付けた名だ。苗字の『桐生』が似ていることと、西南戦争の終戦日である九月二十四日、つまり桐野の命日に生まれたことが由来である。利秋自信も桐野を尊敬しており、剣術をやっていた。

しかし、彼の身なりはどう見ても桐野のような、勇猛な丈夫には見えない。長身ではあるが華奢な女性のようにしか見えないのだ。

肌は一般的な男性に比べると幾分白く、黒い髪が腰の辺りまで伸びている。邪魔にならないよう輪ゴムでまとめられているが、かえってそれが彼の整った顔立ちと相まって女にしか見えない。彼にはどうしてもこの長い髪を切れない理由があるのだが、話が反れてくるのでそれはまた別の機会に語りたい。

着ている男子用制服が辛うじて、彼を男だと認識させてくれているのである。

そうこうしている間に二人は試験会場である多目的ホールに辿り着いた。二人は会場の前で立ち止まると、乱れた呼吸を整えようと前かがみになって息をする。利秋は一夏より先に呼吸を整え終わるとポケットから小瓶を取り出し、その中身の液体を自らの胸元に噴射させた。

「お前、いつもそれ欠かさないよな……」

「おう、紳士の嗜みだ。桐野利秋も香水はしてたからな」

利秋は誇らしげにそう言いながら、香水をポケットに戻す。そして、未だに呼吸を整えている一夏に向かって手を差し伸べた。

「さあて、行くか。生きて出てこれたら豪勢な夕飯を奢れよ」

まるで前人未到のラストダンジョンに挑むかのような口ぶりだ。尤も、多くの冒険者（受験生）がこのラストダンジョンに次々と入って行ってるが。

「いや、ただペーパー試験受けるだけだろ」

「ノリがワリーなオメーは」

「悪かったな」

やっとの事で呼吸を整えきると、一夏は呆れ気味にため息を吐いた。一夏が回復したと認めると、利秋は歩き出した。

「まあ、さっさと行くか」

歩き続けること五分。

「なあ、トシ？」

「なんだ？ ってこのやり取りってなんかさっきもしたよな」

「そうだっけ？ まあそんなことは置いとくとして、俺たち道に迷ってるんじゃないか？」

「おお」

「即答かよ………係員の人に道聞いたのに」

「知るかよ、第一俺は外国語なんざ分かんねーしヨ」

因みに、利秋がまともに話を聞いてなかったただけのことで、係員は普通に日本語を使っていた。

「とりあえずこっちじゃねーか？ 折角だから俺はこの赤の扉を選ぶぜ」

「いや、赤くないしちよつと待てそこ『関係者以外立入禁止』って張り紙してあるじゃないか！」

青く重たげな鉄の扉には、でかでかと張り紙がされていた。

「一夏、オメー今までの旅で一体何を学んできた？ こういうのは俺らを惑わす罫で、きつとこの先にアルテマウェポンが隠されてるんだぞ」

「俺たち伝説の勇者一行になった覚えがないし、受験に來ただけじゃないか。お前緊張感が全然ないよな………って開けたらダメだろ！」

しかし利秋は既に中に入ろうとしていたので、一夏も仕方なく(?)入っていくことにしたのだった。暗い、そうとしか言いようの無い部屋の真ん中に、あるものがスポットライトを当てて置かれていた。

どっしりとした、中世の鎧のようなものが。それは何かを守るわけでもなく、そこに置かれていた。

「ほれ見ろ、やっぱ伝説の防具が隠されてたじゃねーか」

「いや、これって『IS』じゃないか？」

「IS？ あの女にしか使えないってヤツか？」

「ああ」

利秋は踵を返す。

「おい、何処行くんだよ」

「興醒めた、女にしか使えねーんじゃ俺らがいても意味ねーだろ」

「まあ、そうだけどさ」

そう言って何気なく一夏は『それ』に触れた。その瞬間、一夏は驚愕する。同時に、女にしか動かせないはずのISが光を放った。

「動い……た………？」

「え、なんで……？ まさかお前、実は女子だったとかで三丁目のママさんとかやってんじゃねーだろな！？」

「そんなわけないだろ！ 俺は正真正銘男だ！」

一夏は必死に反論しながらISから手を離す。光を無くしたISは、

再び眠りについた。

興味を取り戻した利秋は、ISの方に歩み寄る。

「ま、俺が触ったところで動くわけねーだろ……」

今度は利秋が触れる。脳裏に甲高い金属音が響き渡り、あらゆる情報が入り込んでいく感覚がした。この不思議な感覚は、一夏もたった今体験したところだ。そして、ISが再び光を帯びた。

「一夏………」

「な、なんだ？」

声のトーンの低さから、明らかに不機嫌であることを一夏は理解した。

「俺さ、こんな格好だからよく女に間違われてきただろ。正直その度にムカついてたんだが仕方ねーとは思ってたんだよ。だが機械にまで女と認識されるなんてよ……今までにねーぞこんな屈辱は……」

「お、落ち着け！ これは多分欠陥品なんじゃないか？ だからこんなところに置いてあるんだって！」

その後駆けつけて来た係員によって、このISが欠陥品ではないことを知らされる。そして、藍越学園の試験を受けるはずだった二人は何故かIS学園の試験を受けさせられ、合格してしまった。

「世界初、男性IS操縦者。しかも二人！」の話題は瞬く間に一世を風靡していった。

ここから傍若無人且つ唯我独尊の少年の物語が始まる。

第一話 光るIS（後書き）

第一話終了です。ご覧いただきありがとうございます。

因みに、桐野利秋は作者も好きな人物で、去年は映画にもなりまして。彼の名に肖っている主人公がこんなでいいのか不安ですが：

第二話 少年・桐生利秋

I S 学園の試験から数ヵ月後……………

「ぐあゝゝゝっ！ 初日から寝坊とかマジでやらかしちまった！」

そう言いながら、利秋は長い髪を靡かせて廊下を走っている。男子用制服（ここ I S 学園は制服がカスタマイズできるが）でなければ、女と見間違えそうなのは相変わらずだ。

「俺の担任は千冬姉ちゃんみてーだしなァ……………初日からこんなヘマやらかしたからただじゃ済まされねえよな」

ようやく自分のクラスである 1－1 教室前に着くと、何かを叩く音が響く。かなり通りの良い音だ。そして、それに続くように一夏の声が響いた。

「げえっ！ 関羽！？」

再び叩く音が響き、女性の低いトーンの声が聞こえた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

（一夏のヤツ、早速やられちまってんなァ……………だが、今のうちにこっそり教室に入るときゃバレねーか？）

一夏が作ってくれた隙に乗じて、関羽こと千冬の制裁を免れようと企てる。が、

「廊下に立っているその生徒、大人しく出て来い」

既にバレていた。抵抗は無駄だと判断し、戸を開いて教室に入る利秋。

「……ジャンジャンジャン」

そう言った瞬間、彼の頭に拳骨が下された。

「だから誰が関羽だ」

「い……いてエ………」

「遅刻の理由を聞いておこうか」

「じ、実はよ、学校に向かっている途中で女がチンピラに絡まれてたんだよ！」

「それで？ あと教師に敬意を払わぬとは感心せんな」

利秋のタメ口を聞き逃さず、千冬はギロリと鋭い眼光で睨みつけた。慌てて利秋は言葉遣いを正す。

「あ、それで助けに入ったんです。何とかチンピラを追っ払って、そしたら女の人からお礼になって近くの喫茶店に誘われて……」

「行ったのか？」

「そこで目が覚めました」

る。

「お、織斑先生……こりゃあ一体？」

「はあ………諸君、静かに！」

千冬の一喝によって、それまでざわめいていた女子生徒は一瞬にして静まり返る。

「すげえ……軍がまとまってるみてえだ。やっぱり関羽——」

「お前はさっさと席に着け」

「はい……」

凄みの効いた語勢に身の危険を感じた利秋は、それから先を言わずに大人しく席に着いた。一夏の後ろの席である。今すぐにでも話したい気分ではあるが、勿論そんなことをしようものならキツイお仕置きが下されることは間違いないので控えた。

一時間目が終わり、今は休み時間。唯二人の男子生徒ということもあって、早速利秋と一夏は数多くの女子たちの注目に晒されている。

利秋は特に気にも留めない様子だったが、対する一夏はどうも落着かない。

「お前なァ、こんな日にまで寝坊とかすんなよ。まさか初日から一人で過ごさないといけないんじゃないかってヒヤヒヤしたんだぞ」

「諦めろ、俺の寝坊癖は筋金入りだ。あ、でもこれからは寝坊すると千冬姉ちゃんが怖いし、少しは改善されるかもしれねーな」

「はあ、全く……………あ、そーいや知ってるか？」

「知らね」

「いや、まだ何も言ってないだろ。箒が俺たちと同じ「ちょっといいか」え？」

一夏の言葉を遮るように、女子の声がした。声の主は長く黒い髪のポニーテールの女子。

「誰かと思えば箒か？ 随分とデッカくなったなァ」

「お前は私の親戚の伯父さんか何かか！」

利秋の冗談に真顔でツッコミを入れるこの少女、二人の幼馴染であり、名を篠ノ之箒という。剣術道場の娘であり、一夏と利秋は昔そこに通っていた。

「そんで、約束覚えてるよな？」

「あ、ああ……………」

どうも様子のおかしい箒に、利秋は首を傾げたがその理由がすぐに分かった。箒は不自然なくらいに、一夏にチラチラと視線を向けている。何しろ六年ぶりに再会した幼馴染なのだから、積もる話は山ほどあるのだ。それは利秋も同じことなのだが、箒が一夏に対して抱く感情は特別なもので、それは利秋も昔から理解していた。

「ま、そりゃあいいか。とりあえず二人で話してこいよ」

「え、お前は「いいから行ってこいや!」お、おい!」

一夏の疑問に耳を傾けず、利秋はさっさと一夏を廊下へと追いやった。未だ状況も分からないまま、一夏はとりあえず箒について行く。廊下で人だかりを作っていた女子たちは、距離を取ってその様子を眺めていた。

「まさか、織斑君ってもう付き合ってたりするの?」

「それよりも桐生君が言ってた約束って何なのかしら?」

「知りたいか?」

「「「うんうん!　って、ええ!?!」」」

特に何も考えずに背いていた女生徒たちは、その声の主が誰なのか理解した途端に奇声を発した。何故ならば、その声の主が声を掛けようにも中々掛けられなかった利秋だったからだ。本人から声を掛けて来たので心の準備もままならなかったのか、思わず奇声を上げてしまった。

利秋はというと、声を掛けただけで奇声を上げられたことに若干顔

を引きつらせている。

「な、なんだよ突然……」

「ああ、ご、ごめんね！　それで、さっきの話なんだけど聞かせてくれるの！？」

「おお、どーせ他にやることなくて退屈してるしな。まず、あの二人は付き合っちゃいねーよ」

その言葉を聞き、女子の面々に安堵の表情が浮かぶ。

「だが安心はすんな。なんせ箒には『幼馴染』っつーアドバンテージがあんだからよ。ボヤボヤしてっと取られちまうぞ」

「う、うん！　あれ？　そういえば桐生君は篠ノ之さんのことを好きなんじゃないの？　二人だけで行かせて良かったの？」

「アイツはな、ライバルだ、宿敵だ！」

「どゆこと？」

「箒の家が剣術道場やってて、俺と一夏はその門下生だったんだ。そんで箒のヤツがすっげー強くてなー。結局一回も勝てないままアイツは転校しちゃって……で、そんな時に約束したんだよ。『再び会うまでに強くなってやるから、また試合をしろ』って」

過去を語る利秋の表情は嬉々としており、女生徒たちは「やっぱり好きなんじゃないか」と口々にする。だが利秋は、「あくまでも宿敵だ」と否定するだけであった。

「ということは桐生君は今はフリーってことだね！」

「おう、何なら全員側室にしてやるぞ」

「えっ……………」

丁度いい所で予鈴が鳴り出し、一夏と箒が教室に戻ってくる。そして、千冬の一喝によって、見学に来ていた他のクラスや上級生たちは蜘蛛の子を散らすかの如く各々の教室に戻って行き、同じクラスの女生徒は速やかに席に着くのだった。

第二話 少年・桐生利秋（後書き）

今宵はこれまでに致しとう御座ります（大河武田信玄風に）。

お分かりのように、箒は一夏です。あとのメンバーは話が進んでからのお楽しみ。

第三話 英国の女

「では、ここままで質問のある人ー？」

このクラスの副担任である山田真耶が呼びかける。しかし、全ての生徒が入学前にみっちり予習をこなしていた為か、手を挙げる者は誰もいない。無反応な生徒達に真耶は戸惑ってしまったが、一番前の席でうろたえている獲物を見つけると咄嗟に声を掛けた。

「織斑君、何かありますか？」

「うあっ！ えっと……………」

考え事をしていて気が付かなかったのか、一夏は変な声を出して青ざめた顔を上げた。

「質問があつたら聞いて下さいね。何せ私は先生ですから♪」

「……………先生」

「はいっ！ 織斑君」

おずおずと手を挙げる一夏に、喜色満面で真耶は応える。しかし、次の一夏の発言によってその表情は困惑の表情へとすり替わるのであった。

「殆ど全部分かりません……」

「え……………全部、ですか？ え、えっと、織斑君以外で今の段階で分

からないって人はどのくらいいますか？」

挙手を促したが、誰も手を挙げない。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

猶も困惑し続ける真耶に痺れを切らせたのか、教室の隅で控えていた千冬が一夏の方に歩み寄って訊いた。

「あの分厚いヤツですか？」

「そうだ、『必読』と書いてあっただろう」

「古い電話帳と間違えて捨てまし——」

間髪を入れず、出席簿による制裁が下された。およそ出席簿から出るとは思えない、重い音を立てて。

「後で再発行してやるから、一週間以内に覚えろ」

「はっははア、バカでエ」

一夏の後ろの席の利秋が笑っていた。すぐにその顔が吹っ飛ぶ。重戦車から砲弾が放たれるような音と共に。

「人のことを笑っておいて、お前はどうかんだ？」

「いっつつ……俺は余裕綽々っすよ、何せ参考書が届いてからは残りの中学の授業サボって家で読み漁ってたから」

余談になるがこの利秋、中学に入ってから殆ど学校をサボっていた。学校に来るとしても昼食時になってからで、行事にすら殆ど参加しない。しかし、成績はとりわけ良かったので教師達も黙認、という状態であった。

「まあ、チート・オブ・ニートってヤツっすヨ」

「自慢げに言えることか。……まあ、それならば悪いが織斑の面倒を見てくれ」

「委細承知」

「それから………今までの自堕落な生活っぷりはお前の姉から散々聞いている。が、私の手の内にいる以上、そんなことは一切許さんなからな」

「りよ、了解っす」

鋭い眼光を向けられ、利秋はたじろぎながら返事をした。

「ちょっと、よろしくて?」

「へ？」

「よろしくないでおじゃる」

二時間目の休み時間、I S特別補講を行っている二人の所に金髪の女子が話し掛けてきた。金髪、といっても染色されたものでない鮮やかな地毛で、それだけでも彼女が外国人であるということが窺える。更に、若干ロールがかった髪が、何かお嬢様っぽい。

そして、彼女の持つ高圧的な雰囲気は、まさしくI Sの台頭によって女性の地位が高くなった今の社会を表すものだった。

突然声を掛けられたことに、一夏は素っ頓狂な声を出して少女の方へ視線をやった。それとは対称的に、利秋は見向きもせずに道化じみた返事だけをした。

「まあ！ なんですよ、その態度は！ 私に声を掛けられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

一夏の返事も気に食わなかったのだろうが、それ以上に利秋の素っ気無い態度に少女は腹を立てた。その怒りの矛先を利秋に集中させる。利秋は無視することを諦め、面倒くさそうな態度で視線を向けた。

「お前、そんな偉いのか？ つーか誰なんだ？」

「まあ！？ 私を知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

セシリアと名乗った少女は大袈裟に驚き、目を吊り上げさせながら食い掛かる。

「どうなんだよ、一夏？」

「俺に振るのかよ!？」

食い掛かってきたセシリアを受け流すように、利秋は横に座っている一夏に尋ねた。

「まあ……知らないな、っていうかちよつといいか？」

「ふん、下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

真剣な眼差しで、一夏はセシリアを見据えながら聞いた。

「……………代表候補生って、何？」

その瞬間、セシリアと聞き耳を立てていた周りの女生徒が盛大にずっこけた。

「うおっ、吉本新喜劇かよ」

「あ、あ、あ……………」

「「『あ』？」」

わなわなと震えながら、言葉にならない声を繰り返すセシリアに二人は怪訝そうに尋ねる。セシリアは我に返ると、凄い剣幕で一夏の方に詰めかかった。

「あなた、本気でおっしゃってますの!？」

「おう、知らん」

しれっとした表情でそう言う一夏に、頭痛を抑えるかのようにセシリアはこめかみに人差し指を当ててぶつぶつ呟いた。

「信じられませんわ! 日本男性というものは、これほど知識に乏しいものなのかしら……常識ですわよ! 常識!」

「おい」

不満そうに利秋がセシリアに呼び掛ける。

「何かしら?」

「日本の男性をバカにすんのはいいとして俺をバカにしてんじゃねえよ」

「そこは普通、逆じゃないのかしら………浅学な上に自己中心的だなんて、もう呆れて物も言えませんわ」

「うっせー、セシウムだかセシル・ローズだか何だか知んねーけど――」

「セ・シ・リ・アですわ! 人の名前を間違えるだなんてこれだから極東の猿は………」

互いに怒りのボルテージが頂点に達してしまったのか、それからは一言も発することなくただただお互いに睨み合うのみ。寸分たりと

も視線を反らすことなく、相手の目を見つめる。その様は竜虎相打つとも、両雄対決とも形容できそうだった。

「あのー、それで代表候補生って……………」

（怒りのこもった）熱い眼差しを送り合っている二人に一夏が恐る恐る尋ねると、二人はハツとして一夏の方を見た。すっかり忘れていた、と言いたげな表情を浮かべる。

（あれ、この二人さっきまで睨み合ってたのに妙に息合ってるな？）

しかし、それを言葉に出したりはしなかった。言えばきつと、凄い勢いで反論されるかもしれないから。

「ああ、代表候補生ってのは国家代表 I S 操縦者ってヤツの候補生として選出されるヤツのことを言うんだ。まあ、言葉通りのことだな」

「なるほど……」

「つまり、エリートなのですわ！」

セシリアは声高らかに言い、一夏の鼻に当たるのではないかという距離まで指を突きつけた。

「本来なら、私のような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでも奇跡！ 幸運なのよ！ その現実をもう少し理解して頂ける？」

「頂ける？ 一夏？」

「だからなんでそこで俺に振るんだよ！　　っていうかお前も聞かれてるんじゃないかトシ！」

「あなた方……馬鹿にしていますの？」

自分の問い掛けに返事もせずふざけあう二人に、再びセシリアは機嫌を損ねる。

「おう、バカにしてる」

「あなた――」

「高々代表候補生ごときで選ばれた人間のつもりかよ。せめて国家代表とやらにでもなってから威張ってみやがれってんだ。代表候補生止まりに甘んじて威張りたいてんなら別にいいけどな」

「ッ……………」

散々に捲くし立てられ、しかし言われていることが正論だった為にセシリアは悔しそうにしながらも反論できないでいる。

「ただ、まあ」

「はい？」

「国家代表になろーが俺に威張ることは許さん。俺の方が絶対的に偉いから」

真顔で利秋は、自分を親指で指しながら言う。

「本っ当になんなんですよ、あなたという人は……………」

「人間国宝じゃ」

自信満々に答える。

「トシ、人間国宝の意味間違ってるぞ」

一夏の言う通り、人間国宝は歌舞伎などの芸能分野に長ける人だけが認められるものだ。因みに、男でISが動かせるからと言って、利秋がそんな認定をされているなんてことはない。

「かたやISの知識は皆無、かたや女性に対しての礼儀がなっていない、ISを操縦できる男性ということで少しくらいは知的さを感じさせると思っていましたけど、期待外れですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

「それを言うならこっちも期待外れだっつーの。顔がいいから側室にでもしてやろうと思ったけど性格が最悪じゃねーか！」

「お前またそれ言ってるのかよ……………」

一夏は呆れ気味に言う。一時限目の休み時間もだが、利秋は会う女を悉く側室扱いする。一夏の記憶では初めて会った頃、つまり小学一年の頃からそうであった。そんな年齢でどうしてそんな言葉を覚えたのかは謎だが、本人はやましい気持ちで使っていない。せいぜい、女友達程度の意味合いだ。

それだけにタチが悪い。ただでさえ顔立ちが整っているのにそんな

ことを言われれば、大抵の女性が落ちることは必然。しかし、一夏は利秋が特定の女性と交際している所を見たことが無かった。利秋の側室呼ばわりを本気にした者が、その本心を知って幻滅したからだ。

その為、初めは女子人気の強かった利秋が、後半になると完全な嫌われ者になるのだった。

（こっちでもまた同じこと繰り返しやすいだろうから………）

「ふん。まあでも、私は優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ。ISのことで分からないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

得意満面のセシリアに、一夏は何気なく言った。

「あれっ？ 俺も倒したぞ、教官」

「はアっ!？」

セシリアは驚愕した。

「倒したっていうか、いきなり突っ込んで来たのをかわしたら、壁にぶつかって動かなくなったんだけど……トシはどうなんだ？」

「俺に振って来やがって、仕返しのためか。……俺は戦う前に教官が怖気づいてしまったんだな。不戦勝ってトコよ」

そう言い、利秋は得意げにガッツポーズをする。

「試験でそれって大丈夫なのか……」

「んー、なんか知らんが大丈夫らしいぞ」

「わ、私だけと聞きましたが……」

未だに驚きの表情を湛え、ワナワナと震えながらセシリアが聞いた。

「女子では、ってオチじゃないのか？」

一夏の一言だけでもセシリアにとっては聞き捨てならないことだったが、次の利秋の言葉で再び彼女の怒りのボルテージがマックスに達した。

「それはないんじゃない？ 男子は俺ら二人しかいねーんだから区別する必要もないだろ。要はこいつが情弱だっただけのことヨ」

「あ、あなた！ 言ってくれますわね！ 一度痛い目に遭わないと分からないのかしら！？」

「お、落ち着いてくれって。これでも普通の態度を取ってるつもりなんだ」

「これが落ち着いていられますか！」

なりふり構わず憤慨するセシリアを一夏はとりあえず宥めようとするのだが、一向に治まる気配はしない。そんな時、困惑する一夏を救うかのように三時限目開始のチャイムが鳴るのだった。

「くっ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって

!？」

「よくって!？ 一夏？」

利秋は咄嗟に一夏の方へ振り返り、セシリアと同じような怒りに満ちた表情で食って掛かった。

「だーかーらー！ 俺に振るな！ 明らかに喧嘩売られてるのはお前の方だろ!？」

「棟梁の露払いをするのが配下の将の役目じゃ」

「俺、お前の配下になった覚えがないんだけど……」

「しかしあのアマ、邪魔しやがって……勉強できなかったじゃねーか」

一夏の反論には答えず、恨めしそうに利秋はそう呟いた。

第三話 英国の女（後書き）

セシル・ローズは中学の歴史の資料集かなんかで名前を知りました。
「アフリカのナポレオン」ってことしか知らんなア。

第四話 貴族暴発

三時限目。今まで教壇に立っていた真耶に代わり、今度は千冬が教壇に立って授業を行う。その前に、再来週のクラス対抗戦に出場する代表者を決める話になった。

クラス代表者は委員会への出席なども義務付けられており、一度決まれば一年間は変更されることがない。要するに面倒な仕事をこなさなければならぬ。

「自薦、他薦は問わない。誰かいないか？」

自分が推薦されてはたまらないと思い、利秋は何処に隠し持っていたのか唐草模様の手ぬぐいでほかむりをして目立たないようにした。が、その行動が仇になったのか、

「はい、私は桐生君を推薦しますっ♪」

「ぬぁにっ!？」

「私もです」

「なんですとっ!？」

次々と女子から指名された。

「他にはいないのか？ いなければ無投票当選ということ——」

「待った！ だったら俺は織斑一夏を推薦するぜっ！」

「ええっ!？」

ほっかむりを解いて勢いよく一夏をアピールする利秋。更に言葉を続ける。

「何故ならば、織斑君は誰に対しても平等に優しく接し、面倒見が良く、何事に対しても一生懸命に取り組むことができるからですっ!」

「あっ、それじゃあ私も織斑君を推薦します」

「私も私も!」

利秋の述べた推薦理由に賛同するかのように、次々と女子達が一夏の名を挙げる。焦り出した一夏が仕返しと言わんばかりに立ち上がって発言した。

「俺は、桐生君を推薦します! 何故ならば……何故ならば………」

利秋の存在をアピールすべく、推薦理由を述べようとしたが何も思いつかない。一般的な視点から見て、利秋にマイナスイメージは幾らでもあれど、プラスイメージが全くとっていい程ないからだ。見た目が良い、と言おうとしたがそれはクラス代表の素質には何ら関係がない。

「はははは、どうよ一夏、これ程推薦しにくい人間もないだろ!」

「くそっ……………」

自慢げに言うが、普通なら恥ずべきことだ。

「落ち着け馬鹿者共。幾ら理由を述べようが、そんなものを選定の基準にしたりはせん。さて、候補者はこの二人だけか？」

その時、勢いよく机を叩く音が響いた。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

机の音に続いて訴えかけるような甲高い声が響き、教室中の注目を集めた。あのセシリアだ。立候補するのかと思ひ、利秋達は期待を込めて静観することにした。が、そうではなかった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットに、このような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

身振り激しく訴えるセシリア。その様子はまるで革命家の演説のようではあるが、言っていることには魅力的なものを感じられない。利秋はその様子を見下すような笑みを浮かべて見続けていた。

「大体、文化としても後進的な国に暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で――」

「だったら帰っちまえばいいじゃねーか」

関係のない方向へと侮蔑の言葉を拡大させていくセシリアに、しれっと利秋が言い返した。一夏も何か言いたげだったが、先を越された為にセシリアを睨むだけ。

「な！　あなた、簡単に言うけどこっちは物見遊山でこんな島国に
来ているわけではないんですよ！？」

「だからどうした。苦痛なんだろう？　んなもん我慢するよりやりた
いことやってる方が――」

「二時限目の織斑先生のお話を聞く限り、あなた、相当だらしない
生活を送っていらっしやったようですね！　この国では『ニート』
と言うのかしら？　そんな人に私の気持ちなんか分かったものでは
ありませんわ！」

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」
えんじやぐすく　こうこう

「なんですの！？」

「陳勝ってヤツの言葉で、小鳥に大鳥の気持ちが分かってたまるか
ってことヨ。俺はただニートやってたんじゃねえ。他のヤツらがム
ダに過ごしてる間、好きなだけやりたいコトやって能力を高めてた
んだ」

尊大に語る利秋。しかし、言っていることは一般的なニートの言い
訳と変わらない。

「ま、んなことは置いといて。俺がオメーなら迷わずとっとと国に
帰って、味のないスコーンでも食いまくっとるわ」

その一言にセシリアは怒りを露わにする。

「味のないって……あなた！　私の祖国を侮辱しますの！？」

「そっちこそいつまでも自分の国が一番だなんて思ってたんじゃないかねえ。外国に来たらでえッラしてないで畏れんのが常識だろが」

それからは互いに言葉を発さず、沈黙の睨み合いが続く。本日二度目となる両雄対決だ。

「決闘ですわ！」

暫くの睨み合いの後、先に口を開いたのはセシリアの方だった。振り翳した右手を勢いよく振り降ろし、利秋を指差して決闘を申し込んだ。

「おー、やるかよ」

「言っておきますけどわざと負けたりしたら私の小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

「テメーこそ手ェ抜いたら『性奴隷』にすっぞ」

「なっ……！」

利秋の突然の爆弾発言に周りの女子生徒や真耶は顔を赤らめ、言われた本人であるセシリアに至っては茹蛸のように顔が真っ赤になっていた。その瞬間、砲弾の放たれる音が響き利秋が崩れ落ちる。

「馬鹿者が、時と場所を考えて物を言え」

「……すみません」

千冬が鉄拳を下していたのだった。気のせいか、その顔はちょっぴ

り赤い。利秋は痛みを堪えるように頭を抑えその場にうずくまる。しかし、それだけでは気が済まなかったのか、セシリアは真っ赤な顔のまま怒鳴る。

「も、もう我慢なりませんわ！ 本当ならハンデを付けて差し上げるつもりでしたが、決めました！ あなたを完膚なきまでに叩き伏せますわ！」

「ま、まずいよ桐生君……今からでも遅くないから謝ってハンデ付けて貰った方がいいよ」

「そ、そうだよ。男と女が戦争したら男の方が三日も持たないって言うし………」

セシリアの逆上ぶりに懸念した女子達が、利秋にそう促す。

「それがなんだってんだ。決闘にハンデなんかいらねえ。それに、俺は今まで喧嘩や勝負事において全勝無敗じゃ」

自信満々にハッタリをかますが、依然うずくまったままの姿勢でそんなことを言っても説得力がない。そして、それを聞いていた箒は、

（お前は私に勝ったことがないだろ………）

と心の中でツツコミを入れた。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。桐生、織斑、オルコットはそれぞれ用意をしておくように」

「ええっ！？俺も!？」

「すっかり蚊帳の外になってしまっていたがお前も一応候補者だから、序でにだ」

「蚊帳の外……………一応……………序で……………」

千冬が淡々と述べた言葉を、一夏はうなだれながら繰り返した。

「それでは、授業を始めるぞ。桐生は早く席に着け」

「無茶言わんでくださいよ……………」

利秋はまだうずくまっていた。

三時限目終了のチャイムが鳴った。「ここまで」と千冬が教室から出ると、一夏は背後の利秋の方へと振り返った。

「お前なァ、なんで俺には何も言わせてくれなかったんだ」

「ああ？」

「さっきあのセシリア・オルコットと言い争ってたことだよ。俺も言い返したいことがあったのに、俺の言いたいこと全部お前が持っていたからなあ」

正義感が強い一夏はあの時、自分の生まれ育った国を侮辱されたことで利秋以上に憤慨していた。だが、会話に入る余地が見つからなかったのずっと体を震わせることしかできなかったのだった。

「バカ言え、あそこでオメーまで喚いたりして印象悪くしたらどうすんだよ。お前はクラス代表にならねーといけねーんだろが。汚れ役は俺だけで十分だ」

「トシ……………」

親友の気遣いに気付いて一夏は思わず感動しかけたが、その裏に隠された目論見に気付く。

「お前それ、俺にクラス代表を押し付けたいだけじゃないか！」

「あったりめーだ。なんで中学の頃半ニートだった俺が、んなめんどいことをやらにゃなんのだ」

「お前ってヤツは、はあ……さっきの『性奴隷』発言もだけどさ、今はまだ大丈夫みたいだけど気を付けないと中学の時みたいに避けられてしまうぞ」

「構わんヨ、俺は乳繰り合ってるヒマがあんならテメーのやりたいことやっとかう方がいいわ」

「全く……ところで、来週の決闘は大丈夫なのかよ？」

これ以上は言っても無駄だと判断し、一夏は話題を変えた。

「心配は要らん、何しろ俺は桐野利秋の子孫じゃ」

「勝手に子孫名乗るなよ」

念のため述べておくが、あくまで桐野利秋の名前を肖っているだけで子孫ではない。

（そういや桐野利秋って、『人斬り半次郎』って異名が付く程の剣の達人なんだよな。自顕流^{じげんりゅう}って流派の使い手なんだっけ。トシも道場にいた時は篠ノ之流の修行を無視して『横木打ち』をしていたなあ）

自顕流の打ち込みには『猿叫^{えんきよう}』と呼ばれる、奇声にも似たような掛け声が伴われる。利秋は打ち込みの度に子供のものとは思えない大きな声を上げていた。幼かった自分や箒はともかく、千冬までもがその様に呆然としていたことを一夏はふと思い出した。

「俺の心配なんかしてっけど、お前はどーなのよ？」

「お、俺は……あの後に意気込んで授業受けようと思ったんだけど、全然頭に入らなくて……………」

利秋は授業中、目の前の一夏が何度も頭を抱えているのを見ていた。

「まー、あの参考書読んでねーんだったらそうなるわな。だがそこは安心しろ。千冬姉ちゃんの頼みでもあるんだ。この一週間で遅れ

た分も取り戻させて、オメーを『IS抜きじゃ生きられない人間
にしてやる』

「流石にそこまでは……っていうかそれもう廃人だろ、千冬姉そこ
まで頼んでないし」

「冗談に決まってるだろ。とりあえず時間が惜しいからさっさと進
めっぞ」

「あ、ああ……………」

そうして二人は机の上の教科書を開いた。

第五話 放課後の話

「うう……………」

時間は放課後。一夏は机に突っ伏して青息吐息の状態である。利秋は窓の外の夕焼けを眺めながら、暢気に歌っている。教室内にはこの二人しかいないのだが、廊下には飽きずに女子生徒達が目だかりを形成して二人を見に来ていた。まるで教室が動物園の檻のようである。

「勘弁してほしいよな……………」

やつれきった声で漏らす一夏。それとは正反対に、利秋は弾けるような笑顔で女子の集団に手を振る。女子達は喧しく声を上げ、「私に手を振った」とか「私よ」などと言って争う。

「あれ、お前女子と仲良くする気ないんじゃない——」

「曲解すんな、乳繰り合う気はないってだけだ。側室なんだから仲良くやってくさ」

「俺はお前の言ってることがいまいち理解できねえよ……………」

「あ、織斑君、桐生君。まだ教室にいたんですね、良かったです」

二人の背後から名前を呼ぶ声がしたので振り向くと、教室の出口に真耶がいた。

「お、山田先生。どしたんすか？」

「ええ、お二人の寮の部屋が決まったんですよ」

そう言って書類とキーを手渡す。書類には生活面での注意事項などが羅列されていた。事細かなことばかり書いてあって頭が痛くなりそうだが、その中でも特に「生活の乱れは心の乱れ。規則正しい生活を心掛けよ」という項目を見て、利秋は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「あれ？ 俺達の部屋って決まっていなかったんじゃないですか？
一週間程は自宅から通学するように聞いてたんですけど」

「ま、当然の処置だよな」

一夏の質問に、未だに不愉快そうな顔の利秋が答えた。

「え？ 当然ってどういうことだ？」

「考えてもみろ。俺らは世界でたった二人のISを動かせる男なんだ。そんなヤツを世間のヤツらが無視するワケねーだろ。現に此間までマスコミがうじゃうじゃ来やがったしな」

「ああ……あれは応えた」

『世界初、男性IS操縦者』のニュースが全世界で流れ、一躍有名人となった彼らの自宅には大勢の人間が押し寄せてきた。マスコミ、各国大使、遺伝子工学の研究者……彼らが詰め掛けてくる度に、一夏は一人ずつ丁重にお断りし、利秋は睥睨して引き返させた。

「まあ、アイツらなんてまだ生易しいもんだ。厄介なのはなんたら

研究所とか、ああいう連中だ。はつきし言って俺らはいいい研究材料だから、下手すりゃ実力行使とかやりかねねえ。俺はともかく、オMERなんて簡単に捕まっちゃうのがオチだ。だったら人目に付くような自宅通学なんかさせるより、とっとと寮住まいさせとく方がいいってわけだ」

「な、なるほど」

「す、鋭いですね桐生君。よくそんなとこまで頭が回りましたね……」

「ニートでしたから推理小説だとか漫画を読んで推理力を付けてたんスよ」

「そ、そうなんですか。それで桐生君の言ってることは正解なんです、実はそういった理由で政府から特命が来てるらしいんですよ」

真耶は利秋のニート発言に苦笑いをしたが、『政府』というくだりから咄嗟に二人の顔を近付けさせて耳打ちする形で言った。

「無理矢理部屋割りを変更しちゃったので、相部屋になるかもしれませんが……一ヶ月もすると個室が確保できるかもしれないのでそれまでは我慢してくださいね」

「先生、いい匂いっすね」

「ふええっ!?!」

何の脈絡もなしに利秋からそう言われ、真耶は思わず声を上げる。

「ど、どうしたんですかいきなり!？」

「いやあ、いつまでも密着状態なんでつつい匂いが。んで、どこ
の香水っすか？ 俺、安物しか使わねーから興味があるんすよ」

利秋に指摘され、慌てて距離を取る真耶。

「も、もう桐生君！ 先生で遊ばないでください！」

涙目で真耶は抗議の言葉を訴えたが、利秋はカラカラと笑うだけだ
った。

「そういえば先生、部屋は分かりましたけど荷物は一体？ 家にあ
るから一度――」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

いつの間にやら、出入り口の戸に寄り掛かるように千冬が立ってい
た。今まで利秋たちの方に注目していた女子達は、標的をそちらへ
と変える。

「きゃああああ！ 千冬さまァ！」

「夕日に映える千冬様も素敵だわー！」

「全く、こんな時間まで馬鹿騒ぎして……よく飽きないものだ」

鬱陶しそうに、ため息を吐いて千冬は言う。そこに目を血走らせて
利秋が詰め寄った。

「織斑先生！ 荷物に！ 漫画は含まれていますか！？ P N 3は！？ P N Pは！？」

「そこまで面倒が見れるか。着替えや携帯電話の充電器だけだ。もつとも、お前は携帯電話を持っていないらしいから着替えだけだな」

窓の方へと向かって再び歌いだす利秋。さっきとは違って声に生気が無く、まるでゾンビの呻き声のような低い歌声だ。その様を真耶と一夏は苦笑いで、千冬は呆れたような顔をして見ていた。

「えーと……1025はここか。あれ、開いてる？」

一夏は自分の部屋を見つけると、扉に鍵を差し込んだ。しかし、鍵が掛かっていないことに気付く。

「無用心だな。ま、いいか。それじゃトシ、また後でな」

利秋は娯楽がないことを嘆いてまだゾンビのような声で歌っていた。足取りもユラリユラリと幽霊のようである。因みに、彼の部屋は隣の1026号室だ。

「まあ、気持ちは分からないでもないけどそろそろ気を取り直せよ。なんでもこのプリントによると、部屋にパソコンがあるみたいだぞ」

「へっ、こーいうトコのパソコンってのは大抵ゲーム向けのスペックじゃねーのがオチだ」

やさぐれ顔で利秋は答えた。

「人が慰めてるのに捻くれたことを言うなよ……………まあ、また夕食のときな」

「おー」

一夏が部屋に入っていくのを見て、利秋も自室の扉の鍵を外し、部屋に入った。

（誰もいねーな。「相部屋になるかも」って話だったし、必ずしもそうじゃないってことか。つーことは丸々この部屋を一人で使えるのか）

一人で使うには広すぎる部屋を見回すと、利秋の視界に変わった形のコンピューターが映り込む。

（こいつが一夏が言ってたパソコンか……変な形してっけど、とりあえずつけてみっか）

あまり大きな期待を持たずに電源ボタンを押すと、起動音がせずにディスプレイに鮮明な画面が映し出された。予想していた以上に画面が綺麗だったことに、利秋の目が輝く。

（こいつ、普通のヤツよりスペック高そうだな……ネットゲとかできるんじゃないか）

利秋がパソコンに興味を持ち始めると、隣から騒ぐような音が聞こえてきた。一夏の部屋の方だ。

（相部屋だったのかアイツ。やたら盛り上がってやがんな）

当の一夏は絶賛死闘中なのだが、利秋がそれを知る由もない。すっかりパソコンの虜になり、他のことなどどうでも良くなってしまっているからだ。早速ウェブブラウザを起動させ、暇潰しのできるゲームを探す。

（試しにコイツをインストールしてみっか）

彼が選んだのは、ネット対戦型の麻雀。普通の麻雀ゲームと違い、ビジュアル面はかなり力を注いでいる。画面全体が3Dで描画されており、迫力のある演出で人気を博している。しかし、ある程度のスペックを満たさなければまともに動くことがない。

（おっ、もうインストール終わってやがる。相当ハイスpekだぞこいつ）

その時、また隣から暴れるような音が響いた。さっきよりも音は激しい。それでも利秋の興味が削がれることはなかった。

（次の休日に漫画とかこっちに持ってくるとして……暫くはこいつで凌げそーだな。『人斬り全次郎』の血が騒ぐぜ！）

『人斬り全次郎』とは、利秋がネットでゲームをする上で使うニッ

クネームである。彼の名前の由来になった桐野利秋の二つ名、『人斬り半次郎』をもじったものだ。こうして隣で親友が死闘を繰り広げていることにも気付かず、彼は娯楽に励むのだった。

「ロン！ リーチ、イーペーコー、ドラ1！ 40符3翻で5200点！ よっしゃ逃げ切ったア！」

利秋は暫くの間ネット麻雀で遊んでいたが、

「そーいやそろそろ晩飯の時間だな」

夕食の時間になったことに気付き、部屋を出た。そして、隣の部屋にいる一夏を呼ぼうと扉の前に立つ。そこで思わぬものを見た。

「うおっ、んだよこりゃ……刀か？」

扉には刀で開けられたような穴がいくつもあつた。それだけで、室内で何か重大な事があつたということが分かる。

「お、おいっ！ 一夏！？ オメーどーしたんだ！？ まさか相部

屋のヤツに手エ出して返り討ちにあったとか――」

「そんなことはない」

外から利秋が叫ぶと、部屋からは一夏ではなく箒が出てきた。部屋着なのかどうかは分からないが、剣道着を着ている。因みに利秋はというと、自分の部屋に入ってからはずっとパソコンで遊び続けていたので制服のままだ。

「箒……ああ、オメーが一夏の相方………成程な」

「な、何が成程なんだ」

「ん、オメー、一夏に襲われそうになったから返り討ちにしたんじやねーのか？」

「違う！ 変なことを言うな！」

顔を真っ赤にし、目を吊り上げさせて反論する箒。

「ア、ア、アイツが私の下着に触れて、変なことを言ったから成敗しただけだ！」

「ふーん、下着ねエ………」

利秋のしたり顔を見て、箒はしまったと言いたげな顔をする。そして、咄嗟に手に持っていた木刀を両手で振り翳し、渾身の一撃を利秋に下すのだった。利秋はそれを片手で受け止める。

「んだよアブねーなア」

「お前も暫く見ないうちに変態趣味に走るようになってたとはな…」

「一夏よりはマシですウー。それよかどんだけ力入れてもムダだぞ。剣の勝負じゃお前に勝った事はねーが力には自信あっからヨ」

しかし、箒は更に押す力を強くしだした。このままではどうにもならないと思い、利秋は押し返す力を急激に緩めて箒の木刀を受け流した。当然箒はつんのめるので、こけてしまわないように利秋は彼女を受け止め、立たせた。ワナワナと体を震わせ、箒は再び木刀を振り翳す。

「お・ま・え・と・い・う・や・つ・は……」

「おいおい、落ち着けよ。そういや、朝聞きそびれちゃったが約束覚えてるだろ？ それで果たし合おうじゃねーか」

「……剣術試合か。ふん、私が絶対に勝つ。その時お前を成敗してやろう」

「上等だ。そんじゃ、一夏が死んでんなら俺一人で行きますかア。お前も一緒行くか？」

「私はいい」

「へいへい、そんじゃあな」

そう言って利秋は背を向けると、軽く挙げた右手をプラプラ振って食堂へと向かって行く。箒は、利秋の姿が見えなくなるまでずっと

その背中を睨み続けていた。

一年生寮の食堂。六人掛けの席に、特に誰とも同席せず利秋は夕食を摂っている。机の上にはおおよそ二人分程の食事が広げられているが、別に誰かを待っているだとかそういうわけではない。この量を一人で平らげるのである。その利秋に、ある者が声を掛けた。

「桐生君、相席いいかな？」

利秋に声を掛けてきたのは女子三人組。その内の一人は、着ぐるみのような変わった部屋着を着ていた。名前は、のほとけ ほんね布仏本音。

「ウム、よきに計らえィ」

それを聞いて本音ともう一人の女子が小さくハイタッチをした。遠巻きに利秋の様子を窺っていた女子達は、

「あーん、早く声掛けておけば良かった」

「まだ慌てるような時間じゃないわ」

「明日は絶対声掛ける」

などとざわめいていた。

「そっちは織斑君の分？」

「いんや、全部俺の分。あと一夏のヤツは死んでる」

その発言に女子達は驚いたが、すぐに利秋が「寝ている」と言い直したので安堵の息を漏らした。

「は、早寝なんだね。それにしても、そんなに食べるんだ……」

「これでも晩飯は抑えてんだよ。普通ならもつと食うんだけどな」

「この量よりももっと!？」

「おー。千冬姉ちゃんがやってんのを真似してみたんだが、どーも晩飯を抑えとくのが健康維持に良いらしくてな」

そう言うと、利秋は咄嗟に辺りをキョロキョロ見回した。

「どうしたの？」

「いや、千冬姉ちゃんのことだからどっかで聞き耳立ててて、「学校では織斑先生だ」とか言ってぶん殴られねーかって……」

「あっははは、考えすぎじゃない？」

「いや、千冬姉ちゃんの地獄耳は舐めんな。昔、千冬姉ちゃんに剣

術勝負で勝てなかった腹いせに陰で「ヤマンバ」って言っただけで……うお、思い出しただけで寒気がしてきやがった」

青ざめた顔で利秋は言う。

「へ、へえ……………」

余程のことを味わったのだろうと察知し、彼女らは苦笑いした。

「はいはいー！ 『きりうー』に質問！」

本音が元気よく手を挙げる。その手は、長すぎる袖に隠れて見えることが無かった。

「おう、なんだ？」

「来週のクラス代表決定戦に向けて何か意気込みとがありますかー？」

「意気込みね……負ける気は全くなーよ。だからって手は抜かねェ。アイツが決闘の意味をどれだけ理解してるかは知んねーが、受けて立った以上は全力でやらねーとな」

「すごい自信だね！ でもでも、相手は代表候補生だよ？」

「俺は勝負事で負けたことがねえ」

「あれ、桐生君って篠ノ之さんに勝ったことがないんじゃない？」

不意に突っ込まれ、利秋はギクリと表情を引きつらせた。

「な、何やってんだよ。早くメシ食わねーと冷めちまうぞ！」

そう言って利秋は止まっていた箸を進めるのだった。

（（誤魔化した……………）（）

第六話 1-1 桐生騒動

時間は入学式翌日の四時限目。昨日、夜遅くまで遊んでいた利秋は一人睡魔と戦っている。一度睡魔に敗れて夢の中へと行ってしまったが、千冬からの鉄拳制裁によって現へと引き戻された。そして、二度も同じ痛みを喰らうわけにはいきまいと、何とか眠りを堪えられるようになった。

因みに、夜更かしをしたにも関わらず寝坊しなかったのは一夏が起こしに来たからである。ISの知識面をカバーすることに対しての報酬として、利秋が頼んだ。もっとも、本人曰く「部下としての役目だからやって当然のこと」らしいが。

「ところで織斑、桐生。お前達のISだが準備まで時間が掛かる」

「へ？」

「ほう」

「予備機がない。だから少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に？」

「それって政府からの支援ってことだよな」

「いいなあ、私も早く専用機欲しい！」

それに反応を示したのは、当人達ではなく周りの女子達だった。因みに、一夏はどういうことなのか理解できておらずに困惑しているし、利秋は当然だと言わんばかりの態度を取っている。

「教科書六ページ。音読しろ」

辺りをキョロキョロ見回している一夏を見兼ね、千冬は溜息混じりに一夏に促した。一夏の音読した内容を要約すると、世界に存在するIS467機の心臓であるコアを作るのは篠ノ之博士のみ。しかし、博士が一定数以上のコアを作れるのを篠ノ之博士のみ。国家、組織などは限られた数のコアを使用して研究などを行っているのである。

「つまりそういうことだ。本来なら専用機は国家や企業に所属する者にしか与えられない。しかし、お前達は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった」

「まあ、当然のことよのオ。この天才に専用機の一つや二つはついてきておかしくあるまい！」

得意気になって利秋はカラカラと笑う。当然千冬がそれを見逃すはずもなく、手に持っていた出席簿を見事に彼の額に命中させた。利秋は大きな音を立てて、椅子ごと後ろに倒れ込んだ。

「自惚れるな、馬鹿者」

「すみません……」

そこに一人の女子が、おずおずと質問する。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

間髪を入れず、女子達の驚きの声が響き渡り、窓際の席の箒に視線が集中する。そして、女子達は次々と質問を投げかけるが、箒は不快そうに顔をしかめさせるだけだった。

「す、すごい！ このクラス有名人の身内が二人もいるじゃない！」

「篠ノ之博士って今行方不明で、世界中の企業とかが探してるんですよ？」

「どこにいるのか分からないの？」

「……あの人は関係ないっ！」

突如箒が怒鳴りだしたことにより、一瞬にして教室の中が静まり返った。一体どうしたのか、騒ぎ立てていた女子達は呆気に取られる。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことも何もない………」

それっきり、箒は窓の外へと視線を向けて取り合おうとはしなかった。女子達は、何かまずいことを聞いてしまったのかと困惑してしまう。

「そういえば、このクラスに有名人の身内が二人いる、と聞こえたが――」

教室が少し重たげな空気になったところで、千冬がポツリと呟き出した。どういうわけか、その表情はイタズラを思いついたかのよう

に少し楽しげである。彼女のこのような表情をあまり見ない一夏はその意外性に些か驚きを示し、利秋は言わんとしていることを即座に理解して慌てて懷から唐草模様の手ぬぐいを取り出す。それではつかむりをしたが、

「そのネズミ小僧も有名人の身内だ」

「桐生君……？ はっ！ まさかっ！？」

「ええ……間違いないわ！ 桐生と言えば『春の嵐』こと『桐生春乃』……そしてその裏の顔は！」

「BL業界のミケランジェロ『村田明里』様！！」
あけさと

「「「えええええっ！！？」」」

「あああああゝ……」

今度は一気に利秋へと女子達の注目が集まり、居た堪れなくなった利秋は頭を押さえて屈み込んだ。授業中だというのに女子の半数が一気に利秋の元へと雪崩れ込み、怒涛の質問攻めをする。その様子を、策が成功した策士のように狡猾な笑みを浮かべて千冬が眺めていた。

（関羽じゃない、孔明だあれは……）

この異様な状況の中、何とか平静を保とうとしていた一夏は姉の顔を見てそう思ったそうなの。

「ちよっ、千冬姉ちゃ、織斑せんせエツ！ 明らかに言う必要ねー

でしょが！　なんでバラしたんスか！？」

女子達に揉みくちやにされながら、利秋は必死に抗議の声を上げた。

「ブフォッ、いやーすまん。口が滑った」

「なんで棒読みなんだよ！！　あと笑ったよな！？　ぜってェ笑つたろ今！！」

「気のせいだ。まあ、このまま授業が続かなくなっては私も困るからな。お前達、そこまでにしておけ！」

千冬の一喝によって教室は再び静まり返り、利秋の周りに群がっていた女子達は各々の席に戻った。揉みくちや地獄から解放され、利秋は思わず安堵の溜息を漏らした。しかし、それも束の間の平和であり、

「どうしても質問がある者は休み時間にすれば良からう」

その言葉に女子達は威勢よく返事をし、利秋は魂の抜けるような溜息を上げるのだった。

休み時間になり、待ってましたと言わんばかりに女子達が利秋の周りに詰め寄り、質問攻めを繰り返した。利秋はそれを煩わしく思いつつも、邪険にはできずにひとつひとつ答えていくのだった。

「春乃様ってどんな人なの!？」

「千冬姉ちゃんと束姉ちゃんを足して2で割った感じの人かな……だが変態度は誰にも勝ってやがる、俺にこんな頭を強要するくれーだからな」

そう言って不愉快そうな顔で利秋は自分の黒く、長い髪を指す。

「昔、勝手に切ろうとしたらすっげー怒られてよ。なんかゲームのキャラクターの長髪野郎に触発されたらしい。迷惑な話だったのまったくヨ」

「似合ってると思うけどなー。そういえば春乃様もIS操縦者なんでしょ? 私、明里様の方でしかあまり知らないから……」

「私もだわ」

それから、ワイワイとBL談義に移る女子達。

(こいつら、BL本読んでるなんて大っぴらに言っているのか? 一応、俺と一夏がいるんだが……)

「私もIS操縦者としての顔をあまり知らないなあ。ねえ、春乃様ってどんな感じだったの?」

「まー、ウチの姉貴はIS学園にいながら別のことに力入れてたからなア。ここに漫研立ち上げたのも姉貴だったし。実力はあったんだから本気出しゃあ、千冬姉ちゃんを凌ぐくらいはあったらしい。専用機の性能も結構良かったらしいしな」

「春乃様の専用機……『桜島』だっけ」

桐生春乃の専用機『桜島』。淡い桜色の機体で、一振りの太刀を旋風の如く振るう。それに因んで彼女は『春の嵐』と称された。だが、利秋の言うように彼女はISに関してはあまり力を入れなかった為、その実体を知る者はいない。この『春の嵐』という二つ名も、ただ見た目だけに魅了された者が付けたことによって広まったものだ。

「それにしても織斑君も桐生君も凄い人の弟で専用機が用意されるなんて、流石よね」

「ええ、それを聞いて安心しましたわ。クラス代表決定戦、私とあなたでは――」

「さーて腹減ったし昼飯にでもすっかー」

セシリアの声が聞こえた瞬間、利秋は席から立ち上がって食堂へ向かおうとした。セシリアは得意気になっていた顔を憤怒の顔に一転させ、逃がすまいと利秋の靡く後ろ髪を引っ張る。因みに、彼の髪に触れてほんの少しの間、セシリアはその手触りの良さに驚きを浮かべた。

「あゝででで！ 何しやがんだコラ！」

涙目になって利秋は怒鳴った。

「お待ちなさい！　人が話している最中だというのにどういづもりかしら！？」

「どーせまた挑発だろ、そんなら一夏に言ってくれよ。アイツは昨日の件が不完全燃焼気味らしーしヨー」

利秋は自分の前の席を示しながら言った。しかし、そこに一夏はいない。

「織斑君なら篠ノ之さんを連れて食堂に……」

「あんの野郎逃げやがったな！！」

怒髪天を衝く勢いの利秋。もっとも、髪はセシリアが握ったままなのだが。

「まあそういうわけで、私から逃れられるとは思わないことね？」

「わーったから髪放せよ」

「そのようなこと言って逃げるつもりでしょう？」

「どーせこの場で逃げ果せよーが後からまたしつこく来るんだろが」

「あら、分かってますのね。それならば放して差し上げないこともないけど……人に物を頼む態度というものがあるのではないかしら？」

文字通り上から目線になってセシリアは言う。利秋はそれに対し、

「放せよっ」

と顎を突き出して答えた。セシリアは無表情になって利秋の髪を引っ張る。

「あゝででで！ 禿げる禿げるイタイ！ イタイ！ ヤメレ！」

「ほらほら、素直に言いなさいな」

「ぜってー言わねー！ いででで！ 退かぬ！ 媚びぬ！ 省みぬ！」

目に薄っすらと涙を浮かべながらも、抵抗を続ける利秋。それを見るセシリアの表情は、初めは愉快そうだったが次第に苛立ちへと変わっていった。

「くっ！ ……これだけやって屈しないなんて！ 一体何があなたをそうさせていますの！？」

「俺は――」

利秋が答えようとした瞬間、ぐううと腹の虫が鳴った。その発生源は顔を赤らめ立ち尽くす。セシリアだった。腹の虫が鳴るのは生理現象である以上、どうしようもないことなのだが常人であれば恥に思うのが普通だ。特に彼女は人一倍自尊心が強い為、このような醜態を晒してしまうことは我慢ならない。「自分ではない」、セシリアはそう弁明しようとしたが、それよりも早く利秋が口を開いた。

「悪いけど俺、この通り腹減ってんだよ。話なら食いながらでもで

きんじゃねえ？」

セシリアは一瞬ポカンとしてしまったが、利秋の意を酌み、慌てながらも威勢よく答えた。

「ま、まあ、下々の者の要求を飲むのも貴族の務め。よろしくつてよ」

「そんならとつと行くぞ。後、髪放せ」

「そ、それは却下しますわ！ 逃げ出さないとは限りませんもの！」

セシリアは頑なに拒否した。実は拒否した理由は別にあるのだが、勿論そんなことに気付くこともなく利秋はしかめっ面になる。

「……このまま行くのかよ？」

「当然ですわ！」

（男の後ろ髪を女が掴んで歩くことは当然なのか？）

心の中でそう突っ込み、利秋は気だるそうに溜息を吐いて言った。

「わーったよ」

そうして教室を出て行く二人。因みに、何人かの女子が利秋達に同行しようと考えていたが、昨日の二人の争いを思い出し、声を掛けることなく立ち尽くすのみだった。あのような争いに巻き込まれると思うと、触れない方が吉だと考えてのことである。

廊下ですれ違ってゆく者達の視線が二人に集中する。当然のことである。たった二人の男子生徒の内の一入ということもその一因であるが、その男子の髪を女子が引っ張って歩いているという異様な光景が一番の理由だ。

「あ、あの……」

セシリアは急に立ち止まり、口を開いた。このまま進めば再び頭皮にあの痛みを負うことになるので、利秋も立ち止まり振り返る。利秋の目には、軽く頭を下げるセシリアが映っていた。

「ああ？」

「さっきのこと、感謝させていただきます……危うく恥をかくところでしたわ」

「あんなん別にそれ程のことでもねーよ。俺も腹減ってたし、序でだ序で」

「そ、そうですの………あなたは普通の男と比べて中々見込みがありますのね」

「……ど、どーしたんだよ突然？」

外面的なことで褒められることはあっても、内面的なことであまり褒められることの無かった利秋は、若干戸惑ってしまう。

「先程のあなたの紳士的な対応に率直に感動しておりますのよ」

「ま、まー当然ダナ！ 俺は他の野郎どもに比べりゃ百億倍はジェントルメンなのよ！」

威張り返って言う利秋。しかし、実はそれがただの照れ隠しだということにセシリアは気付いていたので反論もせずに微笑んだ。

「ところでよ、昨日と言い今の発言と言い、オメーはなんだって男を見下してんだ？ 女尊男卑の風潮が手伝ってるっつーのもあるんだろーけどよ」

「そ……それは……」

セシリアは言い出せずに、利秋の髪を指に巻きつけたりして弄っている。このままできると自分の髪を玩具にされるのではないかと危惧し、利秋は聞き出すのを止めた。

「言いたくねーなら聞かねーよ。ただ、オメーに何があったのかは知んねーけど、ちっとばかり気に食わないことがあったからってそれで全てを否定すんのは早合点じゃねーか？ 世界の野郎共を虱潰しに見てくりゃオメーのお眼鏡に叶った野郎なんてごまんというだろうさ。一夏も俺の家臣だけあって中々できたヤツだからな」

セシリアは黙って聞き続けていた。この男の口振りはお世辞にも良

いとは言えないが言っていることは中々正論だ、セシリアはそう思った。

「ただ、俺の足元に及ぶヤツなんざいねーがな」

「ふふふっ」

「な、何がおかしーんだ」

「い、いえ、最後の一言があなたらしいと思えて……ふふふっ」

堪らずセシリアは吹き出してしまった。しかし、そこは淑女の嗜みというのか、口元に軽く手を添えながら。

「んだよそりゃ……まー、とつとと行くぞ」

「ええ、そうですわね」

そうして二人は再び歩き出した。依然セシリアは髪を握ったまま。

「ところでよ、そろそろ手エ放してくんねーか？」

「お断りしますわ」

「だから逃げたりしねェって……」

「それでもですわ」

（これ程手触りの良い髪、手放すには惜しいですもの）

セシリアは心の中で、そう呟くのだった。

第六話 1-1 桐生騒動（後書き）

セシリア仲良くなんの早すぎる？ 筆者もそう思ってる。話の骨組みをいくら作っても書いてる途中で気が変わってまう……

因みに余談ですが、利秋の姉のペンネーム『村田明里』は、桐野利秋の恋人『村田さと』と、新選組の山南敬助の恋人『明里』から取ってます。

第七話 利秋とセシリア（前書き）

前回の投稿からえらい時間が開いてしまいましたわ……

第七話 利秋とセシリア

「おー、今日の日替わり定食は鯖の塩焼き定食、これにすっか。オメーはどーすんのよ？」

場所は食堂。券売機の横の『本日の日替わり定食』と表示されたモニターを眺めながら利秋はセシリアに話し掛ける。

「そうですわね……では、私はビーフシチューで」

「おう、そんなじゃあさっさと買って席探すか……そういうやさ」

「はい？」

「もうそろそろ手ェ放してくんねーか？」

お忘れの読者の方に説明しておく、前回からセシリアは利秋の後ろ髪を掴んだままなのだ。髪に触り心地をすっかり気に入ってしまい、放すように言われても「逃げられては困る」と別な理由をつけて渋るばかりであった。しかし、ここが彼の目的地である以上逃げる意味もない。従って、これ以上理由をつけて彼の髪を掴んでおくことはできないのだ。

「わ、わかりましたわ……」

セシリアは寂しげな顔でそう言い、利秋の髪を手放した。

（なんで残念そうにしてんだ？）

二人は食事を受け取った後、窓際の席が空いているのを見つけそこに座った。

「しかし、あんな大きく腹の虫鳴らすなんてよっぽど腹空かせてたんだな」

ニヤニヤしながら利秋に言われ、セシリアは少し不愉快そうに彼を睨みつけた。

「な、なんですの……嫌なことを思い出させないでくださいまし！今日はその、朝から食欲が無くてあまり食べられなかっただけですわ」

「ふーん、食欲がね……………」

利秋は箸で細かく裂いた鯖を口に運びながら、昨日自分がセシリアに対して言ったことを思い出す。外国に来たら大きな顔をしないで畏れるものだ、ということ。

（コイツなりに一応畏れちゃいるってことか）

そう思ってセシリアを見つめながら微笑む。それを不愉快に思い、

セシリアはムスツとした顔で抗議した。

「何を考えてらっしゃるか知りませんが、知らない国に自分一人だけで心細いだとか、そういうことじゃありませんわ。見くびらないで頂戴、私はそのような弱い人間ではなくってよ」

「へいへい」

（やっぱそうなんじゃねえか）

そう心の中で呟き、利秋は生返事を返した。

「そのお返事だと本当に分かってらっしゃるのか信用できませんわね……」

「分かってるって。そういや、オメー俺になんか用があって声掛けてきたんじゃないの？」

「それは……」

セシリアは言いよどんだ。彼女が利秋に声を掛けたのは、そもそも彼を挑発するつもりだったからである。ところが、傍若無人な者だとばかり思っていた彼の意外な面に心を打たれ、今では挑発する気が無くなった。

「な、なんでもありませんわ」

「ふーん、そんならいいけど……さて、と、ごっそーさん」

利秋は手を合わせ、軽くお辞儀をする。いつの間にやら魚は骨だけ

になっており、他の食器も空になっていた。彼が添え物の味噌汁に手を付けているところを一瞬たりとも見なかったので、セシリアは思わず驚きの声を上げた。

「まあ、もう食べ終わりましたの？」

「おう、『食事は迅速に、効率良く』だ。やらねえとなんねーことが山ほどあるんだからよ、時間を無駄にはしてられねえ」

一応説明しておく、彼の言うやらなければならぬことというのはゲームである。勉強だとか鍛錬だとか、そんな高尚なものではない。

「つつてもまあ、こいつはクセみてーなもんだし、メシ誘ったのは俺だしな。お先に失礼とかそんな無粋なマネはせんよ」

「ねえ、君って噂のコでしょ？」

隣から声を掛けられ、利秋はそちらを向く。声を掛けてきたのは三年の女子だった。IS学園の制服にはリボンが付いており、学年ごとに色が異なる。一年が青、二年が黄、三年が赤となっており、声を掛けてきた女子は勿論赤色のリボンだった。

「ええ、ソッスよ。しかし噂のコか……いやー照れるなアおれ……
それがし某がそんな有名人だなんて」

利秋は、平常の彼には有り得ない物腰柔らかな態度で対応する。しかし、いくら畏まるにしても某は時代錯誤というものだ。

「やっぱり！」

利秋の返事を聞き、三年生は自然な動作で彼の横に座った。向かい側のセシリアは、面白くなさそうにむくれている。何が面白くないのか、『噂のコ』が代表候補生である自分ではなかったことだとか、色々あるのかもしれないが実は彼女自身にもよく分かっていない。目の前の男を多少は認めたものの、かといって何ら特別な感情があるわけでもない。それなのに、彼が他の女にちょっかいを出されていることが何故か腹立たしい。セシリアは心の中をモヤモヤさせたまま、様子を窺うのだった。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ISの操作とか分からないでしょ？ 代表候補生なら軽く三百時間以上はやっているから、このままじゃ不利よ。ISについて教えてあげよっか？」

（その代表候補生が目の前にいますのよ！）

と、セシリアは心の中で叫んだ。

「お気持ちはありがたいですけど、俺……じゃなくて拙者は天才ですから大丈夫でゴザルッスよ。それより、織斑君に教えてくれるとありがたいんですが……彼は中々行き詰っているらしいので」

「たった今織斑君にも声掛けたんだけど、断られちゃったんだ……」

ヨヨヨ、と泣き真似をしながら言う三年生。しかし、利秋は慰めたりせずその言葉にピクリと反応して尋ねた。

「たった今って……一夏は何処に!？」

居場所を聞かれた三年生は方向を示す。示された先は利秋の背後の、

もうひとつ後ろのテーブル。そこに一夏と箒が向かい合う形で座っていた。

「へー、アイツが箒を誘って二人で……やるじゃねーかー」

と、穏やかな表情で感心の声を漏らす利秋だったが途端に歯を剥き出しにして笑い出し、

「なーんて言うと思ったかアアア！！ 家臣の分際で棟梁を置き去りにしてテメーだけメシに行きやがって！ 地獄を見せてやるぜエ……」

席を立ててゆっくりと一夏の元へと近付いて行った。セシリアと三年生は、利秋の悪魔のような顔を見て思わず凍り付く。

一夏は丁度味噌汁を飲み干しているところで、視界を器が遮っている。前の様子が分からない。汁を飲み尽くして器を下ろすと、視界には変顔の利秋が映り込んだ。

「ブッフォー！」

当然、警戒も何もしていなかったのも、口に含んでいた味噌汁を噴き出してしまった。テーブルに味噌汁がぶちまけられる。序でに箒にも若干かかった。利秋は咄嗟にかわしたので被害を免れた。

「い、一夏……お前という奴は………」

「あゝあゝ、折角食堂のおばちゃんが作ってくれたのにヨ。何てことしやがんだオメー」

ワナワナと体を震わせている箒に手ぬぐいを渡しながら、利秋は一

夏を非難した。

「ゲホッ……そりゃあこっちのセリフだ！ いきなり変顔なんてされたら嘔いてしまうだろ！」

「ま、お館様放ってテメーだけメシ食いに行った大罪はこれで許してやろうぞ。時にオメー、三年からの誘い断ったんだって？ どーしてこんなオイシイ話を蹴ったー！」

「私が断ったのだ」

「へェ、お前が……」

利秋は箒が断った魂胆が即座に理解できたので、にやつきながら箒を見た。

「な、なんだその目は！」

「いんや、なんでもねーよ。んなことよりオメーが代わりにIS教えれんのかよ？」

真面目な表情に切り替えて、利秋は箒に尋ねる。三年ともなれば、ISに関する知識、技術は当然ながら豊富であり教えてもらって損はない。むしろ役立つことばかりなのは確かだ。箒はそれを跳ね除けてしまったのだが、果たして三年に匹敵する知識があるというのか。

「ああ、私に考えがある。利秋、お前も今日の放課後に剣道場に来い」

「剣道場？ それってISと全然関係ね――」

「来い」

「あ、ああ……」

何か変だと思った利秋は反論をしたが、それは強引に突っ撥ねられた。仕方なく肯定すると、利秋は二人に別れを告げて自らの席へと戻る。さっきまで座っていたはずの三年はいなくなっており、セシリアだけが座っていた。

「およっ？ あのネーチャンは？」

「あなたが席を立ててすぐにどこかへ行かれましたわ。そんなことより、こういうことですよ！？」 レディーを置いて一人で何処かへ行くなんて！」

セシリアは勢いよく両手をテーブルに叩きつけ怒鳴った。

「悪い悪い、ちよっくら出来の悪い家臣に灸を据えてたんだ」

「全く……紳士的な方だと思って見直してましたのに。ところで、あの方のお誘いを断って良かったんですの？」

自信満々に上級生の誘いを断った利秋だったが、彼も一夏と同じくISに関しては素人なのだ。基礎的な知識は入学前に叩き込んでいたのだが、ISは稼働時間、つまり踏んだ場数がものをいう。彼がISを動かしたのは入学試験の時のみで、その稼働時間は数十分にも満たない。だから、ここは上級生の付き添いの元、操作をこなしていくのが得策だったのだ。しかし、

「さっきも言ったろ。俺は天才だから問題ない」

(どう問題ないのかさっぱりですわ……)

利秋は何の理屈もない、夜郎自大なことを述べるだけだった。

「それに、あのネーチャンが話持ち掛けてきたとき不機嫌そうな顔でこっち見てたしな、オメー」

「えっ」

セシリアは少し驚く。利秋が上級生との話に夢中になって自分はそっちのけにされてたばかり思っていたからだ。彼は自分を氣遣って断ってくれた、セシリアはそう期待していた。

「俺がISの操縦を教えてもらって強くなりすぎちゃったら困るもんなア」

ガクッとうなだれるセシリア。確かに自分を氣遣って断ったことに間違いはないが、彼女の期待通りの答えではなかった。そんなことよりも、これは自分を見くびっているということではないのか？セシリアはそう思うと、頭の中のモヤモヤを一気に消し去っていきり立った。

「見くびるのも大概にしなさいな！ 私、専用機持ちで稼働時間は優に三百時間以上はありますのよ！」

「ど、どーしたんだよいきなり……ってオメーも専用機持ちだったんかよ。そいつア何よりだ」

急に怒鳴られて利秋はたじろいだが、即座に立ち直って安心したかのように言う。

「どういうことですか？」

「俺には専用機が用意されるって話だろ。それでオメーが訓練機だったとしたら流石にアンフェアだろうなって思っただけヨ」

それを聞いてセシリアの中で何かが切れた。利秋の言葉は純粹にセシリアを心配してのことなのだが、自尊心が高い彼女にとっては軽侮の言葉としか取れなかった。しかも、利秋の言っていることはそっくりそのまま自分が言おうとしていた言葉だったのだ。最早セシリアは黙っておられず、ビシッと利秋に人差し指を突きつけ、改めて宣戦布告をするのだった。

「来週のクラス代表決定戦！ 一切の手抜き、承知しませんわよ！」

「お、おお？ 突然どーしたのか知んねーが、全力でやるぞ？ 奴隷になりたかアねーしな」

セシリアの語勢に僅かに怒気を感じ、利秋はどうして彼女が怒っているのか分からず返事だけをした。では、と言ってセシリアは回れ右すると、勢いよく歩きながら食堂を去って行く。

「なんだったんだ……やけにしおらしくなったと思ったらまた……」

一人取り残された利秋はポカンとしながら佇むだけだった。時計へと視線をやると五時限目開始まであと少しだったので、食器を（セ

シリアの分も）返却口へ持って行くと自分も食堂を後にした。
余談だが、事の一部始終を遠くから観察していた女子達によって「
桐生利秋、イギリス代表候補生と交際するも一時間もせずに破局！」
というデマが広がり、午後も利秋は女子達の質問攻めに苛まれるの
だった。

第八話 炸裂、自顕流（前書き）

今回は剣術勝負のシーンなんですが、当方、剣道は学校の授業でやった程度なので描写にリアリティがありません。また、サブタイトル通りに自顕流も出てくるのですが、この知識も文献や動画で見た程度です。その道の方から見れば大きな間違いがあったりするかもしれません。

第八話 炸裂、自顕流

午後は昼休みの件に関しての質問攻めに苦しみながらも、何とか放課後を迎えた利秋。箒との約束を思い出し、命からがら女子の包囲網を抜けて剣道場へと向かっていた。

剣道場に近付くにつれて大きくなってくる、竹刀同士がぶつかり合う音。

「おー、やってるみてーだなー」

その音を聴き、利秋は嬉々とした声を上げて剣道場の戸を開いた。入ってすぐに彼の目に飛び込んだのは、箒から打突を受けて後ろへと倒れこむ一夏。そのまま一夏は竹刀を手放して座り込み、荒く呼吸をする。それを箒は厳しい表情で見据えていた。

「どういうことだ」

「えっ。いや、どうって言われても……」

「どうしてここまで弱くなっている！？ 中学では何部に所属していた！？」

「帰宅部！ 三年連続皆勤賞だ」

怒りを交えた声で尋ねる箒に、一夏は自慢できないようなことを自慢げに答えた。それが箒の逆鱗に触れたようで――

「鍛え直す！ IS以前の問題だ！ これから毎日、放課後三時間、

私が稽古を付けてやる！」

「え、それはちょっと長いような、っていうか俺はISのことをだな——」

「だからそれ以前の問題だと言っている！」

一夏の反論は強引に叩き伏せられた。こうなってしまうえば一夏は大人しく従うしかない。ギャラリーの女子達は心配の声や野次などを飛ばしていた。

「織斑君ってさー、結構弱い？」

「ホントにIS動かせるのかなぁ？」

耳が痛くなるような言葉に一夏は苦笑いをし、落胆する。しかし、この女子達の辛辣な言葉はまだ序の口に過ぎず、更にキツイ言葉が一夏を攻めるのだった。

「かぁーっ。 なっさけねーなぁー！ オメーそれでも俺の配下かっつーの！」

「とっ、利秋……」

剣道場の出入り口で、利秋はがっかりしたように額を押さえていた。そしてスタスタと早歩きで一夏の下へ駆け寄り座り込むと、

「雑魚！ 雑兵！ 落ち武者！ ……女に負けた！」

「それは言い過ぎだろ……」

立て続けに罵声を浴びせていく。特に最後の言葉が響いたようで、一夏は魂が抜けるようにがっくりと項垂れた。

「つーことで俺が無敵の剣ってヤツを見せっからよ、いいか箒？」

利秋が箒へと視線を向けて尋ねると、箒は顔をニヤリとさせて答える。

「ああ、そのつもりで呼んだからな」

「そんじゃ、ちゃちゃつとやっか……」

そう言って利秋は一夏が落とした竹刀を拾う。

「待て、そのままの格好でする気か？」

箒と一夏は今しがたまで剣術試合をしていたので勿論、剣道着に防具を纏っていた。それに対し、利秋の今の格好はIS学園の制服である。

「流石にここに俺サイズの道着はねーだろ……」

そう、本来IS学園はISが女性にしか使うことができない為、女子校と同じ扱いである。よって、男用の備品などが用意されているわけがない。更に、利秋の背丈は優に180はあり、そのサイズの道着があるとは思えない。

「しかし、防具ぐらいは付けたらどうだ。私も手加減はできんぞ……」

箒が心配するのも無理はない。彼女の剣の腕前は、剣道の全国大会で優勝をするほどのものなのだ。竹刀とはいえどもその一撃が凄まじいことは間違いない。しかも、幼い頃に幾度にもわたって勝負を繰り返してきた利秋と箒だが、全て箒の一本勝ちで終わっている。利秋が彼女の剣をかわしたことがないということだ。今の箒の一撃を防具無しに受けてしまえば痛いで済むものではない。しかし、利秋は箒の言葉に耳を貸さなかった。

「余計な心配はいらねーよ、俺だって俺なりに鍛えまくってきたんだ。好きな時間に好きなだけな。それに、俺の剣に守りなんざ必要ねえ」

「……………わかった。では、行くぞ」

「おう」

互いに了承すると、二人は一定の距離を取って向かい合った。箒は試合開始の際の一連の礼儀をとるが、利秋は納刀の姿勢を取って佇んだままにいる。

「織斑君、桐生君って強いのか？」

「私も詳しくないけど、礼とか知らなさそうだし素人なんじゃないかなあ…………」

「いや、トシの流派では稽古であつても刀を持てば相手は敵だから礼は要らないって教えられるんだ。だからあれでいいんだよ。あ、教えられるっていうか、あいつの場合は独学だったけどな」

女子達から質問を受けた一夏は、消沈していたところを何とか立ち直って答えた。

「それで、あいつは強いぜ。中学の時に剣道部に果し合いを申し込まれたんだけど、最終的に剣道部を廃部に追いやってしまったからな」

「ええっ、それって……」

「本当の話さ。俺もその場に立ち会わせていたんだけど、一対多であっという間に終わらせてしまったんだ。それで、ニートに敗北したってことが相当応えたいで、部員全員がやめたんだよ。今は復活したみたいだけど、俺達が卒業するまでは剣道部が無かったんだ」

一夏はまるで自分のことのように誇らしげに語る。しょっちゅう利秋からは家臣扱いされたり、悪戯をされたりと散々な目に遭わされてきているのだが、内心では彼を尊敬しているのである。

「桐生君……抜かないの？」

女子の一人が疑問の声を浮かべる。箒が竹刀を構え始めたのに対し、利秋は依然納刀の姿勢を取ったままでいるからだ。疑問に思っているのは彼女だけではない。他のギャラリーも不思議そうにその様子を見ているし、利秋と対峙している箒ですら怪訝そうな顔をしている。一夏だけが、利秋が何をしようとしているのかを理解できている。

先に動き出したのは利秋だった。前にのめりつつ駆け出し、左側に携えた竹刀に右手を掛けると、

「きええええええい!!」

耳をつんざくような甲高い掛け声を上げ、逆袈裟の形で抜き掛かった。箒は一瞬圧倒されたが、下から上へと掬い上げるように竹刀をぶつけ、軌道を反らさせた。

利秋の攻撃はそれでは止まなかった。真っ直ぐに伸ばした竹刀を両手で翳すと、

「きいええやあああああああああ!!」

叫び声を上げながら電光石火の速さで竹刀を何度も振り下ろしていく。箒はその一振り一振りを受け止めずに避けていった。

「ね、ねえ織斑君、桐生君の流派って一体何なの?」

利秋の奇声ともとれる掛け声、気魄に圧倒され、女子の一人が恐る恐る一夏に尋ねた。

「そういえば言ってなかったな。……薬丸自顕流^{やくまるじげんりゅう}って言うんだ」

「ジゲンリュウ……?」

「あ、聞いたことある。あの『チェスト』とか言うヤツだよね」

「ああ、それは小説や漫画の中だけの話だってトシが言ってた。実際は今やってるようにあんな声を出すんだ」

一夏は、昔利秋から聞いてきたことそのままを語りながら、当時のことを回想していた。

時は中学二年の夏頃まで遡る。この時の利秋の生活態度はまさに自堕落と言えるもので、学校をズル休みすることが多々あった。そんな日は決まって、一夏が学校での出来事を伝えに利秋の家へと通う。小学五年からの仲である鳳鈴音や、中学に入ってから、とりわけ仲の良かった五反田弾もたまに来ていたが。

この日も一夏は学校帰りに利秋の家へと寄った。インターホンに手を伸ばそうとすると、庭の方から甲高い声が響く。

（今日は修行をしているのか……）

裏庭へと足を運ぶと、上半身裸の格好（何故か胸に包帯を巻いているが）で、次々と立ててある棒を打ち払っていく利秋の姿があった。『打廻』^{うちまわり}と呼ばれる自顕流の稽古の一環であり、複数の敵との戦闘を想定したものである。

邪魔をしてはならないと思い、利秋が全てを打ち終えてから一夏は声を掛けた。

「此間の剣道部の奴らもそれで全員倒したんだな」

「おう、まーな」

汗をタオルで拭きながら利秋は答える。つい先日、利秋は数十名の剣道部員を相手に大立ち回りを演じたところだった。

「強いんだな、自顕流って」

「つまりめーよ、あの新選組が唯一恐れた剣術だ。『自顕流と対決する時は初太刀を外せ』って教えがあるくれーだからな」

新選組については一夏もある程度は知っている。桐野利秋が暗躍していた時代と同時期のものだったので、興味を持って新選組関連の映画などを見ていた利秋からよく話を聞かされていた。

「剣の達人の集団だよな、新選組って。それが恐れるってことはよっぽど強かったんだな。ところで『初太刀を外せ』って、そんなに初太刀が重要なのか？」

「ああ、『一の太刀を疑わず、二の太刀は負け』ってのが教えだからな。最初から全力で斬り付けてケリを付けんだよ。だから――」

そう言いつつ利秋は庭の傍らに置いてある横木の前に、腰を低く落として手に持った棒を天高く突き上げる。『蜻蛉』とんぼと呼ばれる自顕流独特の姿勢だ。

余談だが、これを構えとは言わない。構え、とは防御の姿勢を意味する言葉であり、防御の技を一切持たぬ自顕流では語弊が生じてしまう。

「ひいええええええい！！」

利秋は掛け声を響かせ、横木を棒で何度も叩き付ける。

「こんな風に初太刀の鋭さを鍛えてくんた。オメーもやってくか？」

「い、いや……俺は……」

一夏は遠慮気味に言う。実は自顕流の『猿叫』えんきょうをするのに気が引けたのだが、そんなことを口にすることはできなかった。

「でも、こんなに強いし、まめに特訓してるんだから剣道部に入れば良かったんじゃないか？ 全国優勝も狙えると思うぞ？」

「剣道部で自顕流は教えねーだろ。第一、剣道部は廃部しちゃったじゃねーかどこの誰がそんなひでエことしたのかわかんねーが」

「一応原因はお前なんだけどな……」

他人事のように言う利秋に、一夏はボソリと突っ込んだ。

「自顕流は桐野利秋の剣だ。俺は桐野みてーに強くなって、天下を取ってこの世の人類が俺にひれ伏すような国家を造るんだヨ」

「随分とでっかい夢だな……」

桐野の逸話として、「自分に学問があれば天下を取った」と豪語したというものがある。この逸話を真に受け、利秋はあらゆる知識を吸収しようとしていた。本、テレビ、映画、更には漫画やゲームなどからも……普通なら学校に行くはずの時間を、それらで過ごしていた。

「それに、約束だからヨ。自顕流の技でアイツに勝つつーのが」

「箒か……」

三年前に突然、転校していった幼馴染のことを思い出す。別れ際に、利秋は彼女とある約束をしていた。

『再び会うまでに強くなってやるから、また試合をしろ』

悲しそうな顔を浮かべる箒の手を持って、笑顔で利秋はそう言っていた。

「どうしてるかな、あいつ」

「さア、知らね。だからアイツがいつ帰ってきてても良いように、俺は強くならねーとな」

場面は現在に戻る。一夏は過去を回想しながらも、女子達の質問に答えていた。

「す、凄いんだね。自顕流って」

「でも、防御がないってことは、攻められたらどうするの?」

「攻めるんだ。攻めて攻めて、相手の攻めも打ち落とす、それが自

頭流だつてさ」

一夏が説明しているところで丁度、利秋の猛攻をかくぐり続けていた箒が反撃に出た。振り下ろしをみの自頭流に対抗すべく、横に竹刀を振るう胴打ちを狙う。

「やあああああ!!」

「きいえやああああ!!」

箒の反撃は素早かったが、胴に届く前に、利秋は竹刀を振り下ろして箒の攻撃を打ち落とした。攻撃を下へと打ち下ろされ、箒は頭上に大きく隙を作ってしまう。

「ひいえいやああああああ!!」

その隙を狙って、利秋は渾身の一撃を繰り出した。一か八かで箒は手に持った竹刀を両手で構え、押し返すように突き出した。

「箒っ!!」

思わず一夏は箒の名を叫んだ。幕末、自頭流の打ち込みを刀で受け止めた者が額に自らの刀の鏝をめり込ませ即死したという話を利秋から聞いたことがあったからだ。

しかし、一夏の心配は杞憂に終わった。先程からの激しい衝撃に耐え切れなかったのか、利秋の竹刀が折れてしまった。折れた切っ先は回転しながら、後ろへと飛んで落ちる。

「ここまでか」

先に利秋が口を開いた。利秋の言葉を即座に理解し、箒は面を脱ぐ。

「ああ、しかし大したものだ。私は一度しか攻めに出ることができなかったぞ」

「いんや、まーた俺の負けだ、負け。自顕流の二の太刀は負けの太刀だ。俺は初太刀でケリを付けるつもりだったけどよ、よくあれをかわしたなオメー」

「昔やり合った時には見なかった技だったから、正直焦りはしたぞ」

箒がそう言うのも無理はない。利秋が初太刀として繰り出した『抜き』は予想外に攻撃の距離が伸びるので間合いが取りづらく、しかも見切るのが困難な技なのである。これを初見で見切った箒は、大したものなのだ。

「兎に角、私は引き分けでも良いと思うのだが……」

「そうだよ！ どっちも凄かったよ！」

箒の言葉に他の女子も賛同する。しかし、利秋は納得しなかった。

「俺的には負けだ。最後の一撃ですら止められちゃったから……もうちょっと強くなってみせるからヨ、またいつか試合するぞ」

試合をしてほしい、とは言わず、試合をするぞ、と強引な言い方が利秋らしい。箒は思わず笑みを浮かべながら答えた。

「ああ、分かった。その時はお前に何度も反撃できるよう強くならないとな」

「へっ、望むトコだ」

利秋は上着を脱いでシャツ一枚になると、ポケットから香水を取り出して自分の体に振り撒いた。それを見ていた女子達は、利秋が洒落者だと思い惚れ惚れする。

「さーて、部屋戻ってFPSでもすつか。新選組に入れるくらいの強さになっとけよー一夏」

伸びをしながら剣道場を出ようとする利秋に、一夏は尋ねた。

「新選組に入れる強さって、基準が分かりにくいぞ。っていうかお前は教えてくれないのか？」

「オメーは自顕流を教わりたいんかよ」

自顕流、と聞いて一夏の脳裏にはすぐに猿叫が浮かんだ。

「い、いや……遠慮しとくかな、ハハ」

苦笑いしながら言う一夏。やっぱりあんな声を出すことは気が引ける。しかも、ただでさえ今の自分は注目の対象だというのにそんな真似をすれば、一層興味を買ってしまうと思った。

「まー、それに……」

利秋はその先の言葉を続けず、箒の方を含みのある笑みを浮かべながら見る。

「な、なんだその目は！ 何故私の方を見る！？」

「何となく」

「ええい！ その目を私に向けるな！」

箒は竹刀を振り翳し、利秋の方へと詰めかかった。

「やっべ！ とつととずらかるか」

利秋は身の危険を感じ、足早に剣道場を後にするのだった。

第八話 炸裂、自顕流（後書き）

次回でやっとIS登場……かな。
設定とか考えないと。

第九話 対決セシリア（前書き）

この小説を読まれてる方は、原作を読んでいる、またはアニメを見ている方前提ということで、『絶対防衛』などのISに関しての説
明は冗長を防ぐ為に省いてます。その点ご了承ください。

第九話 対決セシリア

一週間後の月曜日、放課後。予告通り、ここ第三アリーナでイギリス代表候補生セシリア・オルコットとの試合が行われることになった。ピットAには、一夏、箒、利秋の三人が待機している。

「なあ、箒」

「なんだ？」

「ISのことを教えてくれるって話だったよな？」

箒は一夏の質問に答えようともせず、明後日の方向へと目を反らす。

「お、おい！ 目を反らすなよ！ ……一週間、剣道の稽古しかなかったじゃないか」

「し、仕方がないだろう。お前のISはまだ届いていないのだから」

「まあ、そうだけど——じゃない！ 知識とか基本的なこととか、あっただろ！」

「お、おいっ。マジで剣道以外なんもやってねーのか？」

怪訝な顔をして利秋が尋ねた。元々、一夏のISの知識については利秋がサポートしていたのだが、張り切る箒を見た利秋は全てを彼女に任せてしまったのである。

利秋から問い詰められても、箒は押し黙ったままだ。

「マジみてえだな……一夏、盛大にやられてこいよ」

憐憫に満ちた表情で、利秋は一夏の肩に手を置いて言った。

「なんで俺が負けるって決まってるんだよ！　っていうか俺が先に行くのか!？」

「バカモン、親方様を先手に出す家臣がどこにいる。貴様は所詮、捨て駒じゃフハハハハハ」

殿様のように偉そうに笑い声を上げる利秋。それを見て一夏と箒は、

（まさにな道）

そう思ったそうな。突然、そこへ慌ただしく駆けてくる者がいた。

「お、織斑君織斑君織斑君っ！」

副担任の真耶である。危なっかしい足取りで走りながら、一夏の名前を復唱している。

「一夏、モテモテだなオメー」

「そ、そんなんじゃないだろ！」

「あつ、それとオマケで桐生君！」

「オマケっすか俺は」

別に真耶は悪気があって言ったわけではないのだが、取り分け自尊

心の強い利秋を消沈させるのには十分な言葉だった。ガツクリとする利秋に、慌てて真耶はフォローを入れる。

「ああ！ 落ち込まないください桐生君！ オマケだからって侮れないじゃないですか！ ペプ○のボトルキャップの為だけにジュースを買う人だっているし、グ○コのオマケと違って年代モノになると相当なお値段が付くし——」

「そうか……そつすよね山田先生！ 何だかんだで結局はオマケが優れてるんスよね！」

「ほえっ！？ ま、まあそうですね」

一か八かで言ったことが意外に功を奏してしまったので、真耶は豆鉄砲を食った鳩のようになりながらも利秋に同調した。何が嬉しかったのか、利秋は突然真耶の両手を取って小躍りをし始める。一夏と箒の二人は欣喜雀躍する利秋を見て、

（（単純な奴……））

と思った。

「聞いたか一夏！ オメーなんぞ所詮はコーラでキャラメルだ！ 食われちまってそれでオシマイだが、俺は数十年の時を経てその何万倍もの価値が付いて、全人類の記憶に未来永劫刻まれるのじゃあ！」

「やかましい、子供か」

有頂天になり声高らかに叫ぶ利秋の頭に、出席簿による打撃がクリ

ーンヒットする。利秋は思わぬ痛みには耐え切れず、その場に蹲って頭を押さえた。

「ち、千冬姉？」

思わずそう呼んでしまった一夏の頭にも、容赦なく出席簿が襲い掛かった。

「織斑先生だ」

「はい……」

「さて、お前達二人の専用機がやっと用意された。アリーナを使用できる時間は限られている。どちらかが先に出て、ぶっつけ本番でモノにしろ。残ったほうはその間に慣らしておけ……どっちが先に出るんだ？」

間髪を入れず、利秋と一夏は千冬に視線を向けたまま勢いよく互いを指差す。気のせいかな、ビシッという音も聞こえた。

「はぁ……腑抜けどもが」

千冬が呆れ返ってため息を漏らしていると、突如として重い音が地響きと共に鳴り始め、彼らの横の搬入口が開き始めた。徐々に光が差し込み、搬入口の内部が露になってゆく。そこから、二つのISが姿を現した。ひとつは白。白騎士とも形容できそうな真っ白いIS。

そしてもうひとつは、戦国の武者を思わせるような勝色のISだった。

「こちらの白い方が織斑君の専用IS『白式』びやくしきで、もう片方の紺色の物が桐生君の専用IS『隼人』はやとです！」

「コイツが……」

大きく目を見開き、自らの専用機となるISを見つめる利秋と一夏。特に目を輝かせて自分のISを見ていた利秋は、真っ先にISに触れた。刹那、利秋は不思議な感覚に包まれる。千冬に叩かれて大人しくなっていた利秋だったが、再びテンションを上げだした。

「……すげエ！ なんじゃコリヤあ！？ 初めてISに触ったときとなんか感覚がちげエぞ！？ そんなで、どうやってコイツに乗るんだ！？」

「馬鹿者、説明をしてやるから落ち着け。まずは背中を預けるように、そうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

千冬の説明通りに利秋がISに身を委ねると、所々からカチャリと機械の音が鳴り、利秋の身を包むようにして装甲が閉じた。

（おおっ……）

機械が装着された、と言うにはやや違うような感覚。違和感のない、まるで自分の身体の一部になったかのような感覚を利秋は感じた。利秋の視界にはあらゆる情報が飛び込んでくる。『隼人』の二文字が大きく表示された自機の情報、シールドエネルギー残量、高度など。そして、左側には敵機情報が表示されていた。

——戦闘待機状態のISを感知。ISネーム『ブルー・ティアーズ』

、操縦者…セシリア・オルコット、戦闘タイプ…中距離射撃型、特殊装備有。

（ヤツは中距離射撃型…となると、近距離型の俺はヤツの銃撃を掻い潜ってかねーとなんねーか）

利秋は情報を眺めつつそんなことを考えていたが、ふと重要なことを思い出した。

「って、待て待て！ 先手は一夏じゃねーか！」

自分の専用機が来たということに興奮してすっかり忘れていたが、彼は後手で出るつもりだったのだ。一夏が交戦中に自分はISを慣らし、尚且つ一夏に弱らされたセシリアを撃破する、というのが彼の算段だった。

「真っ先にISに手を伸ばしておいて何を言っている。織斑の方は準備がまだだからお前が先に行け、時間がない」

「けどよ、華々しく勝つという俺の——」

「つべこべ言わず行け」

「……はい」

千冬という蛇に睨まれ、反論できずに蛙のように利秋は縮み込んでしまった。

「……………いいか、桐生。お前はくれぐれも無茶をするな」

凍てつくような眼光を治めると、千冬はそう言う。

（態度にこそ出しやしてねーが、心配してくれてるみてーだな。それに、やっぱあの時のこと、まだ負い目に思ってるのか……）

普段の千冬らしからぬ言動、そして、ISのハイパーセンサーによって微妙な声の震えを感じ取った利秋はそう思った。

「無茶？ 天才は無茶なんかしねーっスよ。んなことより、俺が勝ったらニート生活許してくださいヨ」

そんな千冬の気を紛らせようと、利秋は気を利かせて冗談を言った。千冬は微笑を浮かべて返事をする。

「ふっ……却下だ」

「利秋、大和魂を見せて来い！」

「負けるなよ、トシ！」

続いて、激励の言葉を投げかける一夏と箒。

「オメーら、俺が勝ったら晩飯奢れよ。そんじゃ……アムロ、行っきまーす」

気の抜けた台詞を吐くと、利秋は一気に加速し、ピットから飛び立っていった。

アリーナへと飛び出ると、利秋は上へ上へと上昇していく。青色のISに身を固めたセシリアの姿を認めると、同じ高度まで昇って行き、そこで静止した。

「随分と遅かったですわね、待ち侘びましたわ」

「ワリーなア、道が混んでやがってよ」

そうなの、と言いながら、セシリアは薄っすらと笑みを浮かべた。

「……最後のチャンスをあげますわ。私が一方的な勝利を得るのは自明の理。今ここで謝れば、許してあげないこともなくてよ」

―警戒―敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロック解除を確認。

そう書かれた黄色のディスプレイが、利秋の目に飛び込む。しかし、利秋は動じることなく、唯一の装備を左手に展開させた。

―近接ブレード『名称未設定』

刃渡り一・七メートルの長大な刀を腰の左側に携える。帯刀するかのよう。

「コイツが俺の答えだ」

「随分と無口ですね」

「おう、『多くを語らず、ただ行動で示すのみ』 っつーのが隼人^{コイツ}の信条なのヨ」

右手で自らのISを小突きながら利秋は語った。

「そうですよ、では――」

瞬間、利秋の脳内に人工的な警告音が鳴り響き、

―警告―敵IS射撃体勢に移行。

のメッセージが、赤く移り込んだ。

「お別れですわねっ！」

そう言うや否や、セシリアは大きなレーザーライフル―スターライtmk?を振り翳し、その銃口を利秋に向けた。そして、一切の躊躇もなく引き金を引き、その銃口から青白い光を放とうとしたが――

「きいえやあああああ!!」

それよりも早く、利秋が一気に間合いを詰めて斬り込んだ。自顕流必殺の初太刀『抜き』である。その神速の一撃はライフルを弾くだけでなく、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーを大幅に削っ

た。胴に命中したことで、ブルー・ティアーズの『絶対防御』が作動したのである。

「な、何が起こりましたの!？」

想定外のダメージに、セシリアは思わず声を上げた。

「一の太刀にて敵を討つのが自顕流、その中でも『抜き』には『抜ぬき即斬』って教えがあるんだ」

あくそくざん
悪即斬じゃねーぞ、利秋はそう付け加えながら、ブレードを天高く突き上げるように『蜻蛉』の姿勢を取る。

「それで、敵を倒すまで刀を止めねーのも自顕流……」

獲物を狩らんとする狼の如く、峻烈な眼差しを向けながら呟く利秋に、セシリアは言い知れぬ恐怖を感じた。ダラリと冷や汗が流れることに気付く。このままの間合いではやられる、そう直感したセシリアは、咄嗟に後方へと退いた。

「ちえやああああああ!！」

セシリアの判断は正しかった。利秋はアリーナ一帯に響き渡る程に大きな声を上げつつセシリア目掛けて飛び込み、振り上げたブレードを一気に打ち下ろしてきた。もっとも、セシリアは事前に回避行動を取っていた為、その一撃は大きく風を切る音を鳴らしたただけだったのだが。

「くっ!」

顔を顰めさせながら、セシリアはブルー・ティアーズの特殊兵装『ブルー・ティアーズ』を展開させた。レーザー搭載のビットが四機の自立機動兵器である。本来なら、格好の付いた台詞のひとつでも吐いてみせるつもりだったのだが、今の彼女には余裕がない。四機のビットは瞬く間に四方八方へと散らばっていき、あらゆる角度から利秋に向けてレーザーを発射した。

「マジかよっ……」

流石に利秋も焦りを見せる。

（ここはオルコットのヤツよりも、このメカどもをぶっ壊さねーと
なんねーか）

利秋はそう考えると、自分を苛烈に攻め立ててくるビットの一つに向かって詰め寄った。真っ直ぐにである。当然、これだと狙い撃つまでもなく容易に命中させることができる。

（どういうつもりかしら……？）

馬鹿正直な利秋の行動にセシリアは意表を突かれながらも、ビットからの攻撃を続けた。しかし、一つとして攻撃が命中することはなかった。

「ちええええええい！」

真っ直ぐに向かってくるレーザーを、利秋は自分に当たる直前でブレードを打ち下ろしてかき消していったのだ。

「な、なんて無茶苦茶な！」

更に意表を突かれたセシリアは思わず驚嘆の声を漏らす。更にビットからレーザーを射出させたが、悉くかき消されていった。

「でえええええええい!!」

利秋はビットとの距離を詰め終わると、渾身の一撃を以てそれを真っ二つに割った。制御を失ったビットはハラリと宙を舞うと、一瞬にして爆音を響かせ木っ端微塵になった。

「次はテメーだァ！」

利秋は咄嗟に残りのビットへと視線をやり、それに向かって詰め寄って行った。

一方、ビットでモニターを介して試合の様子を観ていた一夏達は、利秋の奇抜な戦法に驚き入っていた。もっとも、千冬だけは顔色一つ動かさずに戦況を見守っていたが。

「凄いですね桐生君……ハイパーセンサーで動体視力も向上しているというのもあるかもしれないけど、ISを殆ど動かしたことがなくてあの動き……」

素直に感心している真耶。彼女の言うとおり、いくらISの特性で視力や感覚が冴えているとしても、迫り来るレーザーを打ち落とすことなど素人には難しい芸当だ。特に利秋は、つい此間まで（ニートではあったが）一般的な人間の生活を送ってきている。銃弾を打ち落とすような事態に遭うわけもない。

「あいつは元々喧嘩の腕も立っていた。小学校の頃、何度か数人の上級生に喧嘩を売られたことがあったのだが、その度にあっさり返り討ちにしてしまってたな」

派手に暴れ回る奴だった、と呆れ気味に言い続けながらもどこか誇らしげな千冬。その後ろで、ISのフィッティングを進めている一夏が補足するように言った。

「それだけじゃない。中学の時もトシは何度か喧嘩売られて、一回も負けなかったんだぜ」

「ひきこもっていながら態々喧嘩を売られていたのか。ふふっ、つくづくおかしな奴だ」

とある事情で一夏達の中学時代をよく知らない千冬は、それを聞いて僅かに笑みを浮かべていた。

「おっし！ これで全部か！」

利秋は四機のビットを全て破壊し終わると、ブレードを振り被ってセシリアの元へと急接近する。

「驚きましたわ……まさかあんな攻め方をして、ノーダメージで全て撃破するなんて……」

……ですが、少し調子に乗りすぎましたわね！」

セシリアは驚きに満ちた表情を一転させると、真っ直ぐに突っ込んでくる利秋を近距離まで誘い込み、迎撃を仕掛ける。ブルー・ティアーズの腰部に付いた二門の筒のような物が、狙いを定めるように利秋の方へと向いた。

「ブルー・ティアーズは全部で六機ありましてよ！」

その言葉を引き金として、セシリアは二発のミサイルを発射させた。本来、誘導型の高性能ミサイルだが、利秋が愚直に突き進んで来た為にその真価が垣間見られることもなく――

「しまった――」

轟音を鳴り響かせ爆ぜた。

「トシッ!!」

モニターを見ながら一夏は思わず叫ぶ。その横にいる箒と真耶も、声を出すことこそしなかったものの、目を大きく見開いて画面を見ていた。

「くそっ！ 俺が仇を――」

「落ち着け、あいつは無事だ」

ただ一人、眉一つ動かさず試合の様子を観ていた千冬は、冷静にそう告げた。

「えっ？」

「あのタイミングで来るとは……全く、悪運の強い奴だ」

微笑みながら呟く千冬。周りの三人はその言葉の意味が理解できず、ただただポカンとするだけだ。

アリーナの上空に立ち込めていた黒煙が霧散すると、中から利秋が姿を現す。その出で立ちは、今までとは異なっていた。

「……しまった、つつーのはウソだ」

利秋は不適な微笑を浮かべて言う。だが、ピクピクと微動する片眉、頬を垂れる冷や汗がその言葉の説得力を失わせていた。

第九話 対決セシリア（後書き）

決着は次回に持ち越し……ISの設定も固めないと。

第十話 決着付く

——フォーマット・フィッティング完了。

利秋の視界にその文字が移り込む。その利秋を守るように包み込んでいるIS『隼人』は、大きな変化を見せていた。先程まで勝色一色と、地味さが否めない感じだった機体には、新しく胴部分と脚に黒い色が設えられていた。それはまるで、野袴と羽織を着た歴戦の剣豪を思わせるものだった。背中に広がった銀色の翼が、戦場を疾風の如く駆け抜ける姿を彷彿とさせる。

「……たくよ、一次移行すんの遅すぎんじゃねーのか？」
ファースト・シフト

「なっ！　そ、それじゃああなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

「おう、こっからが真の戦いってヤツよ」

セシリアの驚愕の叫びに利秋は答えると、新しく姿を変えたブレードを軽く振って風を切った。

——近接特化ブレード『夕霧』
ゆうぎり

刃渡り一・七メートルだった長さが更に二・一メートルにまで伸び、それは刀というより野太刀のたちに近いものへと姿を変えていた。鎬には溝があり、そこから僅かに漏れる青白い光が、利秋の鼓動を反映するかのように律動的に点滅している。

「いくら一次移行を終えたからと言って、私の勝利に変わりはありません」

ませんわ!」

セシリアはそう言って、腰部のビットから四発のミサイルを発射させた。さっきは二発だったが今度はその倍の数、命中すれば敗北は決定である。しかし、利秋は怯むことなく夕霧を振り被り、

「きいえああああ!!」

凄まじい気迫で声を上げ、各々のミサイルを断つようにして振り下ろす。その動きはまるで、稲妻が光るかのように一瞬だった。利秋に迫っていた四発のミサイルはすれ違いざまに真っ二つに割れ、爆ぜた。

「そんな! ですが、まだまだ――」

そこでセシリアは思わず言葉を止めた。煙の中から利秋が、声を上げながらあの鋭い眼差しで迫ってきたからだ。

(殺される)

ISには『絶対防御』という、操縦者の死亡を防ぐ機能が備わっているため殺されるなんてことはない。だが、セシリアは言い知れぬ恐怖からそう思い込み、

「ひっ!」

思わず目を閉じた。来るべき痛みを覚悟し、目を瞑り続けるセシリア。しかし、それは待てども待てども来ることはなく、不審に思った彼女は恐る恐る目を開けた。目の前には自顕流『蜻蛉』の姿勢を取って停止している利秋がいた。

「とうっ」

コッソ、と利秋が軽く振り下ろした夕霧がセシリアの頭に当たる。
その瞬間、

『試合終了。勝者、桐生利秋』

アリーナ中にブザーとアナウンスが鳴り響いた。

「よくやったな利秋！」

「ああ、凄かったぜ！」

ピットに帰還した利秋を、一夏と箒は笑顔で迎え賞賛した。利秋のISは現在待機状態になっており、純金拵えのバングルとなつて彼の右腕に嵌められている。因みに、一夏も最適化を終えており、彼のISは白いガントレットに姿を変えて右腕に嵌められていた。

「ふっ、この勝利も我が天命のウチよ。勝つて当然じゃ」

賞賛を浴び、利秋は謙虚するどころかガッツポーズを取って踏ん反

り返る。しかし、その慢心も束の間。

「ふん、そう言う割には試合中に何度か焦りを見せていたが？」

「ぐっ……」

千冬から鋭く指摘され、利秋は萎縮してしまった。

「慢心するのがお前のいかん癖だ。大体、あの動きは何だ？ オルコットのレーザーを打ち消した動き、あれは中々のものだったが所詮猪武者のやることだ。その後も馬鹿正直に突っ込んではいかに嵌りおつて。何とか凌げたが、あれは運で凌いだようなものではないか」

のべつ幕無しに叱責され、利秋はすっかり小さくなってしまった。

それを見て千冬は、表情を綻ばせて彼女なりの労いの言葉を掛ける。

「まあ……今回はそれなりに良くやった。仮にもお前は素人なのだから」

「は、はあ……」

「そうですよ、私から見ても桐生君の動きは大したものでしたよ！
ここだけの話ですけど織斑先生、桐生君がオルコットさんの攻撃を凌いでいる時、嬉しそうにモニターを覗いていたんですよ♪」

耳打ちするように真耶は言った。しかし、千冬にはその声が十分聞こえていたようで、

「山田先生？」

冷たい眼差しを向けながら低い声で名前を呼ばれ、真耶の満面の笑みは一瞬にして絶望にすり替えられた。千冬から距離を取り、小動物のようにガクガクと震え出す。

「全く……そういえば、織斑には説明しておいたがお前達のISは今待機状態になっている。いつでも展開させることはできるが、規則があるからな。ほれ、しっかり読んでおけよ」

基本的な説明は真耶の役目だったのだが、彼女は現在使い物にならないので、代わって千冬が説明して分厚い本を利秋に投げ渡した。分厚い本を投げ渡すなど少し危ない行為なのだが、難なく利秋は受け取る。『IS起動におけるルールブック』と書かれた本を。

「今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

「あれ、織斑先生。俺はどうなるんですか？」

一夏が手を挙げて質問する。そう、彼は最適化まで済ませており、戦闘準備も万端。今日は戦うつもりでいた。

「流石に初心者同士でのISの試合は危険過ぎる。クラス代表に関しては、明日のSHRで多数決を取って決めようと思う」

それを聞いた瞬間、利秋は、

「織斑先生、山田先生！ではこれで！一夏、箒！じゃな！」

そう言ってピットから走り去っていった。

「どうしたんだ、トシ……？」

「さあな。まあ、お前も明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ、いいな？」

「はい」

「ふいふ、一仕事したぜ」

時刻は午後七時。外は殆ど暗くなっており、寮の廊下が室内灯で明るく照らされている。利秋は鍵に括ってある紐に指を通し、それをクルクルと回しながら自分の部屋へと帰って行っただ。すれ違うクラスメイト達は、彼を見てはヒソヒソと内緒話をするのだがそれが何故なのかは、次回説明するとして……

「お？」

利秋は自室の扉の前にセシリアが立っているのを見て足を止めた。どうやら風呂上りみたいで、ほっこりとしている。自分に用事があるって来ているのは間違いなさそうなので、声を掛けてみることにした。

「んなトコで突っ立っててどーしたんだ？」

「あ、き……桐生さん……………」

声を掛けられ、セシリアは利秋の方へと向く。

「用があんだろ？　とりあえず中入れよ」

「え、ええ……」

利秋の催促に、少し顔を赤らめてセシリアは答えた。風呂から上がったばかりで顔が赤くなっているのか、利秋はそう認識し、さして気にすることもなかった。

利秋の部屋はこの一週間で少し物が増えていた。数十冊の漫画や教養本、携帯ゲーム機にDVDがいくつかと、彼の私物だけである。全て昨日の日曜日、彼が実家から持ち込んだものなのだが、これは彼のコレクションのほんの一部に過ぎない。

「ほい、紅茶」

「あ、ありがとうございます……」

利秋は紅茶の注がれたコップをセシリアに手渡す。因みに、この紅茶は自販機で買ったペットボトル入りの物だ。家事一般を全くやろうとしなかった彼に茶を煎れるスキルなどない。

「それで、何の用だ？」

「あなたにお詫びに参りましたの。今までの数々の非礼、どうかお許してください！」

セシリアは深々と頭を下げながら言った。誠意を込めて、謝罪の意を表す。しかし、その意思は通じるどころか、

「は？ いや、非礼って……オメーそんな前のことまだ気にしてたんかよ？」

「え？ ええ……」

逆に利秋は困ったように首を傾げてしまった。余談になるが、彼は高圧的な人間や自分に刃向かう者には容赦ない（一部例外あり）。しかし、素直な人間、または弱い立場の者には滅法弱いのだ。

「つつてもなァ……俺はそこまで根に持ってるワケでもねーし、一度は昼メシ食った仲だろ？ 今更謝罪とか、んなもんいらねーぞ」

「ですが――」

「謝んのなら一夏に言ってやってくれ、アイツの方がムキになってたからよ。俺とのいざこざは今日の決闘でケリが付いた、それでいいだろ？」

利秋はさっさと話を切り上げようと、セシリアの言葉を遮って言った。彼にとって、面と向かって謝罪や感謝されることは、むしろ痒いことこの上ないのである。

「わ、わかりましたわ……」

「ウム、話はそれだけか？」

「い、いえ、実はまだ本題が残ってまして……約束を果たしに来ましたわ」

顔を背けながら、気恥ずかしそうにセシリアは言う。

「約束？」

はて、そんなものをしたか。利秋はそう思って紅茶を口に含みながら、記憶の片隅にまで思考を巡らした。が、遂に思い出すことはできず、怪訝な表情を浮かべてしまう。

「ええ……あなたの『性奴隷』になるという約束ですわ」

「ブフウ————ッ!!」

軽やかな口調で爆弾発言をされ、利秋は思わず口に含んでいた紅茶を探偵物語ばりに噴き出してしまった。しかし、目の前にセシリアがいることを配慮して横向きにである。

「ど、どうしましたの!？」

「どうしたもこうしたもねーよ! 貴族のお嬢たる者がいきなりな

んっーこと口走ってやがんだ！」

「ですが、確かにあの時あなたはそう仰ったはずですわ！」

「ありゃあ手エ抜いたらって話だったろーが！」

途端、セシリアはシュンとなる。

「……私、覚悟を決めて参りましたのに……シャワーも浴びてきたんですのよ………」

俯き加減に呟きながら、人差し指でベッドを円を描くようになぞるセシリア。利秋はすっかり弱り込み、額に手を押し当てため息を吐く。そして、こう思った。もしタイムマシンがあるのなら、一週間前に戻って、自分があの爆弾発言をするのを阻止したい、と。しかし、悔いたところでどうしようもない。利秋はポン、とセシリアの両肩に手を置いた。

「えっ……?」

「『性奴隷』は流石にイカンが、『側室』ってのはどーだ？」

念のために述べておくが、側室とは言うまでもなく妾、または愛人という意味合いの言葉である。しかしこの利秋は、幼少の頃からの「女友達」という教えが定着してしまい、未だにそのニュアンスでこの言葉を使っているのである。一応正しい意味の方も理解はしているらしいが。当然セシリアがそんな事情を知っているわけもないので、

「そ、それも悪くありませんわね……私は構いませんわ！」

快く受け入れた。

「決まりだな。そんなじゃ、これからよろしく頼むぜ、オルコット……いや、セシリア」

利秋はそう言って、手を差し伸べる。セシリアはそれに応えるように手を取り、言った。

「こちらこそよろしく願いますわ、利秋さん♪」

幼き頃から、母に媚びる情けない父の姿を見て『将来は情けない男とは結婚しない』と誓っていたセシリア。目の前の利秋は、情けなかった父とは違う。初対面の時は互いに罵倒し合ったりと最悪なものだった。しかし、彼は自分を打ち負かす程に強く、恐怖を覚えはしたものの、その眼差しの中底には燃える思いが込められており、そして、不器用ながらも誰かを思いやる優しさを持ち合わせている。

——世界の野郎共を舐潰しに見てくりやオメーのお眼鏡に叶った野郎なんてごまんというだろうさ。

——ただ、俺の足元に及ぶヤツなんざいねーがな。

セシリアは、何時ぞやの利秋の言葉を思い出した。

（ええ。あなたの仰る通り、あなた以外の男など考えられませんわ）

こうして一人の少女が、最凶最悪の男に心を奪われたのだった。

(そういえば、利秋さんには正室がいらっしゃるのかしら?)

第十話 決着付く（後書き）

六日近く間が空いてこの内容の薄さ……申し訳ないです。
戦闘描写も今のところはこのレベルが限界ごわす。

人物紹介：桐生利秋（前書き）

ここいらでやっとの主役紹介でござす。

といっても、今までの話の中で語られたことにちょっとプラスアルファした程度……

専用機の紹介はもう暫くお待ちくださりませ。

人物紹介…桐生利秋

名前…桐生利秋きりゅうとしあき

誕生日…9月24日

身長…少なくとも180はある

容姿…腰まで伸びた、黒髪ポニーテール。女と間違えられそうな顔（どちらかといえばクールビューティーな感じ）

IS適性ランク…C

性格を四字熟語で表すと『傍若無人』且つ『唯我独尊』。しかし、千冬など一部の人物には頭が上がらないし、素直な人間や弱い立場の者には強く出れない。容姿のことを言われると怒る。

名前の由来は幕末～明治期の薩摩藩士桐野利秋きりのとしあきから。苗字が『桐生』

と似ていることと、彼の命日（西南戦争終結日）と誕生日が同じことから名付けられた。利秋自身も桐野に傾倒し（しかし彼の唯我独尊という性格上、自分＞桐野となっている）、桐野が得意としていた薬丸自顕流を独学している。独学ゆえの筋の粗さなどは見られるが、その剣の腕は『先手必勝』『一撃必殺』を貴ぶ自顕流に適ったものである。

一夏との出会いは小一の頃から。篠ノ之道場で他の門下生達から離れて横木打ちをしていた所に一夏に声を掛けられ、友好を築いた。

一夏のことは家臣扱いだが、内面では心の友と思っている。

中学時代は学校をよくサボり、早くても昼食時になってから登校するという半ニート生活を送っていた。しかし、喧嘩の腕っ節は強く、度々喧嘩を売られては全て返り討ちにしてきた。ゲームや漫画などから培ってきた知識も豊富で、あらゆることに関して類まれな才能を発揮する。しかし、ニートなので家事一般には手を付けない。

ゲームはアクション、RPG、シューティングと、様々なジャンルをそつなくこなす。麻雀もやる。好きな役は国士無双。自分に非常

に似合っている言葉であるという理由から。

両親は既に亡く、祖父母も利秋が生まれる前に亡くなっている為、姉の春乃^{はるの}が唯一の身寄り。

第十一話 人の噂も七十五日

決闘の翌日、朝のSHRにて。

「はい！ 多数決の結果、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいいですね♪」

黒板の前に立ち、嬉々として語る真耶。黒板には一夏と利秋の名が書かれており、一夏の名の下にはいくつか「正」の字が並んでいる。一方で、利秋の方は「正」の一字どころか、一文字すら書かれていない。要するに、圧倒的な差を付けて一夏が当選したということである。

「マ、マジかよ……」

女子達は大いに盛り上がっているが、当の一夏は愕然としていた。そして、考える。何故こうも大きな差を付けて自分が当選してしまったのか。

（流石にこの結果は不自然すぎる。少しくらいトシにも票は入るだろう……ん、そういえば……）

一夏はふと、昨日の決闘が終わった後のことを思い出した。姉の「多数決」という言葉を聞くなり、利秋が急ぐようにして帰ろうとしていたことを。もしかと思い、一夏は後ろへ振り返って利秋に声を掛ける。

「なあトシ、昨日は早く帰ってたけど一体何してたんだ？」

「あー？ ゲームやってたぞ。まさかオメー、俺が裏で工作したとか疑ってんじゃねーだろうな？」

利秋はそう言いながら一夏を睨みつける。

「そうじゃないけど……っていうか俺は何をしてたか聞いただけなのに、なんでそんなムキになるんだよ！ まさか本当に何かやってたんじゃー」

「そんなことはありませんわ！」

二人の間に割って入ってきたのは、教室の後ろの方にいる筈のセシリアだった。突然前に出て来られたので、一夏はついたじろいしてしまう。セシリアの言葉は続く。

「利秋さんは昨日、食事以外はずっと自室にいらっしやいました。私が証人ですわ。何せ昨日は、その……自室に招いて頂いてお話をさせてもらいましたから」

セシリアは恥らいながらも、嬉しそうな表情をして両頬に手を当てて言う。その言葉に女子達は声を上げ、ざわつき出した。

「やっぱり二人付き合ってるんだ！」

「誰なの！？ 此間破局したって言ってたの！」

すっかり騒がしくなってしまった教室の有様に千冬はため息を吐くと、セシリアの頭を出席簿で叩いて席に着くよう促し、利秋を睨んだ。

「聞いておくが、度の過ぎた事に及んでいたりなどはしていないだろうな？」

「や、ヤダなア……俺がんなことするよーに見えますかい？」

「……………そういえばお前はそういうことに関しては無縁な奴だったな。何事もなかったのならいいが」

千冬が踵を返すと、利秋は安心したかのように息を吐き出す。

「クラス代表は織斑一夏。これで異存はないな」

はーい、と（一夏を除いた）クラス全員が一丸となって返事をした。

一時限目が終わった後の休み時間。一夏は、利秋が何の策も弄していないということには納得していたが、このあまりにも圧倒的過ぎる結果がどうしても疑問に思えて仕方がなかった。どういうわけか気になったので、一夏は隣の女子に尋ねてみる。

「なあ、どうして俺を選んだんだ？ 利秋が流石に得票数ゼロってのもおかしい話だと思うんだけど……」

一夏のそんな言葉を、女子達は後ろで机に突っ伏して寝ている利秋に聞こえないように小さな声で言う。彼には丸聞こえだったりするが。

「桐生君には悪いけど、ちょっと任せるのは不安だったりするかな……」

「うん、どっちかって言えば織斑君が安心できるしね♪」

一夏は益々不思議に思う。この一週間、利秋は女子達に対してそれなりにまともな接し方でいた筈だ。それに箒との剣術勝負ではいい勝負を見せていたし、対して自分は無様な姿を晒していた。にも関わらず、何故自分の方が安心できると言うのだろうか。

「昨日、桐生君の噂話をちょっと小耳に挟んじゃって……」

「私もー。中学の時、委員会の仕事を誰かに押し付けてさっさと帰ったって聞いたよ」

「書類の提出期限を守らなかったって噂も聞いたわ」

一夏が怪訝に思っているその背後で、利秋は策が成った残忍な策士のように顔を伏せながらほくそ笑んでいた。

（ケケケ、計画通りよのオ）

この男、一夏の睨んだ通りに昨日、根回しをしていたのである。所々で物陰に隠れては声のトーンを高くして、「桐生君は真面目に学校に来てなかった」だとか「委員会の仕事を真面目にしなかった」などの流言蜚語を飛ばす、ということをしてきた。しかも、それだ

けではない。

（こんぐれーなら一夏のヤツも見破るってのは分かったたからな。セシリアにアリバイを作るよう根回しした甲斐があったってもんだ）

先のSHRでセシリアが利秋を庇い立てたのも、利秋の策だった。ついでに、セシリアにも、一夏に票を入れるよう仕向けている。セシリアとしてはどうしても利秋に入れたかったのだが、彼の説得と懇願にほだされて結局一夏に投票したのである。このように利秋は、綿密な策を張り巡らせていたのだ。我ながら中々の妙計だと、利秋は密かにほくそ笑む。

勿論そんな利秋の心中を誰も察することはできず、皆口々に利秋の悪い噂をする。しかし、利秋にとってそんなことはどうでも良かった。彼女らが言っている事は事実だったりするし、特別、女子に好かれようとは思っていないからだ。

「それくらいならまだいいわよ……私なんて、喫茶店で出されるおしぼりで顔を拭くって話を聞いちゃったわ」

利秋は心の中でずっこけた。

「あ！ 私、回転寿司屋でガリをタッパーに詰めて持って帰るってのを聞いたよ！」

「黒魔術にハマっているって本当なのかしら？」

何度も心の中でずっこける利秋。何故ならば、彼が流した噂にそんなものはなかったから。しかもそんなことをした覚えすらない。一日もしないうちに、噂にあらぬ尾ひれが付いてしまっていたのだ。一夏が苦笑い気味にそれらのデマを否定したので、それ以上噂が広

まることはなかったが。

「それにしても誰なんだろうな、トシの噂流した奴は。許せねえよ」
昼休みの時間。幼馴染面子三人にセシリアが加わった四人は、食堂で昼食をとっている。親友のあらぬ噂が流されたということで、一夏は義憤に燃えていた。

「別にキレルほどのことでもねーだろ。誰が流したかとか、そんなのどーでもいいーじゃねーか」

利秋は一夏を宥めるようにして言う。黒魔術云々はともかく、悪評を流したのは彼自身だったりするのだが。

「そうですわ。所詮は他人の言う事。私は利秋さんのことを十分に理解していますからそんな戯れ言に惑わされたりはしませんわ。ですが、お手拭で顔を拭いたりくしゃみをした後に「畜生」なんて言われるのは些か品性に欠けるので自重して頂きたいものですわ……」

「俺はオッサンか。つーか惑わされるところかオメーも変な尾ひれ付けようとしてんじゃないか」

利秋は凄んで怒鳴るが、セシリアは愉快そうに笑うだけだった。此間まで罵倒し合うほどの間柄だった二人だが、今は冗談を言い合えるほどの仲に収まっている。

「時に一夏、オメーのIS操縦に関してはセシリアが見てくれるとよ」

気を静めて利秋は言う。因みに、前の時間にセシリアは今までの無礼を一夏に詫びているので、二人の間にはもうわだかまりはない。一次移行を迎えたとはいえ、IS操縦についてまだまだ不慣れな一夏にとって、教官をしてもらうとはいうのは良い話である。しかし、それを快く思わない者がいた。箒だ。彼女は勢いよく両手をテーブルに叩き付け、利秋に詰め寄る。

「どういことだ利秋!？ 一夏の教官は私が受け持つことになっているのだぞ!」

「んなこと言ってつけどオメー、一週間ロクにISの講義しなかったじゃねーか」

ジト目で利秋に反論され、箒はバツが悪そうに「くっ」と唸る。

「そうですわよ。私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が教えて差し上げれば、上々の成果が期待できますわ。私、適性ランクはAでしたし」

ふふん、と胸を張ってセシリアは言う。

「だが、一夏は私に教えて欲しいと――」

「私も利秋さんから教えるように頼まりましたの。それに、ランクCの篠ノ之さんが教えるより、私の方が効率的だとは思いますが？」

「ランクなど関係ないだろう！」

火花を散らせて互いに唸りながら睨み合う二人。心なしか彼女らの背後には龍と虎の姿が見える。因みに、箒に龍でセシリアに虎だ。

「あれ、ランクってあまり意味ないんじゃないか？」

「おー、ありゃあ飽くまで最初の格付けだからな。何せこの天才の俺がランクCなんだ」

一夏の投げ掛けた疑問に、利秋が答えた。昼食をさっさと平らげてしまった彼は、洋食セットに添えられたコーヒーを啜っている。

「なっ！ 利秋さんは私の味方じゃありませんの！？」

セシリアは利秋に勢いよく詰め寄った。その勢いに圧され、利秋はひっくり返したコーヒーをまともに浴びてしまう。

「どおおわっっちゃああー！！」

あまりの熱さに利秋は床に倒れ込み、のた打ち回る。セシリアはハッとして、テーブルの上に置いてあるお手拭きを利秋に謝罪しながら差し出した。利秋はそれで顔に掛かったコーヒーを拭い去る。

「はしたないですわ利秋さん。私、お手拭で顔を拭われるような事は自重して頂きたいと、先程言いましたのに……」

「今のは拭いてもいいだろうが！　つかコレ差し出したのオメーだし俺がこんな目に遭ったのもオメーのせいじゃねーか！」

利秋の猛抗議をさらっと受け流してセシリアは笑っている。一夏と箒は、その様子を啞然として見ていた。あの利秋が手玉に取られるとは、二人はそう思った。

「まー、とりあえず一夏の面倒は二人で分担して見りゃいいじゃねーか。セシリアには俺の方も見てもらいてーしヨ」

「ええ！　勿論見させて頂きますわ！　寧ろ利秋さんだけを見続けます！」

目をキラキラ輝かせて威勢よく返事をするセシリア。

「いや、一夏も見ろよ……正直コイツ一人だと心配だ」

と、利秋は箒を親指で指しながら言う。

「人を指差すな！　それに何度も言ってるが、私は一夏からどうしても教えてほしいと懇願されたのだ！」

「したのか？」

「い、いや……してねえ」

利秋から問われ、一夏は遠慮がちに答えた。それを聞いて利秋はジト目で箒を見据え、

「箒、嘘は武士の恥だ」

と非難した。武士道精神を重んじている箒にとって、それは十分に痛い言葉であった。箒はショックのあまり、その場にペタリと座り込んでしまう。そして、時折うわ言を呟きながら、指で床をなぞっていくのだった。

その後、次の授業の始まりを知らせる予鈴が鳴り響いても箒が動くことはなく、利秋が「一夏との時間が取れるよう取り計らう」と説得したことであろう箒は立ち直った。しかし、説得に時間が掛かりすぎた為、授業に遅れた二人は仲良く千冬からの制裁を食らう羽目になったのだが。

第十一話 人の噂も七十五日（後書き）

なんか行き当たりばったりで書いてたらセシリアにSが入った。これってキャラ崩壊ってことにしたほうがいいんじゃないか。

ガリ（に限らず食べ放題の店とか）って持ち帰ったりすると窃盗罪だか詐欺罪でしたっけ確か。それ以前にやるのは相当恥ずかしいと思う……皆さんやらないようにしましょう。

第十二話 パーティーで（前書き）

大変ご無沙汰しておりました。色々気が滅入ってましたが良くなつたんで久しぶりに投稿します！

第十二話 パーティーで

「国土十三面待ちでダブル役満、と。クッククク。またも一位じゃ」
利秋は自室で一人、部屋の照明も点けずにパソコンのディスプレイを眺めながら不気味な笑い声を上げている。只今の時刻午前三時、絶賛夜更かし中だ。

一ヶ月も経たない間に彼の部屋は酷い有様になっていた。二つあるベッドの内、使われてない方は物置と化して大量の漫画などが山積みされている。床は所々に、ジュースの飲みこぼしが乾いてシミができており、菓子の袋が散乱していた。潔癖症な人間、いや、そうでなくとも普通の人間であればこの空間は耐え難いものかもしれない。しかし、この状態は彼にとってみれば普通のことなのだ。

「もう三時か。そろそろ寝っか」

利秋はディスプレイ右下に表示されている時刻を確認すると、パソコンの電源を落としてベッドに身を投げるように横たわった。朝になれば家臣（一夏）が起こしに来る、そう思っていた彼に寝坊の心配など無かったようで、あっさりと眠りに就いたのだったが……

「ふがあア」

目を覚ました利秋は大きく欠伸をすると、壁に掛けられた電光式の時計へと目をやった。緑色に光る数字は、今の時刻が四時限目であることを示している。完全に遅刻である。中学までの彼ならば取り立てて慌てたりすることはなかったが、今はそういうわけにはいかない。今の自分の担当教諭はあの千冬なのだから。

(……あんのヤロー、裏切りやがったな)

と、利秋は一夏への恨みを募らせる。実は何度も一夏から起こされたのが起きなかったただけだし、そもそもこの寝坊は彼の夜更かしが招いた結果だったりする。しかし、唯我独尊な彼がそんな考えに至ることはない。一夏にどんな悪戯を仕掛けてやろうか考えながら支度を済ませると、利秋は部屋を飛び出した。

「……遅刻の理由を聞こうか」

グラウンドの真ん中で、仁王立ちの千冬の前に正座させられている利秋。その横ではISスーツを身に付けた女子達がその様子を黙って見ており、彼は公開処刑の状態にあった。

「い、妹が病気になっちまって、それで病院に連れて行ったんスよ」
利秋が言い切るや否や、千冬は出席簿で彼の顔を横殴りした。その衝撃は凄まじかったようで、利秋は砂埃を立てて横に吹っ飛び転がった。

「遅刻の理由は？」

倒れこんでいる利秋の元まで歩み寄ってしゃがみ込むと、千冬は同じ質問を繰り返した。殴られた顔、転んだ拍子に打ち付けた体中のあちこちの痛みに呻きながら、利秋は顔だけを千冬の方に向けて答える。

「い、妹が病気になっちまって――」

再び、しかし今度は言い切る前に左頬に炸裂する出席簿。

「大方夜更かしでもして寝坊したのだろう、阿呆みたいな言い訳をするな」

「へ、へい……」

「放課後、グラウンド十五周だ」

ここI S学園のグラウンドは一周がほぼ五キロあり、遅刻した者には千冬から十周走る罰が科せられる。しかし、利秋にはそれよりも多い十五周が科せられた。フルマラソンを凌駕する道のりだ。利秋は思わず絶句し、金魚のように口をパクパクさせていた。

「くだらん言い訳をするからだ。本来なら二十周走らせる所をサ―

ビスで十五周に負けてやってるのだ、ありがたく思え」

二十周、最早フルマラソン二周分以上の道のりである。反論するわけにもいかず、利秋は気の抜けた返事をするしかできなかった。

「さて……お前もISをさっさと展開させろ」

「はい」

気を取り直して利秋は、バングルの装着された右腕を天高く翳す。その瞬間、バングルから薄い光の膜が広がって利秋を包み込み、ISが形成された。

「よし、お前はそのまま待機だ。織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は、地表から十センチだ」

千冬は上空を飛び回っている一夏達に指示をする。利秋が説教を受けている間も、彼らはずっと飛び回っていたのだった。指示を受けて間もなく、まずはセシリアが一気に急降下、そして地表に接近するギリギリの所で足のブースターを噴射させて上手くスピードを殺した。

「おー、ブラボー」

利秋はゆったりとしたテンポの拍手をしてセシリアを賞賛する。間の抜けた言い方からしてただノリで言ってるだけのようだが、セシリアは素直にその言葉を受け止め嬉しそうに微笑んだ。それから間髪を入れず、大きな衝突音と地響き、そして入道雲のような土煙が遠くに立ち込めた。見学していた女子達は思わず声を上げ、

「一夏っ！」

箒は土煙の元まで駆け寄る。土煙の起こった場所には綺麗に半球状の穴ができており、その中央では一夏が地面に顔を埋めていた。利秋は崖っぷちにしゃがみ込んで一夏を見下ろす。

「なーにやってんだオメーはよ。地球に落ちてきた時のベジータか？」

「いってて……死ぬかと思った……」

一夏は地面から顔を引っこ抜いて体勢を立て直した。

「よくもまあ、こんな大きな穴を開けてくれたものだな。織斑、桐生、後でお前達で片付けておけよ」

「んなつ、俺は関係ねーでしょが！」

千冬の言葉に利秋は慌てて反論した。

「放課後のランニングを五周追加すると言ったら？」

「是非ともやらせて戴きます。任せて下さいよ、俺、穴埋めるの上手いっすから」

ついさっきの嫌そうな顔はどこへやら、利秋は得意げな顔でアピールした。穴を埋めることに上手下手があるのかは疑問だが。

「では織斑、武装を展開しろ」

「は、はいっ」

一夏は右腕を左手で握り、集中する。掌に光が収束し、やがてそれは大きな刀『雪片ゆきひら式型』を形成していった。言葉で簡単に表されているが、一夏にとってはこの武装展開でさえ精一杯のことなのだ。しかし、

「遅い、○。五秒で出せるようになれ」

その精一杯は認められるどころか、逆にダメ出しされた。一夏は姉の辛辣な評価にがっくりと項垂れる。

「次は桐生、武装を展開してみろ」

「うーっす」

一夏の背後に控えていた利秋が乗り出してきた。

「『はい』だ」

「はい……ンドウバアアア!!」

利秋は腰を低く下ろし、両手を高く突き上げる自顕流の姿勢を取ると、掛け声を上げてその両手に巨大な野太刀『夕霧』を展開させた。その面妖な掛け声に、千冬以外の全員がキョトンとしている。

「うむ、早さに申し分はないが、その喧しい掛け声は何とかならんのか？」

「なんかこうした方がしっくり来るんで。駄目っすかね」

「……なるべく声を上げなくても展開できるように直せ。オルコツト、武装を展開しろ」

「はい」

透かさずセシリアは、真横に突き出した手先に狙撃銃『スターライトmk?』を展開させた。

「流石だな、代表候補生。ただし、そのポーズは感心できんな。横に銃身を展開させて誰を撃つ気だ？ 正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれは私のイメージをまとめるために必要な――」

「直せ、いいな？」

「……はい」

反論をしようにもひと睨みで一蹴され、セシリアは大人しく従うしかなかった。その後も近接用武装の展開に手間取り、彼女は完璧に代表候補生の面子を崩されてしまう。話の流れで先日のクラス代表決定戦において利秋に懐を取られたことを指摘され、セシリアは矛先を彼へと向けた。個人間秘匿通信プライベート・チャネルを彼に送り付けて抗議する。利秋にもこの個人間秘匿通信を扱う心得はあったようで、セシリアの抗議に応戦し、誰に知られることもなく二人の言い争いは白熱していった。様子がおかしいことに気付いた千冬が、二人の頭頂部に拳骨を落とすことでその討論は収束したのだが。

「ふーん……ここがIS学園……」

同日夜。学園の正面ゲート前に、小柄な身体の少女が立っていた。左右それぞれに結われた栗色の髪が風に靡いている。そして、彼女の華奢な身体に相反するような大きなボストンバッグが肩に提げられていた。

「ここにあの二人が……」

一方で、寮の食堂。

「というわけで、織斑君クラス代表決定おめでとうっ！」

「「「おめでと〜っ!」」」

祝福の声と共に一斉にクラッカーが鳴らされ、その中から飛び出た

紙テープが一夏の頭に乗りかかる。夕食後の自由時間、利秋を除いた一組のメンバーが各自飲み物を手に盛り上がった。所々、即席ながら中々立派な装飾が成されており、壁には大きく『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の張り紙が貼られている。しかし、主役の一夏はあまり楽しそうには見えない。因みに、利秋がこの場にいらないのは別に除け者にされているというわけではない。彼は今もグラウンドを走っているのである。

「人気者だな、一夏」

一夏の隣に座っている箒は、一夏以上に楽しくなさそうな表情で言葉投げ掛けた。他の女子達がオレンジジュースなどを持っている中、彼女は茶を手に持っている。

「……そう思うか？」

「ふん」

箒は茶を飲み干すと、鼻を鳴らしてそっぽを向いた。一夏はどうして彼女の機嫌が悪いのか分からず、怪訝そうにしている。利秋がいない今、彼女だけが頼りだというのにこれでは立つ瀬がないというものだ。

一夏が途方に暮れているところで、突然、カメラのシャッター音と共に一瞬辺りが眩しくなった。驚いて一夏が目を開くと、そこには一人の女子がカメラを構えて立っていた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューしに来ました。あ、私は二年の黛薫子、副部长やります。はいコレ名刺ね。では織斑君！ クラス代表になった今の気持ちをどうぞ！」

突如乱入してきた上級生、薫子はスムーズに話を進め、ボイスレコーダーを一夏の口元にズイッと向ける。

「えっと……」

対照的に一夏は口ごもっていた。

「まあ、なんというか、頑張ります」

「ええ……もっと面白いコメントが聞きたいんだけどなあ」

さつきよりも力強くボイスレコーダーを押し当てられ、一夏は困り果ててしまう。そこへ助け舟を出すかのように、突然食堂の扉が乱暴に音を立てて開けられた。そこには、肩で息をしている利秋がいた。全員が自分に視線を向けてくることも意に介さず、利秋は息を弾ませ、一夏のいるテーブルへヨタヨタとした足取りで歩み寄っていく。女子達は思わず利秋のために通り道を作り、まるでモーセが海を割ったような状態となっていた。利秋はテーブルの上にある一五リットルサイズのコーラ（半分ほどの量）を引ったくるように手に取ると、豪快にがぶ飲みし出した。ペットボトルを傾けすぎた為、口元から小さな滝となってコーラが溢れている。

「ず、随分と大変だったみたいだな」

頼りになる親友が戻ってきたことに一夏は内心喜んでいるが、その尋常でない様子を見て、苦笑い気味に利秋に労いの言葉を掛けた。

「フツ、神行太保と呼ばれたこの俺にとっちゃあ、こんくれエ造作もねーヨ」

利秋はドヤ顔で返事すると、突然無表情になって一夏を見つめる。

「ど、どうしたんだよ？」

一夏の問い掛けに利秋は答えなかった。代わりに、手に持ったペットボトルで一夏の顔を殴り飛ばす。中身が全くないので然程痛みはなかったが、一夏は大きく仰け反り、不可抗力で隣の女子に寄り掛かってしまった。咄嗟に一夏は女子から離れ、両手を併せて謝罪する。

「わ、悪い！」

「う、ううん！ 別に、私は……」

そう言う女子の顔は微妙に赤くなっており、満更でもないという感じだった。その様子を見ていた箒は、余計に機嫌悪そうにギリリと歯軋りをする。

「なんでこんなことするんだよ！」

一夏は隣の箒の状態が悪化したことにいち早く気付き、保身のために利秋に抗議の言葉を投げ掛けた。利秋は二本目のコーラを飲みながら、視線だけを一夏に向けると、

「……なんとなく」

それだけ言ってグイッとコーラを飲み干した。実は自分が走っている間、チャホヤされていた一夏に怒りを覚えただけのことなのだが、大した理由もなく殴られたことに一夏は腹を立てたが、この場で騒

ぎを起こすのはマズいこと、利秋に喧嘩を売っても敵わないことを考えて恨めしそうに利秋を睨むだけだった。そこで再びカメラのシャッター音が鳴る。次に薫子の標的になっていたのは利秋だった。

「君がもう一人の男子、桐生利秋君だね」

「ああ、そーだけど。まさかアンタ俺のファンか？」

「ま、まあ、そんなところかな」

「そんなら写真はいいぜ、高くつくけどヨ」

と、利秋は何故か刑事ドラマのボスみたいに、グラスを片手に持って揺らすポーズを取る。

「おう、これならインタビューも面白そうなのが期待できそうねえ。それじゃあズバリ桐生君！ 男性IS操縦者としての意気込みをどうぞ！」

利秋の口元にボイスレコーダーが当てられた。

「全人類が俺にひれ伏すような、そういうIS操縦者に私はなりたい」

「随分と豪語だね」

薫子はノリノリで利秋の話を聞いているが、周りの女子達はその大言壮語に些か苦笑い気味である。

「じゃあじゃあ次の質問ね。ぶっちゃけ、この中でいいな〜って思

う女子は誰かな？」

流石は女子と言った所か、恋愛話となると、周りが一気にガヤガヤと騒がしくなりだした。

「ん？ おお、そーだな……皆俺の側室って言いてーところだが、今の所セシリアがいーんじゃねーかな」

「わ、私っ？」

セシリアは自分の名前を呼ばれ驚くと同時に、嬉しさと恥ずかしさで顔を赤らめる。

「やっぱ破局ってのはガセだったのね。ところで、セシリアちゃんを選んだそのワケは！？」

薫子は一層ボイスレコーダーを押し付ける力を強くさせ、セシリアも大きく目を見開いて利秋に詰め寄った。

「金持ちだから」

「「は？」」

利秋の躊躇いもない即答ぶりに、二人は声をハモらせる。

「金持ちと結婚でもすりゃあよ、どんだけ遊んで暮らそーが誰からも文句言われねーだろ。それに金持ちならではの贅沢もできるし、楽しそうじゃねーか」

嬉々として語る利秋。それとは対比するように、セシリアは悲しそ

うに大きくため息を吐いた。そんな彼女を憐れんで、薫子はひとつ提案を出す。

「そ、それじゃあ、記念として戦い合った二人のツーショットでも撮ろうか！」

「えっ？　そ、そうですね……」

セシリアは意外そうに声を上げたが、少し嬉しそうにモジモジしながら利秋の方を何度も瞥見する。チラチラと見られていることに気付き、利秋はセシリアに声を掛けた。

「トイレか？」

「ち、違いますわよ！　……そ、その……写真を撮るのだから手を……」

「……手？　あー、成る程な」

自分の手を見て、利秋はセシリアの言いたいことをとりあえず理解（？）すると、彼女の隣に立つ。

「それじゃあ撮るよー、23765+67549はー？」

「91314」

「ご名答」

同時にカメラのシャッターが切られる音がした。二人きりの写真、それも手を握り合ったもの。それだけだとセシリアにとって聞こえ

は良かったのだが、問題は利秋の手。セシリアが両手で彼の手を握っているのに対し、利秋は片手しか差し出していない。彼はもう片方の手の人差し指一本を、セシリアの頭の後ろから覗かせるように立てていた。幸か不幸か、セシリアは彼の悪戯にその場で気付くことはなかった。後に撮った写真を貰って漸く気付き、彼に猛抗議するのだがそれはまた別の話。

利秋に続いて今度は一夏が写真を撮ることになったが、こちらは利秋とは対照的に多くの女子が集合して写りこんだ。利秋の人望が薄れている証拠なのだが、彼はそんなことに気付く由もない。その後、パーティーは十時まで続いた。

第十二話 パーティーで（後書き）

小学校の頃、写真撮るときに人差し指立てて「鬼の角」ってのが流行ってたんですね。サルゴリラチンパンジとかも流行ってたな。

鈴登場の割には出番少なすぎるかな……

第十三話 中国代表候補生来る

「ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

早朝、教室の自分の席に着くなり、一夏と利秋はそんな話を小耳に挟んだ。

「転校生？ 今の時期に？」

入学から数週間が経ち、一夏はそれなりに女子と会話ができるようになっていた。因みに利秋はというと、寝起きすぐの為か、ダルそうな表情で椅子にもたれ掛かっている。先日の十五周持久走の刑に懲りたのか、今日は寝坊せずに登校してきたらしい。しかし、夜更かしだけはギリギリまでしていたせいで寝不足気味なのだ。自業自得といえば自業自得なのだが、この唯我独尊男にそんな考えはこれっぽっちも起きない。

ところで一夏が疑問を投げ掛けたことに関してだが、彼がそう思うのも無理はない。彼の言う通り、四月というこの時期に転校してくるというのも謎なのだが、一番の謎は、ここIS学園の厳しい転入条件を満たしているということだ。普通、国の推薦がなければ入学は認められない。

「うん。それがね、なんでも中国の代表候補生だって」

つまり、国家のお墨付きということだ。一夏もその言葉に納得したようで、成る程、と相槌を打つ。

「ふふん、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

代表候補生という言葉にセシリアは誰よりも強く反応し、腰に手を当てて勝ち誇ったような態度をとる。

「何言っただ、この超絶ウルトラ・マーベラス・グレート・マスター・スピナッチ・ストロンガーな俺を危ぶんでに決まっただろーが」

セシリアの言葉に呼応して、利秋は自画自賛も甚だしいことを言う。先程のダルそうな表情はどこへやら、今の彼は大層ノリノリである。

「利秋さん、スピナッチはハウレン草って意味でしょ」

流石に英語を母国語としているだけあって、セシリアは即座に利秋の間違いを指摘した。

「ポパイ知らねーのかよ。ハウレン草食ってムキムキになってんだろーが」

自分の間違いを認めたくないが為、利秋はもっもらしいこじつけをする。中学時代とりわけ良い成績を保っていた利秋だが、実は英語だけが格別に苦手で試験は前日に一夜漬けや山勘で凌いでいたのが事実なのだ。

「このクラスに転入してくるわけでもないのだろうか？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

話の輪の中に、箒も入ってきた。いつぞや、質問攻めしてくるクラスメイトを一喝してしまうという大失態を犯してしまった彼女だったが、今では一夏同様にクラスメイトとは自然に会話ができるようになっていた。

「だけど、どんな奴なんだろうな……」

何気なしにそう呟いた一夏に、箒は眉を顰める。

「……気になるのか？」

「ん、まあ少しは」

「馬鹿者！　今のお前に女子を気にしている余裕があるのか！？　来月にはクラス対抗戦があるのだぞ！」

いきり立った箒から怒鳴りつけられ、一夏はたじろいだ。遠くからその様子を眺めていた利秋は、馬鹿者、という単語から某長寿アニメ一家の主を連想したそう。

「確かにオメーには勝ってもらわねーとな。転校生の女を襲いたいって気持ちは分からねーでもねーけどよ。ドチンピラだしなオメー」

「そんなこと考えてねえって！」

嫌らしそうに笑いながらからかってくる利秋に、一夏は強く反論した。それにしても、ドチンピラという表現が当てはまるのはどちらかといえば利秋の方な気がするが。

「ま、まあ、確かに織斑君には頑張ってほしいよね」

「織斑君、頑張ってね！」

口々にクラスメイト達は一夏を激励する。しかし、その真意は全く

別の物にあったりするのだが、それが何かと言えば――

「フリーパスの為にも！」

そう、優勝したクラスに賞品として進呈される、学食デザート
の半
年フリーパスだ。流石に年頃の女子、甘い物には目がない。

「今のところ、専用機を持っているクラスってウチと四組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いよ！」

教室の入り口の方から投げ掛けられる否定の言葉。そちらへと目を
や
った利秋達の視界には、先日、学園の門前に立っていたあの少女
が映っていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で
き
ないから」

「おー、聞き覚えのある声と思えばオメーは……ジョン、いや、ハ
ン
ビラか？」

「いやいや……ジョンって男の名前だし、ハンビラに至ってはもう
何
なのかワケ分かんないわよ……って、そうじゃなくて！ 鈴よ！

ファン・リンイン
鳳鈴音よ！」

鈴と自ら名乗った少女は勢いよくツツコミを入れると、肩で息をす
る。そして呼吸を落ち着けると、ぼうっとこちらを見ている一夏に
視線を合わせた。

「久しぶりね、一夏。中国からの代表候補生はこの私、今日は宣戦布告に来たってわけ！」

今にもビシッという音が聞こえそうな勢いで、鈴は人差し指を一夏に向かって突きつける。突然の転校生の来訪に、教室は騒然となった。

「鈴……何格好付けてるんだ？ すっげえ似合わないぞ」

懐かしそうに少女の名を口にし、一夏は鈴をからかう。

「んなっ、なんてこと言うのよアンタは！」

憤然として一夏を怒鳴りつける鈴の頭部に、急に背後から拳骨が落とされる。響いた音から、十分な威力であったことが伺える。

「いったあ……………何すんのっ！？ ——うっ……………」

涙目になって頭を押さえていた鈴は目くじらを立てながら振り返り、背後に立つ人物に抗議の言葉を投げ掛けた。しかし、背後の人物の顔を見た途端に彼女はさっきまでの威勢を失い怯み上がってしまう。

「もうSHRの時間だ、教室に戻れ」

「ち……千冬さん……」

鈴の背後に立っていた人物、このクラスの担任である千冬だった。鷹の如く鋭い眼差しで鈴を見据えている。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ」

千冬はつつけんどんな口調で鈴をあしらう。すっかり縮こまってしまった鈴は軽く謝すると、塞いでいた通路を開けた。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

千冬のドスの聞いた声突き刺さり、鈴は自らのクラスへと逃げるようにして戻って行った。

「アイツが代表候補生……」

「一夏、今のは誰だ？ えらく親しそうだったが？」

「と、利秋さん！？ あの子とは一体どういう関係で！？」

箒とセシリアを筆頭に、クラスメイトからの質問攻めが男子二人に襲い掛かる。特に一夏に。それも千冬のキツイ制裁によって治まるのだが。

「待ってたわよ、一夏！ おまけに利秋！」

昼休み、食堂に来た一夏一行を威勢よく鈴が出迎えた。今にもビシッと指を突きつけてきそうなどころだったが、生憎と彼女はラーメンの載ったお盆を両手で持っている。因みに一行の顔ぶれは利秋や箒、セシリアは勿論のこと、彼らと特に親しいクラスメイト何人かといった感じだ。

「オメー、この俺がおまけ扱いたアどういう見だコラ」

不満そうに利秋は鈴に突っ掛かる。彼女はというと利秋のことは全く歯牙にも掛けず、ただ一夏の方だけを見ていた。

「まあ、とりあえずそこいてくれ。食券渡せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。分かってるわよ。フンッ」

「おい、どーして俺が一夏のおまけなんだよ」

一夏に注意されて引き下がった鈴に、尚も利秋が食い掛かる。

「トシもその辺にしとけよ。通行の邪魔だろ」

利秋にも注意する一夏。注意された利秋は鈴から視線を外すと、一夏の方を見据える。特に何か言い返すわけでもなく、ただ一夏を見据えながら彼の方へと歩み寄った。

「どうした――」

一夏が言い切る前に、利秋は拳骨を彼の頭に振り下ろした。殴られた勢いで、お辞儀をするような形で一夏の頭が勢いよく下がる。

「いってェ！ いきなり何すんだよ！？」

「グーパンチだが？」

一夏の訴えを言葉通りに捉えた利秋は、淡々とした表情で答える。

「俺が聞きたいのはそんなことじゃねー！」

「んなことより、オメーも通行の邪魔になってんぞ」

そう言いながら憎たらしく笑う利秋を、一夏は恨めしそうに睨んでいる。

「アンタ達、昔と全然変わってないわねー」

二人のやり取りを眺めていた鈴は、呆れたように言った。

「へっ、オメーこそ相変わらず千冬姉ちゃんに恐れをなしてたじゃねーか」

「そういえばそうだったな……なあ、お前、まだ千冬姉のこと苦手なのか？」

「そ、そんなことないわよ。ちよつとその……得意じゃないだけよ」

それを苦手と言うのでは、利秋と一夏は心の中で鈴に対し、そうツ

ツコミを入れながら食券を従業員に渡す。

「それにしても本当、久しぶりだよな。丁度丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我や病気のひとつくらいしなさいよ」

「どんな要望だよ……」

「ワリーな、こいつが怪我や病気をしますようにって夜な夜な祈ってたんだがな」

「最悪だなお前」

こうして三人で積もる話を消化している間、後ろでは箒とセシリアが面白くなさそうにその様子を見ていた。二人とも、それぞれの想い人がいきなり現れた転校生と親しげに喋っていることに気が気でない。そこへ、先に食券を出していた利秋達の食事が出された。これを好機と思った二人は打ち合わせもしていないのに、息が合ったように咳払いをした。

「利秋さん。注文の品、来てましてよ？」

会話が中断され、利秋はカウンターに置かれた『チャーシュー麺』を、一夏は『日替わりランチ（鯖の塩焼き）』をそれぞれ手に取る。

「アンタもラーメンなのね」

「ああ、これで一夏も同じヤツにすりゃあチャーシュー麺三つにな

ったんだがな。空気の読めねえヤローだ」

「いや自分の食う物くらい好きにしていいだろ！　つつーかなんでチャーシュー麺三つに拘るんだよ！？」

三人はテーブルを囲って、一旦中断していた話を再び再開させていた。隣のテーブルでは数人のクラスメイト共に、特に箒とセシリアがその様子を虎視眈々と眺めている。しかし、とうとう痺れを切らした二人は利秋達の元まで歩み寄り、両手をテーブルに叩きつける。

「一夏、そろそろどういう関係なのか説明してほしいのだが」

「利秋さん！　まさかこちらの方とお付き合いしてらっしゃるんですの！？」

物凄い剣幕で詰め寄られ、三人は再び会話を中断せざるを得なくなった。隣のテーブルのクラスメイト達は、興味津々に座席から身を乗り出して様子を窺っている。

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……」

「そーだぞ、何しろコイツは一夏に気があ——」

鈴は咄嗟に利秋の口を両手で塞いだ。

「何考えてんのよ!? 本人の前で軽々しく言ってんじゃないわよバカ!」

顔を真っ赤にして利秋を非難する鈴。利秋が何を言い掛けていたのか、一夏は分からずキョトンとしていたが、セシリアは感付いていた。彼女は鈴が利秋に特別な感情を抱いてはいないと知ると、内心で胸を撫で下ろして余裕の笑みを浮かべる。ところで、尚も口を塞がれている利秋は、必死に何度も鈴の腕をタップしていた。

「な、何よ……」

鈴の言葉に利秋は何も答えない。代わりに真っ赤な顔で目を血走らせ、もがき苦しんでいた。

「あつ、ご、ごめんっ!」

鈴が謝罪しながら手を離すと、利秋は堰を切ったように荒い呼吸をする。

「テメー殺す気かコラァ!!」

「だ、だから謝ってんじゃない!」

鈴は開き直って言い返したことで、二人は口論になった。二人が争っているのをよそに、一夏は何かを思い出したようにポンと手を叩いて箒の方を向いた。

「すっかり答えるのが遅れたけどさ、鈴とはただの幼馴染だよ。お前と入れ替わる感じで転校してきたから、お互い面識はないよな」

ただの幼馴染扱いされたこと、更には利秋との口論で気が立っていた鈴は、憤怒に満ちた表情で箒を見据える。正直、八つ当たりでしかない。箒も負けじと、ヤクザ顔負けの睨みで鈴を圧倒しようとする。しかし、鏢迫り合いのように両者一步も退かない。

「ハジメマシテ、コレカラヨロシクネ」

「アア、コチラコソ」

互いに軽く挨拶を交わすものの、その言い方には抑揚といったものがない。二人の間が険悪なことは火を見るよりも明らかなこと、一夏も無論それには気付いている。ただ、何故彼女らがこうも不仲なのか理解できておらず、怪訝そうに様子を窺っていた。まさか自分が原因だとも思わずに。

「ンンンッ！ 私の存在を忘れてもらっては困りますわ！」

突然、咳払いをして自分をアピールし出すセシリア。鈴と利秋の間には何もないと分かった以上、今更突っ掛かる理由もない筈なのだが、人一倍プライドの強い彼女が黙っているわけにもいかなかった。

「私はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ。利秋さんとは先日、クラス代表の座を賭けて――」

「アンタ、一組の代表になったんだって？」

流暢に自分語りをするセシリアを放って、鈴は一夏に声を掛けた。

セシリアが喋っている横では、利秋が携帯電話の録音機能を使って彼女の声を記録している。余談だがこの携帯電話、一夏のポケットから掏られたものだったりする。

「ああ、成り行きでな」

「良かったらIS操縦の練習、見てあげよっか？」

「おお、そりゃ助かるなあ」

「って、ちよっとお！ 聞いてますの！？」

セシリアはようやく無視されていることに気付いたようで、再びテーブルに手を強く叩きつけて怒鳴った。鈴は困ったように苦笑いしながら答える。

「ごめん、私興味ないから……」

鈴自身にとっては嫌味でもない、素直な気持ちを表したつもりだったが、寧ろそれはセシリアを逆上させるのには十分だった。

「言ってくれますわね……」

セシリアが凄んでいる後ろで、屈み込んで携帯電話を構えている利秋。それに箸が気付く。

「利秋、お前はさっきから何をやっているのだ？」

「コイツが喋ってたのを録音してたのよ。十年後のコイツに聞かせとどう反応すんのかなーって」

「……随分と悪趣味だな」

ウケケケ、と悪魔のような笑みを浮かべる利秋を、箒は軽蔑の眼差しで見ている。

「じゃあ、決まりね。アンタのIS操縦の練習、今日から私が――」

「待たんか！」

さっさと話を進めようとする鈴を、箒は一喝すると共にテーブルを叩いて制止させた。

「一夏に教えるのは私の役目だ。後から来た者からとやかく首を突っ込まれてもらっては困る」

「私は一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでてよ」

「関係ないことなどあるものか。私と一夏は幼馴染だ。それに、うちで何度も食事をしているから付き合いは深い」

「うちで食事？ それなら私の所にもしょっちゅう来てたわよ、利秋と一緒にね」

それを聞いて箒は絶句、安心しきっていたセシリアも再び火が付く、それぞれの想い人に詰め寄った。

「いっ、一夏！ どういうことだ！？ 聞いてないぞ私は！」

「私もですわ利秋さん！ 納得の行く説明を要求しますわ！」

「あー、コイツン家が中華料理屋をやってただけだ」

セシリアの方には見向きもせず、携帯電話の操作に執心しながら彼女の詰問に利秋は答える。さも余裕綽々とした態度だった鈴は、ムスツとした顔つきで利秋を睨んだ。余計なことを言うな、とでも言いたげに。

「中華料理屋、ということは店なのか」

「あ、あら、そうでしたの。お店なら別に不自然なことはありませんわね」

二人は揃って安堵のため息を漏らす。

「そーいや親父さん、元気にしてるか？　といってもあの人こそ病気とか無さそうだけだな」

「あ……うん、元気だと……思う」

一夏の問い掛けに、何とも歯切れの悪い返事をする鈴。彼女の様子を怪訝そうに思う一夏だったが、丁度予鈴が鳴ったことでその思考は止められる。

「じゃあ一夏、放課後に。そっちの練習が終わった頃に行くから、時間空けといてよね」

鈴は一夏の返事も待たずに食器を返却すると、そのまま戻って来ることはなかった。他の者達も次の授業に向けて食器を片付けに行く。そんな中、相変わらず黙々と携帯電話の操作に勤しんでいる利秋だ

が、彼は見逃さなかった。鈴が家族の話題を振られた時、彼女の表情に微かな翳りのあったことを。

（そーいうことだよな……）

利秋は手に持った携帯電話をパチンと音を立てて折り畳むと、一夏の名を呼んで投げ渡した。自分の知らない間にポケットから掏られ、更にはロックまで解除されていることに一夏は驚いていたが、すぐさま利秋に抗議する。しかし、利秋は彼の訴えを聞き流してさっさと食堂を後にするのだった。

第十三話 中国代表候補生来る（後書き）

チャーシュー麺三つの元ネタ分かる人、いてくれたらオバちゃん嬉しいわア！

アニメ三話にチラツと出てきた学食のメニュー、チャーシュー麺が載ってなかったけどあってもいいと思う。

追記。ジョン、ハンビラって一応元ネタあるんですよねえ。

第十四話 鈴の涙（前書き）

十分書く時間はあったのに、久しぶりの更新となっしまいました。別に外出といえは墓参りくらいだったのに、何をしていたのかといえは本読んで麻雀やってFPSやってばかり……

久しぶりの投稿なのに内容も陳腐、どうしたものか。

第十四話 鈴の涙

利秋と一夏の二人が鈴と一年ぶりの再会を果たした日の夜、学園の正面ゲートにて。ゲートの真ん中に立つ警備員の視線をかわすように、ひとつの影が軽やかに移動していた。影は次々と警備員の監視を簡単に切り抜け、一年の学生寮へと辿り着く。照明に照らされた影が、その正体を顕わにする。利秋だった。彼は白いレジ袋を肩に担いでエントランス前の茂みに姿を隠している。彼の目線は、エントランス前に立ちほだかる警備員へと向いていた。

（アイツを倒して行くのは流石にちとマズいか……）

利秋は悩んでいた。彼には十分な勝算はあるらしいのだが、警備員を倒してしまえば大きな騒ぎになるのは必然。かといって素直に出向けば門限の厳しいこの学園のこと、「こんな時間まで何処に行っていた」などと根掘り葉掘り問い詰められるのがオチだ。

そもそもどうして彼がこんな状況になっているのか、少し振り返ってみたい。

放課後の日課として行われている一夏のIS訓練。一夏より知識に優れている利秋と、経験の多いセシリアが彼のコーチを務めているのだが、今日は訓練機使用の許可が下りた筈までもが加わった。そこで、筈の一夏に対する想いを汲んだ利秋は、「部屋に籠って遊びたい」と訓練を降りたのである（部屋に籠って遊びたいというのは本心だったりするが）。余談だが、利秋がいなくなったことを大いに不満に思ったセシリアが、一夏に対して模擬戦と言う名の八つ当たりをしたとか。

そんなわけで自室にさっさと戻る利秋だったのだが、彼は買い置き菓子で済ましたことに気付くや、私服に着替えてモノレールで隣の駅へと買出しに行くのだった。学園内に売店があるのだからそこで

買い物を済ませればいい話なのかもしれない。しかし、利秋はこの品揃えには不満があるらしく、こうして態々遠くまで買出しに出たというわけだ。

回想終了。利秋はどうやって無事、穩便に自室まで戻るのかを考え込んでいる。

（うっし、アレで行くか）

利秋は何やら閃くと、その場から移動した。

一年寮の屋上。ここへの生徒の出入りは自由となっており、晴れた日ならば満天の星空を望むことができる。とは言っても、ここに入りする生徒は滅多にいないのだが。暖かい季節になってきたとはいえ、夜に吹く風はまだまだ肌寒くもある。態々こんな時間に出向こうと思う者もないのだろう。今も少女が一人、塔屋の壁に背を向けて座り込み、すすり泣いているだけだ。

「どうして忘れちゃったのよ……バカ……」

少女は鈴だった。目にじわりと涙を浮かべた鈴は、怒りと悲しみが混じった表情で呟いている。

「ん……」

ゆっくりと、顔を上げた彼女は信じられないものを目の当たりにした。前方の柵の向こうから、何やら不審な人影が登ってこようとす
るのを。鈴は思わず飛び退き、利き腕にISを部分展開させる態勢
に入る。

「アンタ誰よ!？」

鈴は影に向かって怒鳴る。流石自ら代表候補生と豪語するだけはある、その語勢から気後れというものは感じられない。

「あ？ その声、鈴か？ そんなら丁度良かった、コレ受け止めろよ」

彼女には聞き覚えのある声だった。

「と、利秋……?」

鈴が呆然としているのにも構わず、不審者もとい利秋は急に下から何かを投げ付けてきた。床に落ちる前に、鈴は慌ててそれを受け止める。コンビニのロゴマークがプリントされた大きなレジ袋、案外重かったのか鈴は少しよろめいた。利秋の方は、アクロバティックな動きで一気に柵を越えて屋上の床に降り立った。

「これは……?」

「ああ、ソレ買ってる間に門限過ぎちまってよ。色々聞かれんのも面倒だから配水管伝って登ってきたんだ」

鈴から袋を受け取りながら利秋は、普通の人間ならばしないようなことをさも当然のように語る。普通ならばツツコミのひとつやふたつでも入れるところなのだが、鈴はただ黙っているだけだった。

「ところでオメー、こんなところで一体何を――」

鈴の様子に違和感を覚えた利秋は声を掛けようとしたが、それは突然の鈴の涙によって止められる。

「えっ。お、おいっ……泣いてんのか？」

利秋は思わず上ずった声で尋ねた。しかし、鈴は返事をするどころか、肩を震わせ鳴咽まで漏らし出す有様だ。

（オイオイどーして泣いてやがんだコイツは……っーかこんなところ誰かに見られりゃ百パー俺が泣かせたって思われるじゃねーか。そしたら女どもからの評判ガタ落ちだぞ（既にガタ落ち））

女子供の涙に弱い利秋はいつになく動揺しきっている。だが、このままうろたえていても埒が明かない。利秋は衝動的に鈴の後頭部に手を回し、彼女の顔を覆い隠すように自らの胸に押し当てた。

「とりあえず治まるまでこうしといてやつから、感謝しろよ」

「……ごめん」

驚きのあまり一瞬泣き止んだ鈴だったが、一言詫びると再び泣き出した。利秋はそれから鈴が泣き止むまで、一言も発することはなかった。気を利かせて声を掛けなかった、というわけではなく、単にどうすればいいのか戸惑っていただけなのだ。結果オーライなこと

ではあるが。Tシャツに滲みる鈴の涙から感じ取れる生暖かさが、余計に利秋の動揺を強くさせる。微かに香水の匂いがする彼の胸の中で、鈴は存分に泣き続けた。

「それでこんなトコまで飛び出して来たっつーワケか」

「うん……」

利秋と鈴は二人して塔屋の壁に背を預けて座り込み、話をしていた。鈴は利秋から貰った缶ジュースを両手で持ち、活気のない返事をする。彼女が屋上まで来て泣きじゃくっていたのは、一夏に約束をちゃんと覚えてもらえてなかったことに腹が立ったからだと言う。正確には、一応約束を覚えていたと言えば覚えていたのだが、履き違えた覚え方をしていた。

「そりゃあどうしよーもねーよ。オメーもあのバカがどんだけクソバカかは知ってんだろーが。ISの制御に失敗してグラウンドに激突するわ、この俺を寝坊させるわ、空気は読めねーわ……んなヤツが数年前の約束なんざ覚えてるとでも思うか？」

一夏を散々に言いまくる利秋。寝坊に関しては自業自得な上、空気が読めないのは彼にも言えることだが。鈴は利秋の言葉に何も答え

ず、代わりに再び目に涙を浮かべ始めた。数年前の約束なんぞ覚えてると思うか、という彼の言葉が心に深く突き刺さっていたらしい。自分の失言に気付いた利秋は、慌ててフォローを入れる。

「そ、その分俺は天才だからな。ちゃんと覚えてっぞ約束。料理が上手くなったら毎日オメーの酢豚を食うってヤツだよな？」

それを聞いた鈴はピタリと涙を止め、大きく目を見開いて利秋の方を見た。

「ど、どうしてアンタが知ってんの？」

「そりゃあん時、後ろの掃除用具入れの中に隠れてたからな。アイツが用事があるから先帰っててくれて言うモンだから、何かあんのかと思って忍び込んでたんよ」

「そ、そーなんだ……」

薄ら笑いを浮かべながらの利秋の発言に、鈴はドン引きする。ストーカーと変わらないのではないか、彼女はそう思いつつも口に出したりはしなかった。

「でもアンタが覚えてても意味ないわよ……」

盗み聞きだったとはいえ、自分の言葉を一字一句違わず覚えている者がいたということは鈴にとっては喜ばしいことだった。しかし、やはり肝心の人物が覚えていないのでは意味がないわけで、鈴は眩しきながらため息を漏らす。

「んなことねーだろ。オメーのメシが毎日食えるってのは俺にとっ

「ちゃあそこそこ魅力的な話だと思うがな」

「えっ……」

鈴は俯けていた顔を利秋の方へと向ける。目の前には自分の方を真っ直ぐ見つめる利秋の顔。

（ど、どどどういうことよ？ まさかコイツ、告白のつもり？ ていうかそんなマジマジと見られると……）

動揺を抑えられず慌てふためく鈴。その動揺っぷりは利秋の目から見ても明らかな程なのだが、彼は表情を寸分も崩さずにただ鈴の顔を見つめる。

（コイツって変なヤツなんだけど、顔はかなり良いのよね……それに、昔クラスの男子からかわれてた時も助けてくれたりしたし……って、何考えてんのよ私！？ そりゃ少しは嬉しいけど別にまだ一夏にフラれたってワケでもないし！ でもコイツは私の手料理を食べたいって言うてくれてる……）

葛藤に苛まれる鈴。しかし、その心がやや利秋の方に――

「ほら、俺は料理なんざできねーし、姉貴の料理スキルも壊滅的だからな。料理できるヤツがいてくれると助かるってワケだ」

揺らぎかけたが、彼の余計な一言でそうはならなかった。昂つていた鈴の感情は一気に冷め切り、白い目で利秋を見据える。彼の言葉は告白でも何でもなかった。自分の手料理を魅力的だと言ってくれてはいたが、特別視していたわけではない。単に料理ができれば誰でもいい、それだけのことらしい。

「はあ……そんなことだと思ったわ」

「んあ、何がだよ？」

「何でもないわ」

利秋の問い掛けに対し、鈴は素っ気無くあしらう。利秋は鈴の心情を理解できず怪訝そうにするが、考えても無駄だと判断して即座に態度を切り替えた。

「まあ、そんなワケで俺の側室に迎えてやってもいいぜ？」

一応、利秋とも幼馴染であった鈴には、彼の言う『側室』がどんなものか重々理解できていたので、

「ざくんねん、丁重にお断りするわ♪」

彼の誘いを断った。

「んだよ勿体ねーなア。この銀河一天才の側室になれるんだぞ？」

「まだ一夏にフラれたワケでもないしね」

「へっ、そうかい」

利秋は特に残念がる様子もなく、清々しい微笑みを浮かべる。

「そんじゃ、オメーも落ち着いたみてーだし俺は戻っかな」

そう言うとき利秋はその場から立ち上がり、塔屋の扉の前に立ってド
アノブに手を掛ける。

「利秋！」

ふと呼び止められ、利秋はそのままの姿勢で鈴の方に顔を向けた。

「なんだ？」

「……ありがとね」

「ああ。ま、頑張れヨ」

それだけ言って利秋は自室へと戻って行った。

第十四話 鈴の涙（後書き）

I S学園の規則ってどうなってるんでしょね。門限とか厳しいイメージがありますが。というわけで何もかも独自設定です。「これは原作ではこういう風になっていたハズ」という箇所があればご指摘をお願いします。結構見落としてる設定とかありますんで。

第十五話 予期せぬ敵

クラス対抗戦当日、第二アリーナは一夏の試合ということで全席満員となっていた。それ以外にも立ち見の生徒で溢れ返っており、それでも入りきれなかった者はリアルタイムモニターで試合を観戦しているという大盛況ぶりだ。一方、利秋達はピットにてリアルタイムモニターを介して観戦していた。

現在一回戦、一夏の対戦相手は――鈴だった。戦況はというと、圧倒的に一夏が不利な状態である。まず、経験の差が歴然である。ここ数週間、ISの訓練に励んできた一夏。その訓練で培った経験は決して無駄なものではないのだが、それでも代表候補生である鈴には遠く及ばない。そして今一夏が苦戦していることの最たる原因、それが鈴のIS甲龍の特殊武装『龍砲』である。セシリアの弁によると、空間自体に圧力を掛けて砲身を作り出し、そこから生じた衝撃を砲弾として撃ち出すというものだ。勿論砲身も砲弾も肉眼で見えるものではない。故に回避することだけで精一杯のようだ。

「一夏……」

試合とは言えども、その様子は熾烈を極めている。緊迫した面持ちで観戦している筈は、思わず彼の名を呟いた。一夏を心配しているのは彼女だけではない、同じく冷静に観戦しているセシリアや千冬、真耶もその奥底では彼を心配していた。そんな彼女らとは反対に、利秋は別なことを考えていた。

（結局こいつら仲直りしなかったな……）

先日の屋上での会話で利秋から応援を受けたにも関わらず、鈴はとうとうこの日まで一夏とろくすっぽ会話も交わさなかった。修復さ

れるべき関係は徐々に悪化するばかりで、この最悪な状況を見兼ねた利秋が鈴に会話を促すも、

「できないわよ、向こうが避けるんだから」

と、はぐらかすだけだった。どちらかと言えば、避けたりしているのは彼女の方だったのだが。

余談だが利秋自身も、一時セシリアと陰悪な状態になっていた。あの日訓練をすっぽかされた事を不満に思っていた彼女は、翌朝、利秋に破裂弾の如くその不満をぶちまけた。これに対し利秋は、彼にしては珍しく自らの非を認め、何か別のことで埋め合わせをすることを約束した。そのこともあってセシリアの怒りは何とか収まり、両者の陰悪な状態は本当に一時的なもので済んだのだが。

そんなこんなで彼らがギクシャクしているうちに、クラス対抗戦の日程が発表され、一夏の一回戦の相手が鈴であるということが判明。そこで鈴は一夏に、「負けた方は勝った方の要求をひとつだけ何でも聞く」という話を持ち掛け、一夏も売り言葉に買い言葉で承諾したのだった。鈴は一夏からの謝罪を、一夏は約束の真意の説明を要求すべく試合に臨んだのだった。

戦況は先程も述べたように、鈴が優勢だ。彼女はただ謝罪を求めることだけに躍起になっているのか、はたまた今まで溜まりに溜まった鬱憤を晴らすためなのか、一夏に対して容赦なく砲撃を浴びせ続ける。一夏のシールドエネルギーは徐々に削られていき、とうとう残り百というところまで来ていた。

「今夜は『織斑一夏君残念会』、ってトコか」

「なっ！ 縁起でもないことを口にするな！ まだ勝負がついたわけでもないだろ！」

ボソリと呟く利秋に、誰よりも一夏の心配をしていた箒が怒鳴った。

「んなこと言ってもよ、アイツの実力でこっから巻き返せる可能性は相当低いぞ。『零落白夜』れいらくびやくやのバリアー無効化攻撃なら十分反撃はできるかもしれないが、今のシールドエネルギー残量からして撃ち込めるのは二、三回……あまつさえ相手は鈴だ。そう易々と当たってくれるようなヤツじゃねえ」

淡々と分析して語る利秋。一夏のISには『零落白夜』という能力が備わっていることが、ここ数日の訓練で判明していた。千冬の談によると、この『零落白夜』には相手のバリアーを切り裂いて本体に直接ダメージを与える効果があるという。つまり、相手の『絶対防御』を強制的に作動させてシールドエネルギーを大幅に削ることができるのだ。しかし、代償として自身のシールドエネルギーも削られるらしい。今無闇に『零落白夜』を発動させてしまえば、あっという間にシールドエネルギーはゼロになって自爆という形で敗北が決定する。かと言って逃げ続けても、何れは鈴に削られて負けることになる。今の一夏は進退窮まったと言える状態だ。反論の仕様もなく、箒はただ言葉を詰まらせるだけだった。

「織斑君、何かするつもりですな」

ふと呟く真耶の声に、二人はモニターへと目を向ける。モニターに映っているのは、鈴の猛攻を避けながら間合いを空けようとする一夏。追い詰めてこうとする鈴をブレードで弾いては、只管逃げ続けていた。

「イグニッション・ブースト『瞬時加速』だろう。私が教えた」

「イグニッション・ブースト？」

千冬の予測に、セシリアが疑問を浮かべる。代表候補生である彼女ですらない単語らしい。

「一瞬で敵の懷まで接近する技術だ。それなら『零落白夜』も命中させられっけど、鈴のヤツもバカじゃねえ。通用すんのは一回だけだろうな」

そんなセシリアの疑問に答えたのは、利秋だった。

「よくご存知ですわね……もしかして、私との試合の際に使ったのも『瞬時加速』ですか？」

「いんや、あれくらいの間合いなら刀の長さや抜き動作で十分詰めるからな。第一、あん時はISを動かして間もないから『瞬時加速』なんざ使えねーよ。んなことより、やるみてえだぞ一夏のヤツ」

一夏は鈴の周りを蝶のように飛び回り攪乱すると、鈴の死角から一気に加速して急接近した。『瞬時加速』である。意表を突かれた鈴は驚愕の表情を浮かべる、が一夏の攻撃が届くことはなかった。いや、攻撃すらなかった。突如現れた衝撃砲によって一夏の攻撃は阻止されていた。衝撃砲の主は明らかに鈴ではない別のもの、それが轟音を伴ってアリーナのだ真ん中を灰燼と歸さしめていた。この衝撃による地響きはピットにまで及び、モニターからはシステム破損を知らせる警告音が鳴り響く。

「な、何が起こってますの!？」

「システム破損! 何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきた

みたいです!」

声高にそう告げる真耶。

「試合中止! 織斑、鳳、直ちに退避しろ!」

千冬は怒鳴るように二人に退避を促すが、モニターに映る二人はその場から離れようとしなない。乱入者と一戦交えるつもりのようなのだ。

「織斑君! 鳳さん! 今すぐアリーナから脱出してください!」

真耶の必死の指示も空しく響くばかり。

「けっ! アイツら聞こえてねーのか!」

アリーナへと向かうべく、足早にその場から動こうとした利秋。

「待て桐生、何処へ行くつもりだ?」

千冬はモニターから目を離さず、言葉だけで利秋を止める。

「んなの決まったらア、俺もあそこに行くんスよ」

「そうしてもらいたいのは山々だが、これを見ろ」

千冬はそう言って懷からブック型端末を取り出すと、その画面を利秋に見せた。画面に表示されているのはここ第二アリーナの状態を表す情報であり、『ゲート遮断シールドレベル4、All Gates Locked』といったメッセージが出ている。

「な、なんだこの『あつる がてす ろくけど』 ってのは？」

「これしきの英語くらい理解しろ。全ての扉がロックされたというわけだ。これでは避難することも、救援に向かうこともできない」

「オイオイ、マジかよっ」

端末をしまいながら淡々と告げる千冬。言葉にこそ感情というものがこもってはいなかったが、胸の前で組まれた腕の力みが抑圧しきれなかった苛立ちを知らせていた。己の目前で身内が窮地に立たされていることに、彼女は藁にも縋りたい気分だった。そんな千冬的心中を察する利秋は、どうにかできないものかと思案する。

「ん？　なあ、アリーナの遮断シールドってISのシールドと同じようなモンでできてるんだよな？」

「ああ、そうだが？」

利秋の疑問に千冬が答える。普段ならばここで彼の口調を諷めるところだが、状況が状況だけにそうはしなかった。

「そんなら俺のバリアー無効化攻撃で遮断シールドを切り裂いてあの中に入り込むことができるぜ。その後、あの侵入者ヤローをぶった斬ってやる」

「お前のバリアー無効化攻撃……！　確かに遮断シールドを破壊することはできるが……それは、よせ。お前のは織斑のものと比べると危険だ」

利秋のISに関してかなり把握できているのか、千冬は利秋の出撃

に反対する。当然、そんなものを知らない他の三人は疑問を浮かべながら二人のやり取りを眺めるだけだ。

「けどよ織斑先生、アイツのバリアー無効化攻撃は自分のシールドエネルギーをも消費すんだ。今の残量じゃ、ちっと撃ち込んだトコで切れちまう。だが、俺のはシールドエネルギーを消費することはない」

「確かにお前のならばシールドエネルギーは消費しないな。だが、代わりに――」

「心配いらねーっすよ。俺も天下統一及び世界征服を果たす前にくたばるつもりはねえ。それに、あの頃みてーにハマするつもりもねえ」

天下統一、世界征服などと、言ってることのどこまでが本気かは分からないが、そう告げる利秋の眼差しは真っ直ぐに、毅然としたものだった。これには流石に千冬も折れたらしく、

「……分かった、出撃を許可しよう。但し、無茶だけはするな」

「おう」

出撃を許可したのだった。早速その場から動こうとする利秋に、

「待て利秋！ 私も行く！」

と同行を求める箒の声。

「バカ言ってるじゃねーオメー、生身でISに立ち向かうつもりか

よ？ んなコトできんのはゴリラか織斑先生くれーだっつーのアデ
デッ」

拒否すべく利秋はそう言ったが、鬼と化した千冬によって咄嗟に耳
を引っ張られた。利秋のタメ口を咎めなかった彼女だが、こればかり
は見逃しはしなかったようだ。

「言い開くことはあるか？」

「す、すみません調子乗ってました……」

「ふん」

千冬は耳から指を離した。

「と、とりあえずオメーはここにいろ。一夏のこととは心配すんな、
俺があん中に入って来次第、アイツらは逃がす。あれでも中々使え
る家臣だかな」

「あ、ああ！ 頼んだ、利秋！」

箒の理解を得て、漸く利秋は動き出した。

利秋が全速力で向かった先は、アリーナの入場口近く。そこには、ISで武装した多数の三年の精鋭達がロックが解除され次第、出撃できるよう待機していた。

「そこどいてくれ！」

利秋の叫ぶ声に、三年生の視線が一気に彼へと集まる。

「あなたは！……確か一年の男子の桐生利秋君？」

「ああ、俺の名前を覚えているとは殊勝なことじゃ本当なら今褒美をやってもいいトコだが、アイツらを助けんのが先決だ！そこをこじ開けるからどいててくれ！」

「こじ開けるって、この扉の先にもレベル4の遮断シールドが張られているのよ！……まさか、黒魔術を使って？」

三年の一人が利秋にそう訊ねた。黒魔術、というのは以前流れた彼に関するデマだ。

（俺の悪評こんなトコまで流れてやがんのかよ！）

「ちげーよ！第一そいつはデマだ！俺のISでシールドごとその扉をぶっ壊すんだよ！とりあえず細かい説明をしている暇はねえ、ンドウバアアー！」

そう言うや突如奇声を発する利秋。これだけだと只の危ない人間としか思われないのだが、これは彼のIS呼び出しの掛け声だったりするので問題ない。瞬く間に虹色に輝く光に包まれ、彼の勝色のI

Sが姿を顕わにする。

（使うのはこれが初めてだが……はてどんなモンか……『ばっさんがいせい拔山蓋世』

刀——『夕霧』を持つ右手に力を込める。すると、鎬の溝を境に刀身が二つに割れ、中から青白い光の刀身が火柱が噴き上げるように姿を現した。眩く輝く光は辺り一帯へと反射し、青白く染め上げてゆく。

「キエエエ!」

利秋は光輝く刀を高く振り翳し、それを扉に向かって振り下ろした。その白刃一閃は鉄を打つような甲高い音を響かせると共に、堅硬な鉄製の扉諸共、不可視の遮断シールドを切り裂いた。

「ほ、本当にシールドを切り開いた……」

「こっからは俺一人で行くからアンタらは避難しきれていないヤツらの誘導を頼む! 生憎と連携訓練をしてねーもんだからな!」

利秋はそう言うと、三年達の返答も聞かずにアリーナへと向かうのだった。

第十六話 利秋と鈴

鈴は飛び回る敵機目掛けて、『龍砲』を連発する。その悉くを敵は軽やかに避け、外れた砲撃が地面を抉り散らす。漸く一発が命中し、敵は一瞬紫電を放ちながらよろめいた。

「一夏！ 今のうち！」

「うおおおおおっ！！！」

大きな雄叫びと共に、一夏は『零落白夜』を発動させ、敵機目掛けて渾身の一撃を繰り出す。しかし、その一撃はかすることなく容易にかわされた。

「くっ！」

大振りしたことで今度は一夏に大きな隙ができてしまい、敵はかさず反撃を繰り出した。やられまいと、一夏も攻撃を上手く避けつつ距離を取る。

「一夏、バカッ！ ちゃんと狙いなさいよ！ これで四回目じゃない！」

「狙ってるっつーの！」

すっかりと焦燥に駆られてしまったのか、二人は怒鳴り声でやり取りをする。二人が焦るのも無理はない。鈴の言う通り一夏が攻撃に出たのはこれが四回目で、かなり無駄にシールドエネルギーを浪費してしまっている。このままこの状態が続けば、先に参るのは彼ら

の方なのだ。一夏は自分のシールドエネルギー残量を確認し、バリ
アー無効化攻撃を撃てる余裕があと一回しかないことを悟る。

「一夏、離脱っ！」

「お、おう！」

無尽蔵な程に撃ち込まれてくるビーム砲撃を、二人は距離を離しな
がら避けていく。

「ああもう！ めんどくさいわねコイツ！」

尖り声を出しながら、鈴は衝撃砲を展開させて応戦するが、肉眼で
は捉えられないはずのそれはいとも簡単に打ち落とされる。

「鈴！」

鈴が時間稼ぎをしてくれたこともあって、ひとまず一夏は射程距離
外へと逃げることはできた。しかし、鈴は未だ砲撃の雨から抜け出
せないでいる。代表候補生だけあって、次々と襲い掛かる弾雨を
難なく避けてはいるのだが、長期化すれば当然彼女が不利だ。しか
し、助けに行こうにも一夏のシールドエネルギーはギリギリの状態。
鈴を助けるどころか、彼が先に撃ち落されるのがオチである。

「くっ、どうすればいいんだよ……」

狼狽しきった一夏は、悔しさ交じりに呟く。自分を助けてくれた鈴
は、目の前で苦戦を強いられているというのにどうしてやることも
できない。一夏は己の無力さに苛立ちを感じた。そんな彼の横を、
突然黒い影が風を切るように過ぎ去って行く。

「ト、トシ!？」

一夏が思わず漏らしたその名前の通り、影はISで武装した利秋だった。利秋はただ真っ直ぐと、敵機目掛けて突き進む。当然敵の方も只ならぬ乱入者の存在に気付き、標的を鈴から彼へと切り替え一斉砲火を見舞った。

「ちえやああああ!!」

利秋は進むことを止めず、咆哮を響かせながら自分を撃ち落とさんと次々に向かってくる砲弾を天に突き上げた白刃の元に切り伏せて行く。

「う、嘘でしょ……アイツ、避けるどころか真っ直ぐぶち当たって……」

利秋が標的に代わったお陰で、敵の攻撃から抜け出せた鈴。愚直としか思えない利秋の行動に啞然としている。

敵の間近まで接近した利秋は、アリーナの遮断シールドを破った時のように刀を展開させた。中から現れた光の刀身は、やや早めのリズムで点滅を繰り返している。

敵も攻撃の手を緩めようとはせず、接近して来る利秋に構わずビーム砲撃を撃ち込んできた。それでも変わらず『蜻蛉』の姿勢を保つ利秋。当然懐ががら空きになるのだが、それでも猶姿勢を崩すことなく、

「おおあああああ!!」

雲耀が閃くかのように素早く、放たれた砲撃ごと敵に一撃を浴びせ

た。肩から股にかけて決るように刀傷が走り、この一撃で稼動が停止した敵は真下へと落下してゆく。利秋が乱入してからここまで、僅か一分のことであった。

「トシ！」

敵の反応が無くなったことを確認すると、一夏と鈴は未だ空中に止まっている利秋の元へと近付いた。聞きたいことが積もる程にあるのだがまずは感謝の言葉を述べよう、そう思っで一夏が口を開けようとしたその時――

「え……」

利秋は両腕それぞれを、二人の肩へと回し、その身を二人に預けた。

「肩貸せ、ちゃんと返すからよ……」

そう言う利秋の顔からは、極度の疲労感が垣間見えた。呼吸の荒さが目立っているし、額からは脂汗が滲み出ている。浮かべている笑顔が瘦せ我慢であるのは明らかだ。

「ちょ！ アンタ大丈夫なの！？ すっごく酷い顔してるわよ！？」

「耳元で喚くな頭に響く……それから人のコトブサイクみてえに言っ
ってんじゃねえ……」

抑揚の無い声で利秋は返事する。喋ることですら余裕がなさそうなので、二人はなるべく今の利秋に声を掛けないようにしようと思った。

（しかし、なんで圧倒的に勝っていたのにトシはこんなことになってるんだ？ セシリアと戦った時はこんなことにならなかった筈なのに……）

一夏はそんな疑問を抱えながら、鈴と共に利秋を担いでアリーナから脱出するのだった。

「つつつ……………」

意識を取り戻した利秋は、いつもより重く思える体を起こすと大いに混乱した。自分がいつの間にか医務室のベッドに横たわっていたことに。それから、大きな疑問が浮かぶ。一体自分はいつから気を失っていたのか。一夏達に担がれアリーナを出たところまでは覚えていたのだが、そこから先のことが一切記憶に残っていない。

「気が付いたようだな」

仕切りのカーテンを引く音と共に声が聞こえたので、そちらへと視線を向ける。千冬だった。ゆっくりとした足取りで利秋の傍に寄り、

「ぐえ！？」

病み上がりである彼の頭上に拳骨を見舞うという、一般人から見れば非道德的なことをやってのけた。思わず涙を目に浮かべ、利秋は頭を押さえる。

「私はあの時、無茶だけはするなと釘を刺しておいた筈だ。結局お前は無茶をしてこの様、呆れて罰する気にもならん」

（殴んのは罰じゃねーのかよ……）

「とにかく無事で何よりだったが……今回初めてあの攻撃を使用して、如何にあの攻撃の反動が大きいかお前も分かっただろう。ああいう無茶はもうするな。こんなことでお前に死なれては、お前の姉に合わす顔がない」

そう語る口調こそ淡々としたものだったが、強く訴えかけようという悲痛な思いが見て取れた。

「言ったでしょ、俺は宇宙征服するまでくたばるつもりはねーって」
はて、そんなことを言ったか。千冬の覚えている限りでは、彼は天下統一、世界征服をするまで死ぬつもりはないと言い張った筈なのだが。

「ふっ、そうだったな」

野望のスケールが大きくなってる気がしなくてもないのだが、とりあえず同調した。

「利秋」

急に名前で呼ばれ、利秋は目を丸くさせる。どう聞いても自分を呼んだ声は目の前の千冬だ、というかこの場には自分と彼女しかいない。いくら親しい間柄とはいえ、学園内では名前で呼ばれることがなかっただけに驚かずにはいられなかった。

「あいつの姉として、礼を言う」

「……別に、どーしよーもねー家臣の助太刀に入っただけのことっすよ」

「そうか……では、私は仕事に戻るが、お前も少し休んだら部屋に戻るがいい」

「うい」

千冬が医務室から出て行くのを見届けると、利秋は上半身を思い切りベッドに倒し込んで再び眠りに就くのだった。

「利秋……」

「おー」

「へ？ うっきゃあああああ！？」

目を覚ますや、突然耳元で名前を呼ばれた気がしたので利秋は反射的に返事をした。そして返ってきた反応が、医務室という静かにしなければならぬような場所に相応しくない、甲高くよく響く叫び声。目を開いて見ると、素早い足取りで部屋の隅っこへと後ずさりする鈴の姿があった。

「起き抜けだったのにうつせーな……サルのモノマネか？」

「ち、違うわよ馬鹿！」

「じゃあ何だってんだよ」

問い詰められ、鈴は言葉に詰まる。しかし説明するわけにはいかない。自分が何をしようとしていたのかがバレてしまうから。物真似と言われた時にムキにならずに肯定しておけば良かったと、彼女はほんの少し前の自分を呪いたくなった。

「なんでもないわよ馬鹿！」

的確な返答も思い浮かばず、切羽詰った鈴はやケクソ気味にそう答えた。

「ふーん、そ」

苦し紛れに出た言い訳にも関わらず、利秋は一応納得したようでそれ以上追究しようとはしなかった。単に彼にとっては追及する程のことでもなかったただけなのだろうが。

「ねえ……」

「あ？」

「アンタさ、急に気を失っちゃったからびっくりしたんだけど一体どうしたの？　もしかしてあの『零落白夜』みたいなのが原因とか……？」

「ああ、アレは『拔山蓋世』っつーんだけどよ。『零落白夜』と性能は似てるんだが、代償となるモンが違う。アレを使うと……腹が減る」

真面目な顔でそう告げる利秋。暫くの沈黙を経て、鈴が口を開いた。

「……はあ？　どう考えてもそんなわけじゃない！　あの時のアンタ、とてもお腹が減って苦しいって顔じゃなかったわよ！？」

「なんだオメーこの俺が嘔吐しているとでも言いてーのか？　疑うのはいいけどよ、その代わりさっきオメーがサルのモノマネじゃなくて何しようとしてたか聞いてやるぞ？」

まさか解決した筈のことを掘り返されるとは思わず、鈴は再び言葉を詰まらせた。

「わ、分かったわよ！　アンタのバリアー無効化攻撃は代償としてお腹が減るのね！　まあ、アンタがそんな無茶をしてくれたお陰でアタシも一夏も無事。感謝するわ」

真実を教えてもらうには自分の秘密も晒さねばならない。これは彼女にとっては大きな代償となってしまふ為、真実を追究することは

断念せざるを得なかった。

「そういやオメー、あれから一夏とは話できたのか？」

「ん、一応ね。仲直りもしたわ……だけど、アイツのコトはもう諦めたの」

「はあ？ 諦めた？」

「うん、アンタを運び終わった後にね……箒だっけ？ あの子が一夏の元に駆けつけたんだけど、二人が喋っているのがぎこちないんだけど楽しそうで……ああ、こりゃあ敵わないわって思えたのよ。それで諦めたってワケ」

そう告げる鈴は、声に元気がなかったが何処か吹っ切れたようにも見えた。

「そんなら、オメーの料理を食う権利が俺に回ってくるってことだな」

「そうね、それでもいいかな……」

そう言いながら頬を赤らめる鈴。

「オメーの親父のメシは美味かったからよ、アレがまた食えんのは楽しみだな」

「あ、そのことなんだけど……聞いて欲しいことがあるの」

タハハと笑う利秋に、鈴はボソリと告げる。彼女の口ぶりから真面

目な話と察した利秋は、笑うのを止めて話を聞き入る姿勢に入った。

「実はね……アタシの両親、離婚しちゃったの。一年前、アタシが国に帰ることになったのもそのせい」

利秋は大した素振りも見せずに鈴の話に耳を傾けている。前に彼女が父親のことについて言及された際、不自然な言い淀みを見せてきたことから利秋には事実が分かり切っていたからだ。

「今のご時世、女の方が立場が強いからね。アタシは母さんに引き取られて……父さんとはもう一年会っていないの。元気だとは思うけどね」

そう言って鈴は微かな笑みを浮かべる。それが悲しみを紛らす為の作り笑いだということも利秋には分かり切っていたことだった。

「鈴」

「何？」

利秋はそのまま、鈴の頭へと手を伸ばして撫でる。鈴は少しの間、されるがまま呆然と突っ立っていたが、自分が何をされているのか理解するや顔を赤らめ後ずさった。

「と、突然何すんのよ!？」

「何って、慰めてやってんだが？」

「別にいいわよ! その、寂しくないって言えば嘘になっちゃうけど、もう一年も前のことなんだし、いつまでも落ち込んでいられない」

いから……」

「そーかい」

「でも……ありがとう」

小声で言う鈴に、利秋は「ああ」と短い返事をする。それからの二人は特に会話も交わさず、外の夕焼けを眺めるだけ。開けられた窓から五月の、終わろうとしている春の風が涼しげに吹き込む音だけだ。だが、鈴にとってはこんな時間が心地よく思っていた。そんな時間も長くは続かなかったのだが。

「利秋さーん！ 具合は如何ですか？ 私が看護に来たからには……って？」

優雅な口ぶりで話しながら医務室に入ってきた彼女は、突然気の抜けた声を出して固まった。セシリアだ。彼女はどす黒い眼つきで鈴を睨みながら、ツカツカと詰め寄って来る。

「どうしてあなたがいらっしゃるのかしら？ 一組の利秋さんのお見舞いには、一組の私が来るのが普通ではなくて？」

大いに怒気が含まれた声に、鈴は思わずたじろいでしまうが引き下がろうとはしなかった。

「あ、アタシは幼馴染だからいいに決まってるでしょ！ アンタなんか知り合って一ヶ月ちよいじゃない！」

「時間なんて私の利秋さんに対する想いと比べれば関係ありませんわ！ それに私は利秋さんの、その……『側室』ですから……」

やや恥らいつつそう告げるセシリアに、鈴は勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「はは〜ん。アンタ、コイツの言う『側室』の本当の意味を知らないのね」

「ど、どういうことですか?」

「まあ、簡単に言うと女の友達ってところね。そんな深い意味はないわよ」

さらっと言いのける鈴に、セシリアは頭を強く打たれるようなショックを感じた。自分が実は、今まで小さなことで舞い上がっていたということに。そして彼女の中に怒りの感情が芽生え、その矛先はベッドの上で喧嘩の様子を傍観している利秋へと向かった。

「利秋さん! 私を騙しましたのね!?!」

「はっ? 騙すとはなんだ人聞きの悪い――イデデデ!」

「問答無用ですわ!」

言い訳をする暇も与えられず、利秋は後ろ髪を思い切り引っ張られるのだった。二人が暴れている横で、鈴はほくそ笑む。彼女が覚えている限りだと、(本人に悪気はないが)こうして利秋に騙されていたことに気付いた女は、その後彼に寄ろうとはしなかった。つまり、このセシリアも今後一切利秋に寄ろうとはしないだろう。鈴は密かな企みの成功を喜んでいた。

だが、鈴は気付かなかった。セシリアは今までに利秋に騙されてき

た女の中では一味違っていたことに。

（こうなれば、いつか必ず私に振り向かせて見せますわ！）

セシリアは諦めたり幻滅したりせず、寧ろ胸に秘めた志を強く燃やすのだった。

第十六話 利秋と鈴（後書き）

長い戦闘の話になるかと思っただらあつという間に終了。医務室での会話がメインに。ボルガ博士、（あつけない戦闘描写）お許しください。

四方山話一 桐生利秋に英語を（前書き）

大したオチもない小話です。

四方山話一 桐生利秋に英語を

IS学園——IS操縦者育成を目的とした特殊国立高等学校。そして、定められた規定の通り、大半の時間をISの学習に費やしている。だが、授業数こそ少ないものの、一般教科も履修することが定められている。何故このような説明をいきなりするのかと言うと……

六時限目の英語の授業では、先週行われた抜き打ち小テストの答案用紙が返却された。抜き打ちといっても、英語の意味を記述する問題がたったの十問と、復習さえしておけば満点すら容易いものではあった。秀才揃いのIS学園ということもあって、ほぼ全員が満点ではあったのだが……

——放課後

「俺は二点……トシはどうだった？」

「ふんっ、この通りよ」

酷い点数に落胆しながら訊ねてくる一夏に、利秋は得意気に自らの答案用紙を突き出す。全ての答えに赤いペケが付けられており、「0」の横に「マジメにやりなさい」という走り書きが添えられていた。

「この通りって……酷いな」

「酷いとはなんだ酷いとは。第一、日本人なんだから英語なんざ学ぶ必要ねーだろ」

「どういう理屈だよ……でも、勉強しといた方がいいんじゃないか？　このまま期末テストで赤点取っちゃったら留年になるし」

人のこと言える状態じゃないけどな、と一夏は苦笑いしながら言う。

「そしたら自主退学して、永遠のニート生活を満喫すー」

そこまで言って、利秋はあることに気付いて口を止めた。

（待てよ、仮に俺が退学しちゃったとして……そしたらどーなるんだ。俺が廃人ニート生活送ってる間、コイツは着々とエリートコースまっしぐらなんてことも有り得る。そしてコイツは最高の女をベ○ツの助手席に乗つけて、俺にムカツ腹が立つぐれー自慢して来やがって……）

利秋は次々と（彼にとって）最悪のシナリオを頭の中に張り巡らせ、

「そ、そーだな。留年はいかんよな」

考えを改めるのだった。説得が上手くいったことに、一夏はホッと胸を撫で下ろす。親友が墮落していくのを見過ごせないというものもあるのだが、もし利秋が退学してしまえば男子生徒は彼一人、肩身の狭い学園生活を送る羽目になるからだ。そういうわけで安堵する一夏だったのだが、そんな彼を利秋は突然殴った。

「いってえ何すんだいきなり!？」

理不尽な暴力に、当然一夏は抗議する。

「俺より先にベ○ツ買うんじゃないぞ」

「は!？」

それだけ告げて、利秋は去って行った。

その日の夕食時。

(つつても、英語とかどう勉強すりゃいいんだよ……)

利秋はフォークを銜えながら、そんなことを考えていた。因みに彼は、一人でテーブル席を陣取っている。そこへ、一夏の訓練を終えたセシリアがやって来た。

「利秋さん、ご一緒によろしいかしら？」

(そういやコイツがいたな。イギリス人も英語話すんだっけか確か)

「あの、利秋さん？」

声を掛けても返事せず、自分の方を凝視してくる利秋をセシリアは怪訝に思った。

「セシリア、ちっと頼みがあんだけどよ……」

「頼み！？ 私にですか！？」

利秋の些細な言葉に、セシリアはオーバーと言えるくらい歓喜した。彼はISに関しては代表候補生である自分と同等の知識、技術を持っている。その為、自分が彼に教えられるようなことは何も無かった。彼の役に立ちたいと常日頃思っていたセシリアにとって、この些細な言葉は朗報だったのだ。

「ええ、何なりと仰って下さい！ 私の持ち得る全力を以て利秋さんのお頼みをお引き受け致しますわ！」

「お、大袈裟過ぎんだろ……実はよ、英語を教えて欲しいんだ」

「英語……ですか？」

セシリアは今までの彼の言動を思い出す。そういえば彼は、英語が苦手そうだ。spinachという英単語の意味が「ホウレン草」だということを知らずに適当に使っていたし、此間もモニターに表示された英文を無理やりなローマ字読みで朗読していた。

「おう、オメーから教わんのが一番だと思ったからな」

一番、その言葉が一層セシリアを奮い立たせることとなった。

「お任せ下さい！ 私の祖国で使われている英語と日本で学ばれている英語は微妙な違いがありますけど、是非とも利秋さんの力になって差し上げますわ！」

夕食後、英語の勉強の為に利秋の私室へと招かれたセシリア。以前来た時よりもゴチャゴチャしている部屋に驚きはしたが、これから小一時間利秋と時間を共有できることを考えればそれ程気になるとでもなかった。まずは利秋がどの程度まで英語を理解できているか、英語の問題を出したのだが。

「こ、これは予想外ですわね……」

セシリアは咄然としながら呟いた。一体、セシリアが見た利秋の解答はどんなものだったのか。以下の通りである。

次の英単語を訳しなさい。

【1】 t e a c h e r

正しい解答「先生」

利秋の解答「茶坊主」

【2】 a r m

正しい解答「腕」

利秋の解答「アルムじいさん」

【3】 s a d

正しい解答「悲しい」

利秋の解答「サド」

次の英文を訳しなさい。

【1】My father always tells us boring joke.

正しい解答「私の父はいつも私たちにつまらない冗談を言う」

利秋の解答「私の父はいつも私たちにジョッキの運び方を教える」

【2】That was many years ago.

正しい解答「それは何年も前のことだった」

利秋の解答「それは数年もの間アゴだった」

【3】Yuri Gagarin became the first person that people sent into space.

正しい解答「ユーリ・ガガーリンは、人々が宇宙に送り込んだ最初の人類になった」

利秋の解答「ユーリ・ガガーリンは、人類初の宇宙式銭湯を作った」

【4】Since the teacher is resting today, it is self-teaching.

正しい解答「今日は先生が休んでいるので、自習です」

利秋の解答「今日は茶坊主が休んでいるので、茶はセルフサービスです」

「利秋さん！ 茶坊主ってどういうことですよ!？」

「あー？ t e a c h e rはティーチャーって読むだろ。英語でティーは茶のことだし、その後もチャーとか言って茶、茶言いまくってるから茶に煩いやツのと言ってんのかなーって」

「……ジョッキの運び方とは？」

「b o r i n gって『運ぶ』って意味じゃねーのか？」

「『運ぶ』はb r i n gですわ。それに、j o k eはジョークと発音しますのよ」

「んだよそりゃあ……これでジョークかよ。こんなのジョケとしか読めねーし、どう頑張ってもジョッキだろーが」

「はあ……これは相当骨の折れることになりそうですわね……」

こうして、セシリアの長きに渡る戦いが幕を開ける。毎週四日、放課後に一時間程の英語の勉強時間を設けた。英語の成績が壊滅的な利秋に英語を教えるというのは中々苦勞することではあるのだが、彼と過ごす時間が増えると考えれば彼女には大して苦にもならなかった。いや、寧ろ歓迎すべきことだったのかもしれない。

四方山話一 桐生利秋に英語を（後書き）

英文誤訳は半分実話です。つまり筆者は英語があまり得意ではありません。というわけで、英文にミスがあったりなんてことも……

余談ですが、『六時限目の英語の授業』という箇所はアニメ版にこっそうと出てくる時間割表を参考にしています。礼法という見慣れない科目もあるなーって思ったんですが、女子校にある科目なんですよー。

第十七話 それぞれの休日

五月も終わり、六月初めの日曜日。一夏は久々に、利秋はいつも通りIS学園の外に出ていた。二人の向かった先は中学時代の悪友、五反田弾の家。

そして、彼らは三人でテレビゲームをしていた。

『大乱戦インフィニット・ストラトス』、広大な戦場を舞台に、最大四体のISが大乱戦を繰り広げるというゲーム。データは第二回目のIS世界大会『モンド・グロッソ』のものを参考に作られている。

「しかし、お前ら以外全員女子かぁ。さぞかしい思いしてんだろうな」

「してねえっつの……」

「嘔吐くなって！ お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか」

そう言いながら弾は一夏を小突く。彼の妨害策は功を成したようで、一夏の操作キャラはシールドエネルギーがゼロになって一機減ってしまった。

「な、なんて卑怯な……」

「それで利秋はどうなんだよ？」

「フッ、聞くまでもなからうが。期待の男子IS操縦者ってコトで同学年から上級生、果ては教師までもが俺に夢中。学園ですれ違う女全てが俺の側室よ」

自慢げに語りながら、利秋は一夏に止めを刺した。失格を知らせる、ナレーションの英語音声は虚しく響く。

「一応言っとくけど、嘘だからな。まあ、イギリスの代表候補生とは仲良くなったんだけどさ」

負かされた腹いせにでもと、一夏は利秋の誇大妄想をきっぱりと否定する。

「やっぱりなあ、そんなことだろうと……って、ちょっと待て!？
その英国淑女は美人なのか!？」

「おー、ツラはズバ抜けていい部類に入るんじゃないか。ちーっと変なトコあつけどよ」

(（それをお前が言うか……))

まるで示し合わせでもしていたかのように、じとりとした目で利秋を見る二人。しかしゲームしか眼中に無い利秋が彼らの視線などに気付くことはなく、動きが止まっている弾のキャラを撃破するのだった。

『Game set!! Winner... Player 1
!!』

「うお!？ きったねーぞ利秋ィ!」

「愚か者め、勝負の最中に目を逸らすヤツが悪いのよ」

「こうなりやもつかい勝負だ！ 次は二対一でやるぞ！」

弾が再戦を催促すると同時に突然、乱暴な音と共に扉が開けられた。

「お兄^{にい}！ さつきからお昼できたって言っ^いてんじゃん！」

そう怒鳴るのは弾の妹である蘭。片足を上げたままの姿勢でいるのは、扉を蹴り開けたからだろうか。

「さっさと下降りて——って一夏さん！？」

「ああ、久しぶり蘭。邪魔してる」

暫し一夏の方をポカンと見つめていた蘭は、自分の今の格好を確認する。ショートパンツにタンクトップと動きやすさを重視し、且つ露出の多い格好。あられない姿を晒していると意識した彼女は頬を染め、思わず壁の陰へと身を隠す。

「いつ、いやあゝ、あ、あのっ、来てたんですかゝ……」

そう言いながら再び、上半身だけを覗かせる蘭。

「ああ、今日はちょっと外出。家の様子見に来た序でに寄ってみたんだ」

「そ、そうですかゝ」

蘭はそう言って、作り笑いを浮かべる。その動作は微妙にぎこちなく見え、一夏は怪訝に思った。

「おい、蘭よオ。俺はシカトか」

「あー利秋さんも来てたんですねー」

「おう、俺も家の様子見がてらな」

「へーそーですか」

一夏の時とは打って変わって、利秋に対して愛想笑いをするどころか抑揚のない返事を蘭はした。実は彼女、利秋の容姿に騙されることのなかった珍しい部類の一人であり、寧ろ自堕落とした生活を送っていた彼を軽蔑しているのだ。彼によくからかわれていたというのも軽蔑の原因のひとつであるが。

「そ、そんなことより良かったら一夏さんもお昼食べてきませんか？
まだですよね？」

「あーそうだな、頂こうかな。御馳走になるよ」

「い、いえ……それで利秋さんはどーします？」

「俺は姉貴のメシを食わねーとなんねーんだ。できりゃあこっちで食いたかったんだがよ。んなコトすりゃ後が怖い」

利秋の姉、春乃。彼女の手料理をよく知っている三人は、利秋の話を聞いてつい怖気立ってしまう。彼らの反応から見る限り、不味いというレベルで済まされるようなものではないらしい。

「つつーワケで俺はここいらで退散じゃ。今回も俺の勝ちだったな」

そう言つて利秋は足早に部屋を出て行つた。勝ち逃げ宣言をされた二人だが特に悔しがったりする様子も無く、

「アイツ、これから死ぬかもしれないねーってのによくあんな平気でいられるよな……」

「ああ……」

苦行に臨み行く彼に感心するのだった。

利秋宅――

利秋は黒髪の女性と向かい合うようにしてテーブルに座っている。この女性こそ、利秋の姉こと春乃だ。利秋よりも深い射干玉めばたまのような黒の髪を腰まで伸ばしており、それとは相対的な白い素肌が眩しく思える程である。楚々とした面貌も、男女問わず惹き付けられそうな程だ。二人が囲むテーブルの上には、皿に盛られたおぞましい物質がいくつか点在している。利秋はその中のひとつ、茶色がかつたパスタであろうものを口にしてみた。

「姉貴、コイツはなんなんヨ？」

「はあ……食べてから聞くのかい？ カルボナーラだよ」

「カルボナーラ……にしちゃあ、ティラミスっぽい味がするんだが」
そう言いながら利秋はパスタをフォークで掬い上げる。掬い上げられたパスタからは、淡い茶色の雫が滴り落ちた。

「ああ、隠し味にティラミスを入れたからね」

「いや、はっきりティラミスの味って分かる時点で隠し味じゃねーだろ。第一パスタにティラミスってどういうこった」

「此間テレビで天才シェフがやってたのさ。ティラミスって相性が良いらしいよ」

「姉貴は天才シェフじゃねーだろが」

文句を零しつつも、利秋はパスタをフォークに巻き付け口に運ぶ。

「ふふふ、そう言いつつも食べてくれるよね」

「ん、まー働かずに食うメシだからな。贅沢は言えねえよ」

「あ、食べさせてもらってるって自覚はあるんだ」

（食わなかったら後が怖いしな）

利秋はそんなことを考えながら、やけに甘いパスタを顔色ひとつ変えずに食べ続けた。春乃はそんな弟を微笑ましそうに見つめていたが、表情を一転させると別の話題を持ち出した。

「そういえば千冬から聞いたよ。早速単一仕様能力を使っただって？」
ワンオフ・アビリティ

利秋はフォークを動かしていた手をピタリと止め、姉の方を見遣る。

「ワンオフ……ああ、『拔山蓋世』のことか？」

ISとの相性が最高状態に至った時に発現する、単一仕様能力。能力が発現することは稀であり、仮に発現できたとしてもそれは第二形態に移行してからの話である。一夏の『零落白夜』もこの単一仕様能力にあたり、未だ第一形態の彼らがこれを持つということは珍しい事例なのである。

「そう。前にも忠告した筈だけど、あれを無闇に使っては駄目だ。今回は気を失う程度で済んだからいいものの、度が過ぎれば死に至ることすらあるからね……」

「ああ……千冬姉ちゃんからも釘刺された」

「頼むよ。父さんや母さんがいなくなって、君にまで今度こそ本当に死なれたら僕は……だから君だけは……」

利秋にとっては姉がこれ程に悲愴の籠った声を上げることが珍しく、戸惑いながら頷くのがやっとだった。

時間は六時過ぎ。あれからすぐに寮に帰ってきた利秋は自室のベッドに寝そべりながら、ずっとI S教本を黙々と眺めていた。クラス代表決定戦の後に受け取ったものだ。彼はあれから姉の言葉が頭から離れなかったらしく、単一仕様能力を使わなくてもいいよう強くなるうとこうして勉強に勤しんでいるのである。そんなところで、ドアをノックする音が鳴った。

「利秋、いる？」

「おお」

「入るわよ」

そう言うや、確認もせずにドアを開ける鈴。次の瞬間、彼女の形相はまるで伏魔殿を開いたかのような驚愕の表情に満ちた。

「な、何よコレ……」

彼女が驚くのも無理はない。散々説明してきたが、利秋の部屋は散らかり具合が常軌を逸しており、しかも日数を重ねる毎に段々と酷くなってきている。中学時代、何度か利秋の実家を訪ねたことがあり、当然彼の散らかった自室を見てきた鈴だが、これは想像以上だったらしい。

鈴が呆気にとられる一方で、利秋は来客にも関わらず教本と睨めっこをしたままだ。

「何か用か？」

「アンタ……いい加減掃除しようとか思わないワケ！？ 男の子の部屋なら少しはしょうがないと思うけど、ここまで来たら引くわよ！」

「掃除なんかしてもまた散らかるから意味ねーだろ」

ぶっくらぼうにそう言う利秋。この反論に説得は不可能だと判断したのか、鈴は大きく溜息を吐いた後、本題を切り出した。

「食堂行こうと思った序でにアンタ誘いに来ただけどさ。行くわよね？」

「ん……もうそんな時間だったんか。よし、行ってやるからちっと待ってろ」

利秋は読んでいた教本を閉じてベッドから身を起こすと、部屋の施錠をして鈴と食堂へ向かうことにした。

食堂へ向かう途中、何人かの部屋着姿の女子とすれ違った。彼女らは一夏に声を掛けることがあっても、利秋に声を掛けることはなかった。

「アンタ、嫌われてるんじゃない？」

意地悪い笑みを浮かべながら、鈴は隣の利秋に話し掛ける。彼に言い寄ろうとする女子がいないことに対する安心感からの笑みというものもあるのだが。

「バーカ、この俺に話し掛けようにも照れ臭くて憚れんだよ」

「やー、きりうー」

妄言を吐く利秋にいきなり声を掛けてきたのは、着ぐるみのようなパジャマが目立つ布仏本音、通称『のほほん』（原作読者の方々は、この通称であるのほほんが馴染み深いと思われるので以下のほほんと表記する）。女子達が利秋から微妙な距離を置いている中、彼に積極的に接しようとする数少ない人物の一人だ。そんな彼女も利秋曰く『側室』の一人だそうで、躊躇なく利秋に抱き付いている。その様子を、最初から利秋といった鈴は面白くなさそうに見ていた。

「ねーねー。私とかなりんと一緒に夕飯しようよー」

「残念、利秋はアタシと夕飯すんの」

目の前でスキんシップを見せられ辟易としていた鈴は、ここぞとばかりにしたり顔になって主張した。しかし、この強気な姿勢の鈴にのほほんは怯むどころか、

「あー、りんりんだー」

「そ、その呼び方はやめなさいよ！」

逆に怯ませた。因みに鈴がこの呼び名を強く拒んだのには理由がある。小学生の頃、そっくりそのままこの呼び名でクラスの男子にかかわれた過去があるのだ。利秋も事情をよく知っている為か（実を言えばこのからかった男子数名を晒し者とした）、穏便にフオロ―を入れた。

「じゃあ『リンイン・オブ・ジョー・トイ』」

「それもイヤよ普通に呼びなさいよ！ つーか渾名なのになんで文字数多くなんのよ!？」

フォローは功を奏さなかった……

結局利秋の判断により、のほほんとその親友かなりんを加えた四人で同行することとなった。鈴は半分気乗りしなかったものの、現時点で最も強力なライバルであろうセシリアがいないことを考え渋々承諾した。

彼らは窓際のテーブル席を陣取った。ところで、女三人寄れば姦しいの言葉通り食堂内は大いに賑わっている。特に奥の席の賑わいが際立っており、利秋も鈴もそちらの方を見遣った。

「やけに騒がしいなあそこ。チンチロリンでもやってんのか？ それか建設ラッシュの企画とか」

「アンタ現役女子高生にどんなイメージ抱いてんのよ……大方占いでもして盛り上がってんじゃないの？」

「占いね……あんな盛り上がるモンなのかよ？」

更に聞き耳を立ててみる利秋。

「えええっ!? それ、マジで!？」

「マジで!」

「うそー! キャーどうしよう!」

女子達が声々に上げる黄色い声が、食堂内によく響く。しかし、それを気にしているのは利秋達だけのようで他の席の女子も大いに盛り上がっているだけだ。

「おいおい……こりゃマジで建設ラッシュの話で盛り上がってんじや——」

「あ、おい。隣いいか？」

利秋に突然掛けられた男の声。利秋以外にこの学園には男は二人しかいない。しかし、声の若々しさから声の主が若い男子、つまり一夏であることが分かる。

「あ、おりむー。やっほー」

「よっ」

返事をする和一夏は利秋の隣に座り込んだ。

「オメー、箒と一緒にじゃねーんかよ?」

「箒は……ちょっと色々あってな……」

言い難そうに口籠る一夏。二人の間に何かあったことは明白で、利秋は呆れたように溜息を吐きながら言った。

「なんだ嫌われてんのか。鈴の時と言い、オメー嫌われんのうめーなあ」

（アンタも人のこと言えないわよ……）

二人のやり取りを横で聞いていた鈴は、心の中でそう呟くのだった。

「にしてもよ、なーんかいつもよか騒がしいんだがオメーなんか知らねーか？」

「そりゃあ今度ある学年別個人トーナメントの話じゃないか？」

「そういえばそんなのがあったわね……」

全校生徒の参加が義務付けられている学年別個人トーナメント。一学年に生徒は約百二十名おり、その為一週間もの時間を掛けて行われる大々的な行事である。更に、IS関連企業からのスカウト、各国の主席クラスの間人間が視察に来たりと、かなり大規模の行事であることが窺い知れる。

「っておい、どーして代表候補生のオメーが覚えてねーんだよ」

と、利秋。

「うっさいわね……ちよつと忘れただけよ。そんで、私は代表候補生だから当然大丈夫なんだけどアンタらはどーなのよ？ 悪いけど

仮に当たっても容赦はしないからね」

鈴は不敵な笑みを浮かべながら自信満々に言う。それに答えたのは、同じく不敵な笑みを浮かべる利秋。

「舐めてんじゃねーよ。このトーナメントは俺にとっちゃあ世界征服の試金石、言うなればほんの小手調べじゃ」

「わゝ、さすがきりうゝ」

利秋の尊大な妄言に誰もが呆れ返って絶句する中、のほほんだけが単調なリズムの拍手を送った。尤も、手を覆い隠す程に袖の長い着ぐるみを着ている為、音が響くことがなかったのだが。

それからは何も特別な話題が挟まれることなく、食事を摂り終えてそれぞれの部屋へと戻って行ったのだった。

第十七話 それぞれの休日（後書き）

場面転換の多さ……展開について来れなかったという方、申し訳ありません。

それからやっところさ登場した利秋の姉、春乃。口調が気に喰わないって方もいるかもしれません、ごめんなさい。滅多に出ることのない人なので……

第十八話 三人目の男子

「――シ……トシ！」

「んごごお……？」

強く体を揺さぶられる感覚と、頭に響く呼び声で目を覚ます利秋。目を開けば一夏の姿がそこにはあった。そして、自分が椅子に座っていること、パソコンの電源が点いたままだということに気付く。どうやら昨夜は電源を点けたまま寝る、所謂『寝落ち』をしていたらしい。

「早く急げ、遅刻するぞ！ 序でにこれ、食堂でパン買ってきたからこれで済ませるんだ！」

そう言って一夏は片手にぶら提げたビニール袋を手渡す。袋には焼きソバパンとコッペパン、それからコーヒ―牛乳が入っており、着替えを終えた利秋はそこから焼きソバパンを手に取り頬張ると、

「ウムご苦労」

一夏に労いの言葉を掛けて貪り食った。

「よし食べたな！？ 行くぞ！」

「は？ おい待てコッペパンまだ食ってねエ――」

「食べながら行けばいいだろ！」

利秋の言うことも聞かず、一夏は強引に彼の腕を掴んで教室へと向かうのだった。

朝の1ー1教室。早朝だというのに、先日の食堂のように女子達は大いに賑わっている。その会話の内容はまちまちで、ISスーツの意見交換を行っているところもある。先日のクラス対抗戦での乱入事件で話し合っているところもある。だが、特に賑わいを見せているのが今月のトーナメントの話題だ。尤も、本題はそのトーナメントよりもとある噂の方のようであるが。

「おはよう、何盛り上がってんだ？」

入り口に立って挨拶をする一夏と、さっさと自分の席に着いて突っ伏し眠る利秋。噂話をしていた女子達は一夏の方を見ながら、

「「「な、なんでもないよ!」「」」

異口同音、慌ててひた隠しする。怪訝そうにする一夏だったが、

「席に着け、SHRを始める」

突如教室に入って来たこのクラスの担任、織斑千冬と副担任の山田

真耶。背後から聞こえる千冬の声に、一夏は思わずビクついた。さっさと席に着かなければキツイお仕置きが下されることになるので、噂話の真相を聞くことも儘ならず自分の席に着くのだった。

千冬は未だ机に突っ伏している利秋を叩いて起こすと、SHRを始めるよう真耶に促して教室の隅に立った。

「ええっと……SHRを始める前に、今日は転校生を紹介します！
転校生は、なんと二名です！ ではどうぞ！」

突然の転校生、それも一度に二人ということでクラス中が大いにざわめく。

（なんでうちのクラスに二人も？ 普通バラけさせるもんじゃないのか……）

女子達が興奮しきっている中、一夏は冷静に考え事をしていた。因みに利秋はキツイお仕置きを受けたにも関わらず、いつの間にか再び眠りに就いている。口からだらしく垂らした涎が机上に円を形成していた。

そんな中、教室のドアが開いて転校生と思しき二人が入って来た。

「失礼します」

「……」

その瞬間、ざわめきが一気に失せた。二人の内の片方は輝くように眩しく長い銀髪、無愛想にしているが整った白い顔には黒の眼帯と、中々人目を引くような姿をしていた。その出で立ち「軍人」とも形容されそうである。

だが、ざわめきが止んだ原因はもう片方の生徒にある。銀髪の転校

生とは逆に人懐っこそうな中性的な顔立ち、濃い黄金色の髪を後ろで丁寧に束ねており、ほっそりとした体躯。こちらは「貴公子」とでも形容できようか。つまり、もう一人の転校生は男なのである。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

輝くような笑顔でそう告げ、一礼する貴公子もといシャルル。（睡眠中である）利秋以外の誰もが呆気にと取られていた。

「お、男？」

一人の女子が訊ねる。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

「「きゃあああああつ!!」」

「ええっ？」

突如鳴り響く大歓声。突然のことにシャルルは驚き、一夏は脳を揺さぶられるような大音響に、堪らず耳を抑えて耐え続ける。因みにこんな状況の中でさえ、利秋はだらしなく涎を垂らして眠っていた。

「男子！ それも三人目の！」

「しかもうちのクラス！」

「しかも超美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かったあ〜〜！」

口々に叫ぶ女子達。そんな彼女らの雰囲気がいまいち不慣れな千冬は、面倒くさそうにぼやく。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに！ まだ自己紹介が終わってませんから！」

男子ということですからっかりシャルルの方へと注目が集まってしまったが、もう一人の転校生の自己紹介が終わっていない。さんざめいていた女子達は二人の教師からの言葉で再び落ち着きを見せた。この間、放っておかれていた銀髪の少女は微動だにすることなく、凍てつくような視線でクラス中を見つめながら毅然と直立していた。

「挨拶をしろ、ボーデヴィツヒ」

「はっ、教官」

教室の隅にいる千冬に向かい、敬礼しながら言う銀髪の少女ボーデヴィツヒ。軍人のような外見をした彼女は立ち振る舞いも口調も軍人そのものだった。その挙動を誰よりも一番近くで目の当たりにしていた一夏は呆気にとられる。「教官」、そう呼ばれた千冬はまたも面倒そうに溜息を吐いた。

「……ここでは私は教師、お前は生徒だ。織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう言って彼女はクラス一同へと視線を向け直させた。

「ラウラ・ボーデヴィッツだ」

「……………」

ラウラの言葉を静聴する女子達は、次の言葉を期待するべくだんまりを貫き通す。しかし、ラウラがそれ以上何も言おうとしなかったので沈黙の時間が続くだけだった。再びクラスの面々を冷たい眼差しで見据えるラウラ。しかし、目の前にいる一夏の姿を認めた瞬間、微かな反応を見せ出した。

「貴様が……」

「うん？」

彼女は静かな足取りで一夏の目の前まで歩み寄ると、訝しげにしている彼の頬を強く張り飛ばした。一切の手加減もしなかったらしく、鋭い打撃音を響かせながら一夏は大きく仰け反る。一瞬の出来事にクラス全体が驚愕した。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

一夏を見下ろしながらそう告げるラウラの目は、冷酷そのものだった。あらゆることで混乱しきっていた一夏だったが、冷静さを取り戻すと、

「いきなり何しやがるんだ!？」

痛みを抱えた右頬を押さえながら抗議した。が、彼の言葉に全く耳

を傾けずに今度は一夏の後ろの席で惰眠を貪る利秋へと、憎悪に満ちた眼差しを向ける。暫く彼の様子を窺うラウラだったが、あまりにも滑稽な彼の寝姿に苛立ちを感じたのか、

「おい貴様、起きろ」

彼に声を掛けた。

「ん……おおー、もうHRは終わったのか……」

今までどんな大音声でも目を覚まそうとしなかった利秋は、ラウラの静かな一言で目を覚ました。彼は机に突っ伏していた上体を起こし、大きく伸びをする。そして、目の前のラウラと目が合った。

「貴様が桐生利秋か？」

「ああ？ 誰だよテメーは。人様に名前聞くときはまずテメーから名乗れよ」

「さっき名乗っていたよ」、誰もがそう思っただろうが、口にしようとする者はいなかった。こんな張り詰めた雰囲気の中、口を挟もうというのが無謀過ぎる。

「ふん、生憎と貴様が間抜け面を晒している間に名乗りはした。だが、もう一度名乗ってやらんこともない、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。そして……私は貴様の存在も認めない」

そう言いながら、ラウラはより一層強く利秋を睨みつける。それに對して目を逸らすことなく、利秋は心底不機嫌そうにしながら睨み返していた。クラス一同は、先程の一夏との出来事でハラハラしな

がら様子を見守っている。しかし、ラウラが手を上げることはなく、彼女は鼻を鳴らすと利秋から視線を背けて空いている席に着いた。この短い時間で起きた幾つかの出来事に、教室の中はすっかり沈黙しきってしまう。

「あー……これでHRを終わる。各人、即座に着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS実習を行う。それから織斑、桐生、お前達がデユノアの面倒を見てやれ」

「はい」

「へい」

「では、解散！」

その言葉で沈黙が解け、それぞれが行動へと移り始めた。早速シャルルは二人の元へと寄って挨拶をするが。

「織斑君と桐生君だね？ 初めまして、僕は――」

「んなもん後回しだウエルテル。急ぐぞ」

自己紹介の間眠っていた為に彼の名を知らなかった利秋は、とりあえず彼を適当な名前で呼んで急ぎ立てた。

「えっ、僕はシャル――」

「いいからほらっ」

否応なしに一夏がシャルルの手を取り、先に教室を出た利秋の後を

追う。突然手を握られたことに驚くシャルルだったが、さつさと一夏が歩いてしまうので戸惑っている暇すらもなく追従せざるを得なかった。

「俺達はアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習の度にこれだから、早めに慣れてくれよ」

「う、うん……」

顔を仄かに赤くさせ、何やら落ち着かなさそうに答えるシャルル。訝しく思った一夏は声を掛ける。

「どうしたソワソワして？ トイレか？」

「ち、違うよ！」

「なーにやってんだオメーら。遅れちまうだろうが」

必死にシャルルが否定しているところで、先に移動していた筈の利秋が引き返して来た。どうやら（彼にとっては）行動の遅い二人を見兼ねてのようである。

「お前が速過ぎるんだって！ それにシャルルに合わせてやんねえ
といけないだろ！」

「ウム、それもそうじゃ……そんなら——」

利秋はそう言ってシャルルの手を取り、器用な動きで彼を背負った。
更に慌てふためくシャルルだったが、そんなことはお構いなしに走
り出す利秋。

「この俺にこんなことさせるのは後にも先にも一回きりだからな！
ウエルテル！」

「あの、僕は——」

「喋んな舌嚙むぞ！」

一喝して利秋はシャルルを黙らせた。

「な、なあ利秋……ウエルテルって誰だよ？」

全速力で走る利秋に、必死で追従しながら一夏が訊ねる。

「コイツのことに決まってるんだろ。「ウエルテル」って感じがすん
だろーが」

「いやどんな感じだよ……つかシャルルだよ！ シャルル・デュ
ノアって自己紹介してたじゃねーか！」

「デュノア……？」

利秋が彼の苗字を呟いたところで――

「ああっ！ 噂の転校生発見！」

「しかも織斑君達と一緒に！」

H Rを終えた各学年各クラス的女子達が大勢集まり、彼らの進路を阻んだ。後ろへ振り返ればそちらも既に女子の人ばかりで道を塞がれている。三人は完全に包囲されてしまった。

「皆！ こっちよ！」

「者共出会え出会えい！」

乗りに乗った彼女らは増援を増やし、その包囲網をより磐石なものとしていく。三人を取り囲んでいる女子の数は、あっという間に数百人にまで上った。

「きゃあきゃあ！ おんぶしてるわ！」

「二人の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

動物園の人気者でも見るかのように、彼女らはワイワイ騒ぐ。

「チッ、こうなりや奥の手よ！」

利秋はそう言うと、背負っているシャルルを落とさないように自らの懷に手を入れ、数十冊の小冊子を取り出してばら撒いた。女子達がそれに気を取られている間、一夏に目配せをして包囲網を抜ける。

「ああつ、逃げられた！」

「追うわよ！」

「ちょっと待って！ そんなことよりこれ……」

床に落ちた冊子を拾った一人の女子が、利秋達を追おうとする仲間を引き止める。後を追うことに躍起になっていた彼女らは、何事だと言わんばかりに振り向くが、冊子の表紙を目にした途端に完全にそちらへと興味を傾けてしまった。

「お、『織斑一夏総受け本』！？」

「しかも村田明里様の物だわ！」

数十冊の冊子に次々と目を輝かせて食い付く女子達。最早、利秋達を追う者は一人もいなくなり、やがてこの冊子が一クラスに付き一冊所持されるようになったとか。それはまた別の話である。

利秋の奇策によって包囲網を切り抜けられた三人。今は第二アリーナへ向かって只管走り続けている。

「それにしても、あの冊子のお陰で誰も追って来なくなったな。一体何だったんだあれは？」

「おお、コレよ」

訊ねてくる一夏に、利秋は更に一冊の冊子を取り出して手渡す。一夏は受け取った冊子の表紙を見た瞬間、表情を強張らせた。『織斑一夏総受け本』とポップな書体で記された題名に、バックには矢鱈美化された己の裸の姿が描かれていたのだから。因みに横からそれを見ていたシャルルは思わず顔を真っ赤にさせ、目を背けた。

「また春乃さんの仕業か……」

「ああ、昨日実家帰ったときになんか渡されたんよ。ファンサービスっつーコトで数百冊刷ったらしい。それがこんなトコで役に立つとは思わなかったぜ」

爽快そうに笑いながら言う利秋とは逆に、一夏はがつくしと項垂れる。

「ま、そう気イ落とすな。俺は描かれてねーから何も問題ねーよ」

「俺にとっては問題あるっつーの！」

一夏の訴えを軽く受け流す利秋。そんな二人のやり取りを見て、苦笑いするシャルルだった。

第十九話 シャルルの謎

第二アリーナの更衣室に無事辿り着いた三人。かなり急いだ為か、授業が始まるまで十分時間が余っていた。体力に自信がある利秋と彼に背負われていたシャルルは兎も角、いつもより必死に走っていた一夏は乱れた呼吸を整えている。

「自己紹介がまだだったな、俺は桐生利秋。んで、こっちでエロいこと考えてハアハア言ってるのが織斑一夏だ」

「考えてねーよ！」

「ふふふ、二人ともよろしく。僕の話はシャルルでいいよ」

おう、と利秋は返事をする、懐から今度は小冊子ではなく香水を取り出して自分に振り撒いた。

「へえ、香水するんだ。お洒落だね！」

「安物だけだな。まあ紳士の嗜みってヤツだ。……時に一夏、オメーその面はどーした？」

事情を知らない利秋は、一夏の右頬が赤くなっていることを怪しく思い訊ねた。

「あ、ああ……さっきボーデヴィツヒって奴がお前に絡んで来ただろ？ お前が起きる前にアイツに打たれたんだ」

「うん、あれにはちょっとビックリしちゃったよ……どうしていき

なりあんなことをしてきたのかな……」

先程の教室の空気を受け継いだかのように、すっかり二人は押し黙ってしまふ。その空気に居た堪れなくなった利秋が、

「シャルルは何も知らねーからな、教えといてやるか。この一夏はな、昔はそれはそれは名の知れたドチンピラでな、片っ端から女と遊んでは捨てていきよったんヨ。ボーデヴィツヒのヤツがコイツに突っ掛かってきたのも、恐らくそれが関係してるんじゃない」

「そんなわけないだろ！ だったらアイツがお前にも突っ掛かってきたのは何だったんだよ！？」

「そりゃオメー、俺が天才だからに決まってるんだろ。この天才の存在に危惧の念を抱いて、あんな風に睨んできたんだろーよ」

反り返りながら言う利秋に一夏は溜息を漏らす。

「全くお前は……そんなことより、アイツが突っ掛かってきた理由が何となく分かるんだけど、多分――」

「んなことよりもうすぐ時間だ、着替えっぞ」

一夏の言葉を遮って言うと、利秋はさっさと制服を脱ぎ捨てて下に着ていたTシャツも脱いだ。それに応じて一夏も上の服を脱いでいく。

「うわっ!?!」

突然小さな悲鳴を上げ、顔を両手で覆いながら二人とは反対の方向

へと視線を背けるシャルル。当然、怪訝に思った二人はシャルルに声を掛ける。

「ど、どうしたんだ……突然女みてエな声上げて……」

「そんなことより早く着替えないと遅れるぞ。うちの担任はそりやあ時間にうるさい人で――」

「う、うんっ！ 着替えるよ！ だから、その……あっち向いててくれないかなっ？」

シャルルの不自然な願いに一層怪しむ二人だったが、断る理由があるわけでもなかったので言われた通りに反対の方向を向いた。着替えを続けながら、一夏はシャルルに聞こえないくらいの小声で利秋に話し掛ける。

「なあ……シャルルはどうして俺らにこんなことさせると思う？」

「誰にも見られたかねーモンでもあるんじゃないか？ 背一面に刺青がしてあるとか、或いはその昔、滝行に勤しむ弟を流木から庇ったが為にできた大きな傷跡があるとか……」

「刺青は兎も角、傷跡の件は何なんだよ。どっかで見たことあるぞそれ……だけど、気になるよな」

「まあ、あんま気にしてやんな。人の嫌がるコトはやるもんじゃねーぞ」

（お前が言うなよ）

どうも腑に落ちない一夏だったが、細かいことはあまり気にしない（悪く言えばいい加減な）利秋に諭されそれ以上詮索をしようとはしなかった。ともあれ、シャルルは彼らに見られることなくスムーズに着替えを済ますことができた。

「遅い！」

「速い！　大きい！　柔らかい！」

グラウンドに入るなり、千冬から怒鳴られた利秋は即座に大声を上げて反応した。ツツコミとして、手裏剣の如く飛んで来た出席簿が彼の顔面にクリーンヒットする。一組一同にとってこの光景は日常茶飯事なので今更何のリアクションも取ることはなかったが、（鈴を除く）二組とシャルルは啞然としていた。

「下らんことをほざいている暇があったらさっさと並べ！」

そう言われ、一夏とシャルルは即座に一組の列の最後尾へ、利秋は足下に落ちた出席簿を千冬に渡してから列に加わる。

「では、本日より格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「「はい！」」」」

合同実習ということで、いつもよりも声量のある返事が響く。それに千冬は軽く頷くと、

「まずは戦闘を実演してもらおう。鳳！　オルコット！」

「は、はい！」

咄嗟に名前を呼ばれ、二人は慌てつつ返事をした。

「専用機持ちならすぐにも始められるだろう。前に出ろ」

「はぁーめんどいなぁ……なんでアタシが……」

「はぁ……こういうのは見世物のようで気が進みませんわね……」

不平を口に漏らしながら、あまり気乗りしないように前へと出る鈴とセシリア。そんな二人に呆れる千冬だったが、ここで一計を案じることにした。

「お前ら少しはやる気を出せ……あいつに良い所を見せられるぞ？」

ボソリとそう告げられ、ハツとなる二人。

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せ付けるいい機会よね！　専用機持ちの！」

先程までの面倒くさそうな声色は何処へやら、ポーズを決めながら言う二人の声には活気が漲っていた。そんな現金な二人に苦笑いする一同。

一方で、最後尾にいた利秋達三人は千冬の小声が聞こえなかったのだ。彼女が二人にどのような魔術をかけたのか気になっているようだ。

「今、先生何て言ったの？」

「一生ニートさせてやるぞ、とかじゃねーの？」

「そりゃお前の願望だろ……」

結局、三人が真実を見出すことは無かった。

「それでお相手は何方かしら？　鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふーん、こっちの台詞♪ 返り討ちよ」

すっかり乗り気になった二人は、互いに挑発し合う。

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は——」

そこで風を切るような音が、少しずつその大きさを増してゆく。音の聞こえる上空、蒼天の彼方からひとつの影が飛来してきた。

「うあああーん！！　ど、どいてくださーい！」

影の正体はフランス製の量産型IS『ラファール・リヴァイヴ』を身に纏った真耶。どういうわけか制御不能に陥ったらしく、不安定

な体勢を取りながら飛行、いや墜落して行ってる。その先には利秋と一夏。

「やべェ！」

退避するには遅すぎると判断した利秋は咄嗟に一夏を突き飛ばし、自分だけがその衝撃を諸に受けた。その場に砂埃が立ち込め、二人がどうなってしまったのかは周りからは分からない。

「トシ！ 無事か!？」

利秋に突き飛ばされたお陰で事無きを得た一夏は、砂埃の元へと駆け寄り声を掛ける。周りの者達も心配そうに様子を見守っていたが、やがて砂埃が治まると様子が顕わになった。

「まったく、山田先生も地球に落ちてきたベジータっすか……」

「す、すみませ〜ん……」

二人共何事も無かったようで普通に言葉を交わしている。そこまでは良かったが、二人の体勢に大きな問題があった。互いに抱き合うような形になっていたのである。しかも、頭の位置が互い違いになるように。

「な、なんて格好してんだよ……」

「誤解すんな、こういう体勢を取ることでローリングがしやすくなるように――」

その瞬間、弁明する利秋を黙らせるように青白いレーザーが彼の眼

前を掠めた。ギョツとした利秋がレーザーの主を辿った先には、凜とした笑顔を浮かべながら青筋を立てたセシリアの姿。

「ホホホホ……残念です、外してしまいましたわ」

微妙に荒々しく聞こえる語気が、本気で残念がっていることを物語っている。

「ぞ、ざっけんなオメー！ 殺す気か!？」

そうやって利秋がセシリアに突っ掛かるのも束の間、今度は彼の背後から金属同士が打ち合う音が鳴り響くと共に、禍々しい殺気が感じられた。恐る恐る彼が振り返ると、武器『双天牙月』を構えた鈴の姿があった。目が合った瞬間、彼女は何の予告も無しにそれを力の限り投げ飛ばしてきた。

「オメーもかよ!？」

このまま突っ立っていれば冗談抜きに死ぬ、そう判断した利秋は自分もISを展開させて応戦しようとしたがそれには及ばなかった。二度の射撃音が鳴るや、双天牙月は利秋への進路を大きく反れて飛んだ後、地面に深く突き刺さった。射撃音の主は、スナイパーのようにライフルを構えた真耶。そこに、先程までの頼りなさげな顔は無かった。

「桐生君、お怪我はありませんか？」

「なんとか……んなことよか先生スゲーっすよ!」

目を輝かせて言う利秋に、やや困惑気味の真耶。しかし、周りの生

徒達も口々に賞賛してくれるので満更でもなさそうにしている。

「さて、そろそろ始めるぞ小娘共」

頃合いを見て千冬が言った。しかし、理解の追いつかぬセシリアと鈴は二人してポカンとする。

「え？ あのだ……二対一で？」

「いや、流石にそれは――」

「安心しろ、今のお前達ならすぐ負ける」

含み笑いをしながらの千冬の言葉にムキになった二人は、顰めっ面になった。代表候補生だというのに軽んじられたことが許せないらしい。また、それは二人がよっぽど大きな自信を持っていることの表れでもあった。

「では、始め！」

その言葉で、戦いの火蓋が切られた。

あれ程自信に満ち溢れていたセシリアと鈴は、グラウンドに大きな穴を穿ち二人仲良く絡まりながら倒れていた。その近くに、ゆっくりと真耶が降りて来る。結果は二人の完敗。二人が滑稽な格好のまま言い争いをしている間、

「やっぱ俺の予想通りだな。一夏、後で千円よこせヨ」

「だから俺はしないって言ってるだろ！　つかクラスメイトで賭け事とか最悪だなお前！」

利秋と一夏は賭けをしていた。尤も、一夏は反対し続けていたが。そこに千冬の制裁が下されたことは言うまでもないだろう。何故か一夏まで。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。次に、グループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやる事。では別れる」

現時点での専用機持ちは一夏、利秋、セシリア、鈴の四人に今日転校して来たシャルとラウラの二人。つまり六つのグループに分かれる筈なのだが、千冬から指示が下された瞬間に二つの大きなグループが形成された。一夏とシャルルの大派閥である。

「均等に出席番号順に分かれろ。さもなくば今日はISを背負ってグラウンド百周させるぞ！」

見兼ねた千冬のその一言で、大派閥を形成していた女子達は仕方なさそうに均等に分かれていった。利秋の元に集まった女子達は、皆不安そうに彼を見つめる。しかし意外にも教え方の丁寧な利秋に、一同は心の中で僅かに利秋に対する評価を上げたのだった。他の班

も順調に進んではいたようだが、ラウラの班だけは滞りを見せており、特別措置として真耶が派遣された。

紆余曲折を経ながらも何とか全員が起動テストを終え、格納庫に訓練機を収容する作業へ移った。かなり力のいる仕事で、一夏と利秋は半ば押し付けられる形に、シャルルは何故か体育会系の女子達が率先して片付けに入るのだった。

「くあゝ、かったりイゝ。この学園ならなんでもあると思ってたがアレが手作業だなんてな……」

心底だるそうにする利秋に同調するように、一夏は溜息を吐く。

「ホントだよな……まあ、さっさと着替えるか。行こうぜシャルル」

「え！ ええっと、僕はちよつと機体の微調整をしていくから二人は先に着替えててよ。結構時間掛かるし、先に戻っていいからね？」

「別に待ってもいいぞ？ 俺は待つのには――」

そこで一夏は突如言葉を詰まらした。背後に回っていた利秋から『膝カックン』を喰らわされたからである。

「そんじゃ俺らは先着替えとくから、行ってこい」

「う、うん！ ありがとう利秋！」

一瞬、ホツとしたような表情を見せてシャルルはそう言った。利秋はバランスを崩して腰を落とした一夏を引っ掴むと、彼を引き摺りながら更衣室へと向かう。

「な、何すんだトシ」

「一夏、この世で最も悪いことは人を信用できないことだぞ」

「それはそうかもしれないけど、お前が言うと言得力ないよな……」

こうして、彼らがシャルルの秘密を知ることとは無かった。

第二十話 シャルルとの五日間

「どういうことだ……」

「ん？ 大勢で食った方が美味しいだろ」

物々しい表情を浮かべながら言う箒に一夏は説明する。時間は昼食時。手入れの施された屋上には二人の他に、利秋、セシリア、鈴、それからシャルルという面々が揃っていた。

箒の予定では一夏と二人きりで昼食を取ることになっていたのだが、あろうことか一夏は他の面々にも同行を呼び掛けていたのだった。

「それに転校して来たばかりのシャルルは右も左も分からないだろうし」

「それはそうだが……」

箒は了承の意を表しながらも、いまいち納得がいかないよう低く唸る。箒の心中を察している利秋はとりあえず、同情するような視線を送った。箒が悶々としている横で、セシリアと鈴は互いに睨み合い火花を散らしている。昼食を取るだけですっかりこのような修羅場ができていることに、戦々恐々としたシャルルは隣の利秋に尋ねた。

「ええっと……ホントに僕が同席して良かったのかな？」

「ああ、いつもこんな感じだからあんま気にすんな。それにオメーの面倒を見るよう千冬姉ちゃんに頼まれてっからよ、部屋も同室みてーだしな」

「……ありがとう。利秋って優しいね」

男でありながら、柔らかい楚々とした笑顔を浮かべながらシャルルが言う。同性から見てもその振舞いは魅力的に思える程だ。

「あつたりめーよ。何せ中学では『人助け半次郎』と呼ばれとったからな」

「何言ってるのよ。そんな渾名聞いたことないし、そもそもアンタ殆ど学校行ってなかったじゃない」

利秋の大法螺にそうツツコミを入れると、鈴は手元のタッパーを開けた。

「ほー、酢豚か」

「そ、今朝作ったのよ。食べたいって言ってたからね」

そこで急に、セシリアがわざとらしくコホンコホンと咳払いをする。

「利秋さん、私も今朝は偶々偶然早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの」

セシリアがそう言いながら差し出したバスケットには、結構な量のサンドイッチがぎっしりと詰められている。挟んである具もかなりの物で、見栄えは良かった。

「イギリスにも美味しい物があることを納得して頂きたかったので……」

「オメーらよく朝っぱらから料理なんてできるな……俺なら二度寝すっぞ……まあ、とりあえず一個食ってみっか」

サンドイッチをひとつ手に取り、ひと齧りする利秋。彼の反応をセシリアは心配そうに窺うが、利秋は特にこれと言った反応を見せず、

「……………姉貴と同じ味がすんな」

そうとだけ言って完食した。しかし、その一言でセシリアとシャルル以外の者がギョツとする。利秋の言葉の真意など知る由もないセシリアは、

「まあ！ 利秋さんのお姉様と同じだなんて光栄至極ですわ！」

と大いに喜ぶのだった。ところで、真意を知る幼馴染三人は互いに目配せをして会話をしているのだが……

（要するにマズいってことよね……）

（な、なあ……本当のことを教えた方がいいんじゃないか？）

（しかし、あれ程喜んでいるのだ……そうするのも酷ではないのか？）

三人がそうこうしている内に、

「ところで、利秋さんのお姉様の手料理が如何な物か存じ上げていないので……私も一口——」

そう言ってセシリアもサンドイッチをひとつ手に取り、一口だけ口に含んで咀嚼する。次の瞬間、口の中に広がる嫌悪感をひしひしと感じ、一気にセシリアの顔は青ざめた。思わず吐き出してしまいそうになったがそこは淑女の意地というものか、やっとの思いで飲み込んだ。そして落ち着きを取り戻した彼女は、

「こんな物を食べさせるわけにはいきませんわ！」

と、バスケットをしまおうとしたが利秋に止められる。

「おい待てよ、まだ食ってる途中だろーが」

「で、ですが……」

「セシリア」

食い下がるセシリアに、一夏が声を掛ける。

「トシはその、春乃さんの手料理ばっか食ってたせいで、なんて言うか……味覚はあるんだが、味に対する価値観が麻痺してしまってるんだ」

「……と言いますと？」

「とりあえず腹さえ満たせばなんでもいいって感じかな」

「そ、そうなんですの……」

それを聞いたセシリアは安心するのだが、それも束の間。サンドイッチを一口食べた彼の言葉を思い出し、がっくしと肩を落とした。

「つまり、お姉様と同じく美味しくないということですね……」

「ははは……だから味のことはあんま気にすんなって。出された物はなんでも食うから」

「人を犬猫みてーに言ってんじゃねーよアホ。ところでセシリア、オメー昼はどーすんだ？」

サンドイッチを次々と食しながら利秋が訊ねる。これを食べれるのは（恐らく）彼だけなので仕方のないことなのだが、そうになると彼の言う通りセシリアの昼食がない。

「私はその……ダイエットということでは――」

「前みてーに腹の虫鳴らすハメになっぞ」

「あ、あの日の話はしないで下さいな！」

意地の悪い笑みを浮かべる利秋に、セシリアは顔を真っ赤にしながら抗議する。

「まあ……こんなんが余っちゃいるが」

そう言って利秋が懐から取り出したのは、食堂特製おにぎり。綺麗な三角の形をした三つのおにぎり、各々一個ずつ丁寧にラップにラップされている。懐に入れていた為か、セシリアが彼から受け取ったそれは生暖かい感じがした。

（利秋さんの温もり……）

「いいえ頂きますわ！是非とも！」

「お、おお？ そりゃあ何よりだ」

ところで、すっかり蚊帳の外へと追いやられた鈴は二人のやり取りを面白くなさそうに見ていながらも、静観を続けていた。しかし、なんだかんだで良い雰囲気になってきたことに我慢できず、酢豚一切れを箸で摘んで利秋に迫る。

「ちよつと利秋、アタシの酢豚も食べなさいよ！ 酢豚！」

「おお、食うから目ン玉に突っ込んでんじゃねええええ!!」

右目を押さえてのたうち回る利秋。因みにこの酢豚、隠し味に豆板醤が使われていてピリリとした辛みもあるらしい。

「目、目が辛えええええ！？」

「鈴さん！ 今利秋さんは私のサンドイッチを召し上がってらっしゃいますのよ！ 後にしていただけませんか？」

「何言ってんのよ！ アタシが先だったでしょ！？」

もがき苦しむ利秋をよそに、二人は言い争いを始める。
こんな地獄絵図が繰り広げられているその横では……

「うむ、いいものだな」

「だろ？ 美味いぜこの唐揚げ」

至って平和な二人だった。

「ここが俺の部屋。オメーは俺の家臣として今日からこの部屋に住まうことになるのじゃ」

「うわぁ……」

シャルルは、開け放たれた扉の先の光景を目の当たりにし、思わず手に提げていた荷物を床に落とした。

「なんだか結構凄いいことになってるね……」

シャルルがそう言うのも無理はなかった。拙作をご覧になっている方々ならばご存知のことかもしれないが、利秋の部屋の散らかり様

は常軌を逸している。しかし、これが彼にとっての普通であり、シャルルが何を指して「凄い」と言っているのか彼には理解できる筈も無いので、

「そーだろ、部屋にP N 3やテレビを持ってきてるのなんて俺くら
ブレイネットワーク
いだろうしなア」

そんな的外れの受け答えをした。

「いや、そうじゃなくて散らかり様が……男の子の部屋って皆こんな感じなのかな？」

「こんなもんだろ……って、オメーも男じゃねーのかよ？」

「えっ……？ あ、そ、そうだね。アハハハ……」

そう言ってぎこちない笑いを浮かべるシャルル。今朝から何度か彼の不自然な行動を見てきた利秋は一層不審に思うが、やはり矢鱈に詮索すべきではないと判断し、使われていないベッドの上の片付けに取り掛かることにした。今、ベッド上は彼の持ち込んだ漫画などで占拠されている。

「初日だから疲れてんだろ。冷蔵庫に飲みモン買い置きしてあったら好きな飲んどけ」

「う、うん。ありがとう」

シャルルのスペースを確保し終えると、二人は部屋に据え置かれたラウンドテーブルに向き合う形で座って休息を取っていた。

「ね、ねえ、利秋は部屋を掃除しようとか思わないの？」

シャルルはとりあえず冷蔵庫から取り出したペットボトル入りの紅茶を、グラスに注ぎながら訊ねた。

「しても意味ねーだろ。どうせまた散らかるんだしよ」

「でも、このまま放っておいたりしたら出てくるんじゃないかな……アレが……」

恐る恐るシャルルは言う。彼の言うアレとは、人の住処、特に汚れに汚れた部屋を標的とする、誰もが嫌うであろう黒き生命体。シャルルもまた、それが苦手なのだろう。しかし、利秋は彼の忠告に耳を傾けず、

「オメー、このセキュリティはバカにできねーぞ。なんせアリ一匹通さねーくらいだかな。現に俺はここに来てから一度も見てねエ」

読んでいる漫画から目を逸らすことなくそう答えた。

「そ、そうなんだ……」

「おー、だから安心しろ」

シャルルは投げやりな回答にまいち納得が行かなかったが、一応彼の言う事を承諾することにした。部屋の掃除も合間を見計らって自分がしようと決意したところで、別の話題を持ち出す。

「そういえば一夏は放課後も特訓しているみたいだけど、利秋はやらないの？」

「時々参加はしてるけどな。俺には他にやるべきことがあってそうそう参加できねーのよ……：：：～」

利秋が指しているのは、一時限目の模擬戦の際にシャルルが機体の解説を促されたことについて。彼の説明は程好く理路整然としており、隣で観戦していた利秋と一夏が聞き入った程である。

「そ、そうかな？」

「おうよ。そこでだ、オメーも一夏を手伝ってやってくれねーか？
丁度いい説明役がいなくてよ……：：：：：」

「うん、そんなことならお安い御用だよ」

こうして、放課後の特訓にシャルルが加わることが決まって夜が更けていった。

シャルルが転校して来てから五日目、土曜の午後。IS学園では土曜の午後は完全に自由時間となっており、アリーナも実習をする生徒の為に全て開放されている。ここ第三アリーナには、専用機持ちメンバー（滅多に参加しない利秋含む）と、シャルル見たさにかなしの数の女子が集まって来ていた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか……一応分かってるつもりだったんだが」

現在、一夏はシャルルから射撃のレクチャーを受けている。因みに、このレクチャーの前に彼と模擬戦を行ったのだが、一撃入れるどころか、間合いを詰めることすらできずに射撃でジワジワと削られて敗北を喫したのだった。

「お前の説明って分かりやすいな！」

利秋の睨んだ通り、シャルルの説明を綿が水を吸収するように一夏は理解できた。それで一夏も素直な感想を述べたのだが、それを快く思わない三人が横から、

「ふん！ 私のアドバイスは聞かない癖に」

「あんなに分かりやすく教えたやったのに」

「私の理路整然とした説明に何の不満が……」

「何言ってるんだ。オメーらの説明なんて言うなれば原始人、野蛮人、未来人の言葉だっつーの」

寛ぎながら悪態つく利秋に三人の鋭い視線が集中するが、意に介せずと言わんばかりに彼は大きな欠伸をかました。そんな時、突然アリーナ内の女子達がざわつき始める。

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソッ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど……」

彼女らの視線の先に、利秋達も目をやった。そこにいたのは黒いISを身に纏ったもう一人の転校生、ラウラ・ボーデヴィツヒ。転校初日の一悶着以来、利秋達は一度も言葉を交わしたことが無かった。睨むような鋭い目で暫く遠くを見つめていたが、一夏の姿を見つけると突き刺すようにその視線を向ける。

「……織斑一夏」

「なんだよ……?」

出会い頭に打たれたということもあり、一夏はやや訝しげな態度で返事をする。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

「嫌だ、理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある。……貴様さえいなければ教官は大会二連覇の偉業を成し遂げられていたのだ……だから私は貴様を、貴様の存在を認めない」

眼光を更に鋭くし、冷たく言い放つラウラ。様子を見守っている周りの女子達は思わず震え上がるが、その視線を向けられた一夏は毅然とした態度で拒否する。

「今やらなくていいだろ。どっちみち学年別トーナメントがあるんだから、その時にでもやろうぜ」

そう言って一夏は会話を切り上げようとした。しかし、ラウラにそのつもりはなく、

「……ならば、嫌でも戦わざるを得ないようにしてやる!」

その言葉と同時に左肩の砲身を一夏に向け、撃った。突然の事に驚いて防御することも忘れる一夏。事の成り行きを見守っていた利秋も駆けつけようとしたが、ISの展開に間に合わない。誰もが万事休すと思っていたその時、一夏の隣に立っていたシャルルが咄嗟に割って入り、

「てえっ!」

シールドで実弾を弾き飛ばしたのだった。

第二十一話 シャルルの正体

「……こんな密集空間でいきなり戦いを仕掛けるなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いんだね！」

半ば怒鳴るように言い放ちながら、六一口径アサルトカノン『ガラム』をラウラに向けるシャルル。今まで見ることのなかった彼の一面に一夏達は兎も角、彼と過ごす時間が誰よりも多かった利秋が一番に驚いていた。

「フランスの第二世代型如きで私の前に立ち塞がるとはな……」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型よりは動けるだろうからね」

互いに睨み合いが続く。二人の応酬を、誰もが石になってしまったかのように固まりながら見守っていた。そんな中、出遅れてすっかり見せ場を失っていた利秋が落ち着きを取り戻し、

「フツ、俺の家臣に掛かりゃオメーの攻撃を往なすくれえ造作もねえことよ」

とりあえずしたり顔になって威張り散らした。ラウラの目線が利秋へと移る。尤も、彼の挑発に乗ったというわけでも無さそうだが。

「貴様は……ふん、貴様のことはかねがね教官から伺っていたが、どうやら買い被りだったみたいだな。死に損ないが――」

「ッ！ その話をすんなテメエッ！！」

珍しく手玉に取られて声を荒げる利秋に、周りの者の視線が集中する。彼の必死そうな表情が、決して演技などではなく真面目に怒りと焦りを募らせているということを物語っていた。ラウラにとっても彼が突然怒鳴り声を上げたことは予想外だったらしいが、

（過去の失態を指摘された程度でこれか。やはり大した奴ではなさそうだな）

そう心の中で思い、蔑むように微笑みながら彼を見下ろした。ところで、この間もシャルルとラウラの睨み合いは膠着状態、どちらも発砲しかねない状況であった。しかし、

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎに気付いたのか、第三アリーナ担当教師の警告がスピーカーから発せられた。

「……ふん、今日は引こう」

教師の言う事に従った、と言うよりは興が削がれた、とでも言いたげにあっさりとISを収めてラウラはその場を立ち去って行く。

「一夏、大丈夫だった？」

「あ、ああ。俺は大丈夫だけど、トシの方が……」

一夏は心配そうに利秋の方を見遣る。が、

「あ？ 俺がどーしたってんだ？」

さっきまでの取り乱し様が嘘のように、利秋はケロリとしていた。

「いや、さっきスゲーキレてたから……」

「バカ言ってるじゃねー。たかが小娘の一言に俺が動揺するとも思ってるのか？」

（現に動揺してただろ……）

「ま、そろそろ切り上げっぞ。閉館時間だしな」

そう言うのと利秋はさっさと更衣室へと向かって行く。執拗にシャルルへ着替えの同行を求めようとする一夏を引き摺りながら。

「なんでいつも邪魔するんだよ！」

「うるせーいい加減しつけーぞホモ野郎」

一夏の抗議を、着替えながら軽くあしらう利秋。彼らがシャルルと更衣室に入ったのは、彼が転校して来た初日の一回きりで、その日

以来一度も着替えの際にシャルルが隣にいたことはない。

「ホモ野郎って……それは兎も角、何か色々おかしいとは思わないか？」

「まー色々おかしいとは思うけどな。誰にでも知られたくねーコトのひとつやふたつなんてあんだろーが」

喋りながら着替えていたので、一夏より先に着替え終わった利秋は彼を残してさっさと帰路に着いた。待ってくれ、という一夏の声を背に受けながら。

アリーナから寮へと向かう道。利秋は一夏と二人、歩きながら考え事をしていた。もう一人の転校生、ラウラ・ボーデヴィツヒのことを。

初対面で彼女が一夏を殴ったこと（利秋は実際に見ていなかったが）、更にその後ろにいる自分を睨み付けてきたことには理由がある。その理由は彼には分かっていたし、恐らく隣にいる一夏も分かっている。そしてつい先程、その理由が確かなものとなった。

『……貴様さえいなければ教官は大会二連覇の偉業を成し遂げられていたのだ……』

ラウラが一夏に対して言った事である。彼女の言う教官、つまり千冬はIS操縦者の第一人者であり、一回目のIS世界大会『モンド・グロッソ』で優勝したという経歴の持ち主だった。第二回目も決勝戦まで順調に上り詰め、誰もが彼女の優勝を揺ぎ無いものと信じていたのだが……

（あの日コイツが誘拐されて、隣にいた俺が助けに行こうとしたが失敗。結局決勝戦をほっぽった千冬姉ちゃんが助けに行っただよな）

理由があるにせよ、当然この試合は千冬の不戦敗となってしまった。更に、一夏の救出にドイツ軍の力を借りたらしく、その借りを返す為に彼女はドイツでISの教官として教鞭を執ることとなったのである。彼女のラウラとの縁も、ここから始まったのだろう。

（アイツがこの事情を知ってんのも、ドイツ軍に入ってるからなんだよな。にしても、ドイツ軍は一体どこまでの情報を掌握してやがんのか……）

考え込む利秋の脳裏に、再びラウラの言葉がよぎる。

『死に損ないが——』

（アイツはまさか……あの事も知ってやがんのか？ アレを他のヤツが知るんなら兎も角、一夏、コイツにだけは知られちゃなんねえ——）

「答えて下さい教官！ 何故こんな所で教師など……」

またまたラウラの言葉が脳裏をよぎった、のではなく、今度は本当に彼女の声が聞こえた。ふと利秋が声のした方へ目を向けると、面倒くさそうにしている千冬と彼女に強く訴えかけるラウラの姿があった。興味を示した利秋はすぐさま唐草模様の手ぬぐいでほっかむりをし、近くの物陰に張り込んだ。

「何やってんだよ……」

「いーからオメーもこれで姿隠せ」

そう言って利秋は、適当に懷から出した手ぬぐいを一夏に投げつけた。

（一体これを何枚持ち歩いているんだ……）

疑問に思う一夏だったが、それよりも現在目の前で起こっている事の方が重要だと判断し、とりあえず手ぬぐいを頭に被って垣根の陰に隠れる。

二人がそうこうしている間にも話が進んでいた。ラウラが言うには、千冬がこの地で教師をやっていることに不満があるらしく、再びドイツに戻って教鞭を執ってほしいとの事。そう訴えるラウラの態度は普段の冷淡な彼女からは考えられないほど子供じみていて、どこか弱々しく見えた。彼女の訴えは続く。

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません！ 意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている。そのような者達に、教官が時間を割かれる必要など

――」

「そこまですておけよ、小娘」

突如発された千冬の凄味の利いた声に、ラウラは口をつぐんでしま
う。

「少し見ない間に偉くなったな、十五歳でもう選ばれた人間気取り
とは恐れ入る」

「わ、私は……」

震えた声で、辛うじてその一言だけを口にするラウラ。しかし、弱
々しく訴える彼女の言葉を千冬は容赦なく、

「寮に戻れ、私は忙しいのだ」

低い声でそうあしらった。ラウラはもうそれ以上、何も言い返すこ
とができず失望したように早足でその場を去って行った。陰で二人
のやり取りを傍観していた利秋と一夏は、ただ呆然と立ち尽くす。

「その二人、盗み聞きか？ 異常性癖は感心せんな」

向こうを向いたまま、そう告げる千冬に思わず二人はビクリとした。

「そーなんすよ、一夏のヤローが婦女子の日常会話がすっげー気にな
るとか言い出して聞かねーもんだから――」

「お前も同罪だろうが。下らんことをやっている暇があったら自主
訓練にでも励め。そんな心持ちでは月末のトーナメントで勝ち抜い
ていけんぞ」

「「は、はい……」」

「よろしい」

二人に背を向け、その場を去ろうとする千冬。しかし、一夏がそれ
を呼び止めた。

「なあ、待ってくれ！　ラウラが言ってた、俺を千冬姉の弟は認め
ないって……あれってやっぱり、俺のせいで千冬姉が二度目の優勝
を逃したことを――」

「終わったことだ。あいつが何と言おうとお前が気に病む必要はな
い」

それだけ言って、今度こそ本当に千冬はその場を去った。小さくな
っていく姉の姿を一夏は見据え、利秋は足早に後を追う。

「……何だ？」

最早立ち止まることも面倒らしく、千冬は足早に歩きながら隣を歩
く利秋に訊ねた。利秋も歩調を合わせながら訊ねる。

「ボーデヴィツヒのヤツは、俺の身体のことを知ってんのか？」

「安心しろ、その話は誰にもしていない。それに、ドイツ軍が関わ
ったのは一夏の監禁場所だけでお前とは何の関わりもないからな」

「そーかい、それを聞いて安心しましたよ」

そうして利秋は自室へと戻って行った。

「おーっす、帰ったぞー……いねーのか？ シャルル？」

部屋中を見回すがシャルルの姿は無い。しかし、シャワールームの方からは水の滴り落ちる音が漏れていた。

（シャワーか）

そうと分かると、利秋はパソコンを起動させて椅子にもたれ掛かるように座る。因みに、部屋の中はシャルルが密かに片付けを進めているからか幾分片付いてはいた。それでもゴミが散乱していたり床に染みがあったりと、完璧とまでは言えないが。

パソコンの起動が終わり、利秋がマウスに手を乗せようとしたその時、

「キャアアアアア！！」

突然、シャワールームから女の声のような悲鳴が響く。しかし、これはシャルルの声だとすぐに分かり、

「どーしたシャルル！？」

悲鳴に驚いた利秋は椅子から跳び上がってシャワールームの前まで

駆け付けた。向こうからバタバタと駆けるような音が聞こえ、居住空間と洗面所を仕切る扉がいきなり開き出す。そして、彼の胸に糸纏わず、身体を湯で湿らせたシャルルが飛び込んできた。重い衝撃が利秋に掛かるが、シャルル自体が小柄な為受け止めるのに訳は無かった。

「何が起こった!？」

「あ、あ、アレ!　アレが!」

目に涙を浮かべ、覚束ない口ぶりで必死に何かを訴えるシャルル。当然何を言っているのか理解できる筈も無かったので、見に行くのが早いと判断した利秋はシャルルを残してシャワールームへと向かった。そこで彼が目にしたものは……

「……コイツか」

シャワールームの壁をすばしっこく這う、黒き生命体。拍子抜けした利秋はとりあえずそれを摘み、恐がるシャルルになるべく見せないようにしながら部屋の窓を開けて放った。

「さーて、これでもう問題ねーだ――」

利秋は、部屋の隅で縮こまっているシャルルの方へ振り返ったが、再び思わぬものを目にして固まった。そこに立っていたのはシャルルに違いない。しかし、そのシャルルの体つきはどう見ても女性のものだった。

「シャルルっ、オメー……」

「え……?」

何が何だか分かっていないようだったが、利秋の呼ぶ声でシャルルは自分の状況をようやく理解する。

「ひゃあっ!?!」

小さな悲鳴を上げ、慌てながら両手で自分の身体を隠すシャルル。まじまじと見てはならぬと、利秋もシャルルに背を向けた。

「とりあえずシャワールームに戻れよ」

「う、うん……」

促されるまま、シャルルは足早にシャワールームへと戻った。それを確認した利秋は、驚きのあまりパソコンで遊ぶ気にもなれず、自分のベッドに身を投げ打った。

(その線も考えちゃいたが、まさかマジだったとは……)

何度かシャルルの不審な言動を見てきた利秋は、彼の中であらゆる仮説を立ててきた。その中にはシャルルが性別を偽っているという予想もあったらしく、しかしいざ直面してみればうろたえずにはいられなかったようだ。

それから十数分程して、更衣室からシャルルが出てきた。今度は室内着のジャージを着てはいるのだが、胸の膨らみが顕わとなっている。これまではそれを隠すために何か、コルセットのようなものを捲いていたのだろう。

「よう、上がった――」

声を掛けようとした利秋だったが、途中で言葉を詰まらせた。心の底からの怒りを訴えるかのように、シャルルがこちらを睨んでいたからだ。

「僕、初日に聞いたよね？ 部屋が汚いとアレが出るんじゃないかって。そしたら利秋は出ないって言ったから安心していたんだよ？ それなのに……」

凄味の利いた声でそう語るシャルルは、今日の騒ぎでラウラを睨んだ時よりも恐ろしさを感じさせるものだった。流石の利秋もこれには反発できず、大人しく彼女の言う事に耳を傾けるしかできない。

「話さないといけないことは山ほどあるけど、まずはこの部屋を片付けるよ」

「お、おお……」

こうして、利秋によって底抜けに汚された部屋の掃除が始まった。作業は難航するものかと思われたが、シャルルのテキパキとした指示と、利秋のシャルルに対する恐怖感が功を奏して一時間弱で終わった。

第二十二話 利秋とシャルル

床の染みすら無くなった綺麗な部屋で、利秋とシャルルは向かい合うようにそれぞれのベッドに腰掛けている。シャルルはさっきの怒りに満ちた表情が嘘のように、弱々しく俯いていた。

「まー、何となくおかしいとは思ってたけどよ」

「……分かったの？」

「おお。まずオメーはセシリアよか背低かったし、声も高かったかな。けど、この歳でならそんなヤローはたまにいるだろうし、判断材料としてはちと不足してたけどな。ただ、悲鳴を上げる時も十分女みてえだったし、疑う要素はそれなりにあったぞ」

「そうだったんだ……そう思ってたなら言ってくれば良かったのに、一人で延々と偽り続けていた自分が馬鹿みたいだよ」

そう言いながら、己を嘲笑うかのように力無く笑うシャルル。

「そんなことしねーよ」

「え？」

「誰にだって知られたくねーコトなんざひとつやふたつはあるだろう。たとえば家臣にだってそんなモンはある。だったら家臣の秘密を守んのもお館様の義務だ。これからもオメーに疑わしいところがあったらも触れないでいるつもりだったし、フォローもしてやるつもりだったぜ？」

「利秋……」

シャルルには、彼の言ってる事の半分くらいが少し理解しにくかったが、とりあえず自分の秘密を守ってくれるつもりだったということだけが伝わった。

「ありがとう。でも、これだけは話しておきたいんだ。僕が何故男装をしてここに忍び込んだのかを……」

「……デュノア社の経営危機を立て直す為、広告塔として注目を浴びやすくするようにヤローの格好をした、ってトコか？」

彼の言う事に、シャルルは驚いたような顔をする。

「よくそこまで分かったね……半分当たってる」

「デュノア社の経営危機はネットの掲示板でも話題になってたからよ、そうなりや男装したのもそんな風に解釈できるだろ……って、半分？」

訊ねる利秋に、シャルルは表情を曇らせながら俯く。

「……うん、半分。これはね、僕が自ら進んでやっていることじゃなくて、命令されてるんだ。社長……父からね」

「父だア？ フツー血の繋がった娘にんなコト——」

「僕は愛人の子なんだ。父とは元々、別々に暮らしてたんだけど二年前にお母さんが亡くなって、その時に引き取られたんだ。その後

ISの適性が高いことも分かって、デュノア社のテストパイロットをやることになって……」

淡々と語られる事实に、利秋はただ哑然とする。彼には親がいた記憶が幼い頃までしか無いが、シャルルの父の、彼女に対する仕打ちがとても親の所業とは思えない。

「だけど、父と面会したのは二回だけ。普段は別邸に暮らしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれたんだ。あの時はびっくりしたよ。本妻の人から「泥棒猫の娘」呼ばわりされて殴られたんだ。参ったよ本当に。母さんも教えてくれれば良かったのにね」

愛想笑いを浮かべながら言うシャルルだったが、利秋にはそれが作り笑いだということは見抜けていた。まさか自分も笑い返すわけにも行かず、

「えげつねえな……」

シャルルが受けた仕打ちへの腹立たしさを表すかのように、低い声で呟いた。

「それで、その後は利秋が言った通りデュノア社は経営危機に陥って、立て直しの為に僕が送られてきたってわけだよ……後、さっき僕が男装することで広告塔になるって言ってたけど、もうひとつ理由があるんだ」

そこで一旦言葉を止め、昂る気持ちを抑えるようにシャルルは深呼吸をする。が、次に発せられる声からは苛立ちの感情が消えてはいなかった。

「同じ男子なら日本で話題になっている特異ケースと接触がしやすい。あわよくばその機体と本人のデータも取れるだろう……ってね。白式と隼人のデータを盗んでこいって言われたんだ、あの人に」

「つくづくクズ野郎だな……」

顔を顰めさせ、率直な思いを呟く利秋。しかし、咄嗟に自分の言った事を思い返してハッとする。

「ワ、ワリい……一応オメーの親父じゃあるんだよな。しかも話づれーことを話させちまったみたいだよ」

「ううん、別にあの人のことは家族だとか思っていないから。それに、最初にも言ったけどこれはどうしても話しておきたいことだったからね。半分愚痴を言っているみたいになってしまっちゃったけど。それから……今まで騙してごめんなさい」

深々と頭を下げるシャルル。別に彼女自身が企てた計画だというわけでもないというのに、何故謝罪をするのか。利秋はそう考えると頭を下げられたことに戸惑わずにはいられなかった。

「いやそれは別にいいんだけどよ……オメーはこれからどうすんだ？」

「え？ 利秋に正体がバレちゃったから、きっと本国に呼び戻されちゃうかな。後はどうなるか分からないけど、多分牢獄行きかもしれない……」

牢獄行き、その言葉に利秋は大きな衝撃を受ける。確かにシャルルは間諜を働いたかもしれないが、それは拒否権のない命令によるも

の。だというのにどうして自分と同年の、それも少女がそんな仕打ちを受けることになるのか。そんな理不尽に利秋は激しい憎悪すら覚え、気付けば彼女を何としてでも救うべく躍起になろうとしていた。

「牢獄って……なんでオメーがそんな目に遭わねーとなんねえんだ！？俺なんてつい此間まで引き籠もりまくりで好き放題な生活してたんだぞ！？」

どうでもいいことを主張する利秋。

「なんでって……仕方ないよ、僕に選ぶ権利はないし」

「だったら戦えよ」

「……え？」

予想だにしない利秋の言葉に、シャルルは思わず疑問の声を漏らす。

「権利がねえのなら、戦ってそれを勝ち取りゃいいんだ。その為に戦う権利は誰にでもあるって、前に本で読んだんだがイエーリングとかいうヤツは言っている」

「戦うって……一体どうやって戦うの？」

「んなこたあ俺にはまだ分かんねーよ。けどよ、考える時間は山ほどある。確かこの学園の特記事項に、国とか組織とか、外部からの干渉は一切受けないとかいうモンがあった筈。少なくとも三年は考える時間があるじゃねーか」

正確には「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」である。

「そういえばそんなものがあつたけど……よく覚えてたね、特記事項って五十五項もあるのに」

感心したように言うシャルル。

「天才に掛かりやこの程度のことは造作もねーよ、丸暗記は流石に無理だけどな。ま、これからの三年間で親父とどう戦うか考えりゃいい。この俺の力と知恵も貸してやるからヨ」

「……………借りても……………いいのかな？」

「おうよ」

恐る恐る訊ねるシャルルに、利秋は涼しい顔をして答えた。それに安心したのか、シャルルはいつもの心からの笑顔を取り戻す。

「利秋……………ありがとう」

シャルルからの感謝の一言に、利秋も笑顔で親指を立てて答えた。その時、部屋の扉が軽くノックされる音が聞こえてくる。

「利秋さん、いらっしゃいますか？」

扉の向こうから聞こえてくるのはセシリアの声。

「なんだ？」

「なんだじゃありませんわ！ 約束の勉強の時間になってもらっ
しやらないものだからこちらから出向きましたのよ」

「あー、そういや今日はセシリアの部屋でやることになってたな」

そう、英語を苦手とする利秋の為に週四回で放課後に一時間、マン
ツーマンでセシリアが英語を教授することになっていた（四方山話
一参照）。いつもならばこの部屋でやることになっているのだが、
今日は気分を変える為にもと、セシリアの部屋でやる予定になって
いた。

「まあ、入っ――」

そこまで言いかけて、利秋は言葉を止めた。ふとシャルルの方へと
目を遣る。さっきも気付いていたのだが、今のシャルルは誰がどう
見ても女だと分かる状態だ。

「ま、まずいよ！」

「ちっ！ とりあえずベッドに入ってる！」

利秋はベッドの布団を捲り、そこにシャルルを押し込む。直後、

「利秋さん？ 入りますわよ？」

一言そう言って、セシリアが部屋に入って来た。ギリギリ、シャル
ルは布団から頭だけを出した状態にいる。

「デュノアさん？　どうなさいましたの？」

「おお、ちっと風邪引いたみたいだよ」

利秋がそう言うのと、如何にも風邪を引いていますよと言わんばかりにシャルルは咳をする。どう聞いても演技としか思えない咳の仕方だったが、

「まあ、それで利秋さんが看病を？　それならば私の部屋にいらっしやらなかったのも頷けますわね……」

あっさりとセシリアは信じ込んだ。

「ところで、まだ夕食を取られてないと思うのですが、良ければ一緒にしても？」

「ん、そーだな。シャルルは具合が良くねーみてーだし、後から持つて来てやるとして……」

「決まりですわね！　では参りましょう。デュノアさん、お大事に」

「ご、ごゆっくり……」

シャルルからの返事を確認すると、セシリアはすりと利秋の腕を取って引っ張って行った。咄嗟の行動に利秋は体をよろめかせてしまうが、何とか体勢を直してセシリアの歩調に合わせる。

「ア、アンタ達何やってんのよ……」

体を密着させて二人が廊下を歩いていると、彼らの前に鈴が立ちは

だかった。鈴は二人を指差しながら、ワナワナとその体を震わせている。

「あら、鈴さん。これから私達、夕食ですよ」

「アタシが聞いてんのはそんなコトじゃなくて！　どーして腕組んでんの！？」

「殿方がレディをエスコートするのは当然じゃなくて？」

「どっちかつーとオメーがエスコートしてるよな」

しれっと言う利秋を、セシリアは「余計なことを言うな」と訴えるように軽く睨み付ける。何故睨まれたのか彼にはよく分からなかったが、とりあえず口を出すと面倒になるということだけは理解できたらしく、できるだけ口を利かないようにしようと心掛けたのだった。

「ふん、それならアタシも行くわよ！　これから夕食に行こうと思ってたトコだし」

そう言うとき鈴は利秋の横に立ち、少しの間顔を赤らめさせて何か思い悩みながら、その腕を彼の腕に絡めた。

「……鈴さん、何をしていらっしゃるのかしら？」

「男がレディをエスコートするのは当然のコトなんでしょ」

「つーかオメーら、俺が歩きづれーんだから一旦離れーいって！？」

発言の途中、いきなり顔を歪める利秋。その原因は、両翼の二人が彼の脇腹を抓ったことによる。

「アンタ、この状況でよくそんなコトが言えるわね……」

「自らの幸福を自覚しない者は犬にも劣りますわね」

「なんなんだオメーら……一体俺に何を求めてんだ……」

彼のその言葉に、二人は息が合ったようにピッタリと溜息を吐いた。

「けえって来たぞシャルル。オメーの夕食も持って来た」

「あ、おかえり。ありがとう」

シャルルはベッドから起き上がり、テーブルの上に置かれた食事へと目を遣る。そして、表情を強張らせた。

「あん？ オメー焼き魚嫌いだったっけか？」

「そ、そんなことないよっ！ 戴きますっ」

不自然な笑みを浮かべて箸を手にするが、中々食事にありつこうとしない。シャルルは悶えるような声を上げながら、箸を持った手をただ泳がせるだけだった。

「ん、箸使えねーのか？」

「う、うん、練習してはいるんだけどね……」

そう言いながらも必死に手を動かすシャルルだが、一向に箸で掴める気配はない。

「ワリイ、気が回らんかった。フォークでも貰ってきてやる」

「え？　い、いいよそこまでしてもらわなくても……」

遠慮するシャルルに、利秋は呆れたように溜息を吐いた。

「あのな……前々から思ってたけどよ、オメーは遠慮し過ぎんだよ。無遠慮なのも考えモンだが、遠慮し過ぎんのもイカンと思うぞ俺は。立っているものは親でも使えとかよく言うだろーが」

「そ、そうかな……」

「おう、だからまずは俺を家臣だと思ってみる。他に知られっと厄介だからよ、ここだけの話にしてみらうけどな」

それを聞いたシャルルは若干顔を赤らめつつモジモジするが、やがて少しずつ口を開く。

「じゃ、じゃあね……あの………利秋が食べさせて」

上目遣いでそう言うシャルルに、

「仰せ仕^{つかまつ}った」

何故か拱手^{きやうしゆ}を添えて利秋は答えた。三国志の読み過ぎか。

シャルルから箸を受け取ると、利秋は器用にテンポよく彼女の口へと運ぶ。

「気のせいかもしれないけど……利秋、妙に手馴れてない？」

「ん、そーか？」

（まあ、締め切りに追われてる姉貴に食べさせたりとかしてたからな……）

そんなわけでシャルルの食事もなく終わり、その後はこれからの話を少しだけした。例えば一夏にも秘密を打ち明けるということ。このままだと事情を知らない一夏はしつこくシャルルに迫ってくるだろうし、一夏ならば真実を知ってもうろたえたりはしないだろうという利秋の判断からである。シャルルもそれには承諾し、話も纏まったところで二人は眠ることにしたのだった。

第二十二話 利秋とシャルル（後書き）

大した捻りもなく、ほぼ原作通りの展開になりました。

ところで今回はイエーリングの言葉を引用したんですけど、アレって権利の為に戦うのは「権利Ⅱ法」であって、権利の為に戦うのは法の発展に繋がることだから戦う義務があるとか、もっと大々的な意味があるんですよね確か。ネットで色んな人の意見を見ていくともっと違う意味があったりするみたいですが、今回は「権利Ⅱ法」というのは置いといて、とりあえず原作でのシャルルの「権利はない」って台詞を見てどうしても使いたくなりました。そんなわけで「権利のための闘争」を熟読なさっている方には「ここでイエーリング引用するのってどうなの？」と思われるかもしれませんが、何卒ご容赦を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8720t/>

IS（インフィニット・ストラトス） 最凶最悪の男

2011年10月11日13時00分発行